

資料

(昭和四十三年十月)

第十三回「合宿教室」(霧島)感想文集

社団法人 国民文化研究会

刑死の直前、「留魂録」を

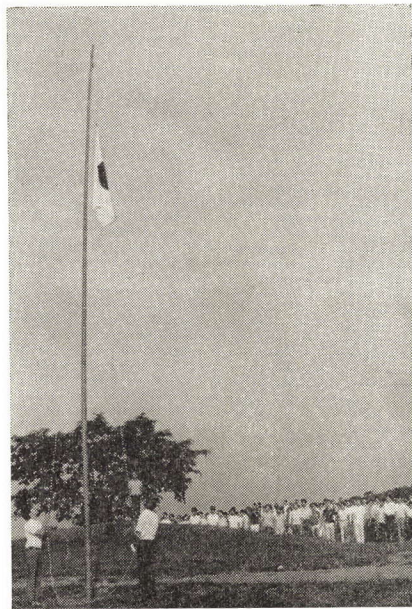
かきつけ終りて後

吉田 松陰

心なることの種々くさくさかき置きぬ思ひのこせることなかりけり
呼出しの声まつ外に今の世に待つべきことことのなかりける哉
討たれたる吾をあはれと見む人は君をあがめて夷攘えびすへよ
愚なるわれをも友とめづ人はわがとも友とめでよ人々
七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はむこころ吾忘れめや

合宿第二日目に、山田輝彦講師によってなされた和歌創作導入講義の際、紹介された幕末志士の和歌（この感想文中にしばしば引用されています）の一部をここに収録しました。

第十三回「合宿教室」
(霧島)感想文集



目 次

「はしがき」に代えて……………小田村寅二郎……………	3
「合宿教室」の日程紹介……………	6
参加学生の大学名・人数・総人数……………	13
講師・助言者などの紹介……………	14
「合宿教室」の総括的な回想……………岡山大2年・田中輝和……………	16
解散間ぎわに記した走り書きの感想文……………	275名分……………18
短歌詠草……………合宿中の創作作品……………	97
(講師・助言者を含め334名分445首)	
あとがき……………	119

「はしがき」に代えて

小田村寅二郎

いまの「大学紛争」とくに、国立大学における紛争を見てみると、「大学の自治」の内容が、わけのわからないものになってきたように見える。「自治」というからには、「自ら治める能力の有無」こそが、何にもまして先決要件である。だが、紛争にまきこまれている各大学では、その「能力」自体が麻痺してきたようだ。

学生は、もともと教官たちの教え子である。その学生たちに暴れられて、手がつけられなくなったのに、それを叱ることも、教育罰を加えることもできない。あまつさえ、学生らしからぬ連中に引きずり廻され、あげくのはては、それに媚びへつらう教官さえ出てくるというのでは、「自治」もなにも、どこかに吹き飛んでしまっている。一体どうしてこんなことになってしまったのか。そのところを虚心坦懐につきつめて見ることが、現下の大切な課題だ、と私は思う。そこで私見にはなるが、

まず第一に言えることは、最近の国立大学では、「自治」の骨幹ともいいうべき「権利」と「義務」の二つが、ちぐはぐになってしまった。権利のことばかりが強調されて、義務については、関心が薄らいできたように見える。一例をあげれば、学長が、学内の暴力行為の排除を警察に要請する。すると、学生ばかりか、教授たちまでが、国家権力の大学への介入だと騒ぎ立てる。暴力が悪か、警官が悪か、わけのわからないままで時が経過する。国家権力の大学への介入が悪だ、というのが、平素から口ぐせになっているので、警官の出勤と聞くとすぐに国家権力、悪の登場だ、と言わんばかりである。ところがそういう教授も助手も実は、警官と同じの政府の国家公務員ではないのか。教官たちの国家公務員としての自覚が、改めて問われる事態になってきてしまった。

第二に、国立大学の「自治」の前提には、当然に祖国の伝統に対しても、重大な責任があるはずである。とこ

ろが、その心構えについては、いつも抽象的でお題目的な言い方で事が片づけられてしまい、大学人の心の中でそれが肯定されているのか、それとも否定されているのか、その一番大切なポイント、一人びとりの心の中の問題は、いつも避けられてきてしまった。すべての教官がそうではなかるうが、国立大学の自治なるものが、かりに時の政府の政治権力行使に対して、ある程度の独自性を持っていると解するにしても、「大学の自治」と「学問の自由」の言葉の蔭で、「祖国の伝統に対する否定と反抗」が「養成」されてきたことはなかったか。大学が、時の政治から一步外におかれることの意味は、実は、政治の誤りが祖国の運命を危くすることもありうるがゆえの、学問の任務のためではなかったのか。

第三には、前記のことが原因になって、自治についての反省の仕方が、これまた、自治の義務観の低下に相應して、勝手放題になったことである。もともと大学の実体を見ると、教官同士お互いのつながりは、どちらかといえば、バラバラに近い。ところが、「大学の自治」を主張する段になると、連帯感だけが、急いで組み立てられてくる。だが、その連帯感の中味は、日頃からお互いに研鑽し合っているものではないから、いきおいたいへん軽薄なもので、一部の意識分子的な教官によって、全体が左右されてしまう。もともと学者同士は、学問の専門分野における業績については、お互いに大いに尊敬しあう。けれども、人間としての全幅的な相互信頼という段になると、逆に個人への干渉とさえ錯覚して、自分から遠のいてしまう傾向がつよい。そのため、最近のようなスチューデント・パワーのエネルギーが出てくると、教官同士の一致団結などは一向に生まれ出るすべもない。はじめから、団結の要素たるべき相互間の心の交流ができていないからである。

さて、ここに編集した「感想文」ならびに「創作短歌」は、ことしの夏、九州の南端、霧島高原で挙行了した大
学教官有志協議会と国民文化研究会の共催にかかる、第十三回『合宿教室』でのものである。

全国(四十八大学)から集った大学生を主軸とする参加者全員(男子大学生百八十三名・女子大学生二十一名・小中高校教諭五十二名・一般社会人十九名・共催者側メンバー七十八名)が、四泊五日間、風光佳絶な合宿地で寝食を共にし、全期間を通じて、誠心誠意「学問―人生―祖国」について、真剣な追求を展開した。そこでは、頭先の理論討議ではなしに、人間として生きていく自己をしっかりとみつめながら、抽象論に流れないように努力しての討論であった。全参加者の熱心な姿勢は、今年も、この「合宿教室」を見事に結実させてくれたのである。

さきに私が記したいまの大学に内在する諸欠点は、ここでは、合宿の講義や班別討論、さらに和歌創作とその相互批評などによって、生活実践の中で、体験的に把握されていった。また、参加者・共催者のすべてを含めて、人間社会における一番大切なものとして、「心の平等」という世界を実現しようと試みられた。そのために、まず必要なことは、年齢の差も、大学の社会的優劣の差も、上級生下級生の差も、先輩後輩の差も、さらに、職域の差も、社会経験の差も、学問の深淺の差までも、要するに、通俗の社会生活では、ともすれば、相手の社会的地位とか履歴などに気を配りながら、われわれは、「差別感」の谷間を歩きまわっているようなものであるが、ここではそうした外的な「差別感」に価値をおかずに、お互いに、一人の人間として「まごころ」を披瀝し合う経験が積まれていった。大ぜいの人たちが心をつつして、自己と切り離せぬ民族共通の運命に心を傾けてみる。そのことの中から、心をつつして生きるということとは、一体どういうことなのか、それについて、体験的な理解が生まれていったのである。日本民族が世界の平和と人類の幸福について寄与する道が、その角度から明るく指向されていったのである。全員が、帰りがけに、走り書きで書いてくれたこの感想文は、見方によつては大層稚拙に見えるかもしれない。しかし、いまの日本がただならぬ行きづまりに当面しかけているとき、わずか三百五十名の人々とはいえ、精魂を傾けて、心の平等の世界が、この現世に実在するのだ、と知ったその印象は、すべての参加者にとって、尊い「人生の一里塚」であったことを申し添えたい。

第十三回「合宿教室」の日程紹介

と き 昭和四十三年八月三日（土）～八月七日（水）四泊五日間
と ころ 鹿児島県始良郡牧園町高千穂—霧島国立公園—「霧島第一ホテル」

第一日

開 会 式 （午後二時）

- 一、国歌斉唱（二回続けて斉唱）
- 一、黙 禱（われらの祖国を守るために、尊いいのちを捧げられた祖先のみ霊に対して黙禱を捧げた）
- 一、あいさつ



（大学教官有志協議会を代表して）

明星大学教授

奥 田 克 巳 氏



（国民文化研究会を代表して）

国民文化研究会理事長

小 田 村 寅 二 郎 氏

（参加学生を代表して）

鹿児島大学法文三年

松 木 昭 君

オリエンテーション (この合宿の目指すもの)

幹部学生を代表して決意を述べ

上智大学法 三年 津 下 有 道 君

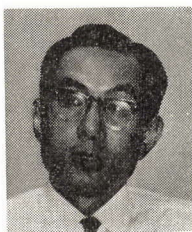
国民文化研究会の合宿運営委員を代表して

日 商 俣 沢 部 寿 孫 氏

班長の所懐表明と自己紹介 (各班に別れて行なった)

夜

○講 義 「国家の役割について」——今日の思想的混乱の一つの焦点——(一時間三十分)



鹿兒島大学助教授

川 井 修 治 氏

質疑 応 答 (三十分)

班 別 討 論 (一時間)

検 討 会

(男子学生班・二十一班の班長を五つのグループに分け、合宿教室の運営委員の司会により、
毎晩行なった)(十時半～十一時半)

運営委員会

(運営委員によるその日の検討会・十一時半より毎晩深更まで続けられた)

第 二 日

(八月四日・日曜日)

午 前

国旗掲揚・体操(七時半) (第三日以降も同じ)

○講義 「日本は共産化するか」 (二時間)



政治評論家

高谷 覚 藏 氏

質疑 応答
班別 討論 (一時間)

午 後

リクリエーション (昼食時に歌唱指導)

○講義 「これからの国造り―物心両面の理想は何か」 (二時間)



世界経済調査会理事長

木 内 信 胤 氏

質疑 応答
班別 討論 (一時間)

夜

○講義 「和歌創作の手びき」 (一時間)

福岡県立若松高校教諭

山田輝彦氏

班別討論 (二時間)

第三日

(八月五日・月曜日)

午前

○講義 『法そのもの』と『その法を生む背後にあった(立法の精神)』と。(二時間)

——近代日本(明治百年の日本)の歩みを追懐してみても現代日本の重要課題の一つを提起する——

国民文化研究会理事長・亜細亜大学講師

小田村寅二郎氏

質疑応答

班別討論 (二時間)

午後

韓国岳登山 (一時半出発・五時帰着)



和歌創作（創作総数六五〇余首）

夜

○講義 「歴史における客観的評価とはなにか」（一時間）

神奈川県立横浜翠嵐高校教諭

国 武 忠 彦 氏

質疑応答

慰霊祭（八時半～九時半）



祖国を守るために尊い生命を捧げられた、すべてのみおやのみたまを祭る慰霊祭は、篝火にうつしだされた中庭に、特設された式場で、簡単な中にも厳粛にとり行なわれた。

班別討論（三十分）

第四日

（八月六日・火曜日）

午前

○講義 「西洋文化との対照における日本文化の問題」 (二時間)



ドイツ文学者

竹山道雄氏

質疑応答

班別討論 (一時間)

記念写真撮影 (高谷・竹山両講師を囲み、全員の写真を撮った——十七頁参照)

午後

○講義 「講孟余話」 (二時間)

福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎氏

班別討論

地区別・大学別懇談会 (一時間)

夜

和歌創作講評 (一時間)

福岡県立若松高校教諭 山田輝彦氏

和歌相互批評 (班別に行なった) (一時間三十分)

最後の夜の集い (一時間)



四泊五日の合宿生活を顧み、明日の別れを惜みつつ、参加者全員で茶話会をもった。

第五日

(八月七日・水曜日)

午前

○講義 「今上天皇の御歌と孝明天皇の御歌とについて」 (二時間)



亜細亜大学教授・教養部長

夜久正雄氏

全体意見発表 (四十五分)

参加者全員の集う中で、つぎつぎに登壇して合宿の感想、今後の決意など、卒直な意見表明がなされた。

「全体意見発表を聞いて」（十五分）

小田村寅二郎氏

感想文執筆（三十分）（和歌をそえて提出、本感想文集はこれを集録したものである）

閉会式（十二時十五分）

一、国歌斉唱（二回続けて斉唱）

一、あいさつ

（大学教官有志協議会） 明星大学教授

奥田克己氏

（国民文化研究会） 副理事長・鹿児島大学助教

川井修治氏

（学生） 岡山大学 医 二年

田中輝和君

参加者（学生―四十八大学） 鹿児島大 鹿児島経済大 鹿児島工業短大 佐賀大 長崎大 熊本大 熊本女子大

福岡教育大 西南大 福岡大 九大 福岡女子短大 大分大 山口大 岡山大 神戸大 同志社大 関西大

立命館大 皇学館大 金沢大 富山大 東海大 防衛大 亜細亜大 東工大 中大 明星大 拓殖大 明大

東洋大 慶大 東大 独協大 早大 上智大 一橋大 日大 国立音楽大 東京理科大 法大 学習院大

実践女子大 玉川大 千葉大 東北学院大 東北大 秋田大

計二百四名（内 女子二十一名 高校生二名 高校生一名を含む）

（社会人班） 会社員 鹿児島県高校教諭 鹿児島県教育委員会 熊本県小・中・高教諭 福岡県高校教諭

山口県高校教諭 信用組合 大学助手 高校職員 計七十一名

―ほかに―（講師）九名（来賓）一名（会友）五名（助言者）五十三名（事務局）十名

参加者総合計 三百五十三名

来賓・会友・助言者などの紹介(敬称略)

来賓

新日本協議会代表理事

会友

東海大学専任講師

順天堂大学助教授

亜細亜大学教授・学生部長

伊勢神宮・神宮司庁文教部長

岡山県・作陽高校教諭

助言者

明星大学教授

宮崎大学教授

長崎大学学生部

元武雄市教育長(現市議会議員)

共同通信社・論説委員

元八代市教育長(現助役)

熊本市役所・経済部長

安田信託銀行・渋谷支店長

三菱重工㈱・長崎造船所・営業課長

熊本県・林業研究指導所・指導部長

亜細亜大学・学生部主事

佐倉重夫 岡村愛一 鈴木満男 永井正浩 幡掛正浩 松岡一良 奥田克巳 中山至大 植木九州男 毛利好衛 島田好衛 加藤敏治 徳永正巳 松吉基順 小泉一也 瀬上安正 関正臣

㈱アジアビジョン・企画部長

電源開発㈱・伊予電力所・事務課長

下関・宝辺商店経営

岡山県立・笠岡商業高校教諭

計理士・税理士(合宿事務局担当)

大分県・国見町教育委員会・教育主事

福岡県立・宇美商業高校教諭

玉造・こんや旅館主

鹿児島・開業医

宮崎・肥料米雑穀商

鹿児島県・鹿児島高校教諭

鹿児島県立・鹿児島工業高校教諭

八代市・厚生会館事務局長

㈱千代田コンサルタント・営業課長

亜細亜大学学生部職員

岡山県立・岡山操山高校教諭

元自民党鹿児島県連職員

福岡・筑紫女学園高校教諭

神奈川県立・横浜平沼高校教諭

山一証券・浜松支店

加部隆三 長内俊平 宝辺正久 名越二荒之助 小泉明 三重野悌次郎 小林国男 小川宏一 青砥宏一 小川幸一 林栄一 関根康弘 押川公親 百崎素明 上村和男 千々和純一 三宅将之 湯通堂義弘 行武靖枝 福田忠之 七夕照正

新技術開発事業団・管理部業務課

長崎市・中学校教諭

日商榷東京支店・海外統括課

皇宮警察本部・皇宮護衛官(合宿事務局担当)

自民党鹿児島県連職員

九州大学大学院・医学研究科

川崎重工業榷東京機械事業部・設計課

小松電子金属榷・技術部

東京鋼鉄工業榷・浜松営業所

三井石油化学工業榷・岩国総務部文書課

長崎県経済農協連・園芸販売課

兵庫県立・武庫高校教諭

榷講談社・広告局

富山県立・福光高校教諭

日産自動車榷・追浜工場生産課

熊本・上益城郡嘉島中学校教諭

鹿児島県・鹿児島高校教諭

熊本県立・御船高校教諭

八幡製鉄榷・製品調整課

近畿大学・附属小学校教諭

野間口 行正

田川 美代子

沢部 寿孫

亀井 孝之

酒匂 優一

田村 潔

山本 博資

小幡 道男

大川 寿雄

西元寺 紘毅

内田 英賢

寺川 真知夫

磯貝 保博

岸本 弘

古川 修

北島 照明

徳田 浩士

片岡 健

今林 賢郁

堀切 勝之

埼玉 鳥海利明

福岡 古川慶子

合宿運営委員(助言者と兼務)

三宅将之・国武忠彦・亀井孝之・沢部寿孫・山本博資・内田英賢・磯貝保博・福田忠之・岸本弘・古川修・堀切勝之・田村潔・上村和男
(いづれも前出)

指揮班ほか

指揮班

九州大学・工学部二年

鹿児島経済大学・経済学部四年

鹿児島経済大学・経済学部四年

鹿児島大学・工学部三年

最高裁判所・秘書課

録音班

最高裁判所・秘書課

西南学院大学一年

福岡市役所

福岡・筑紫女学園高校三年

鹿児島大学附属中学校三年

鹿児島

志賀 建一郎

東条 久

横手 満男

川辺 建生

西川 伍朔

石井 恭子

山内 健生

盛永 順子

池下 純子

小柳 怜子

川井 治子

田中 八重子

田代 アイ子

鹿児島

鹿児島

鹿児島

鹿児島

鹿児島

鹿児島

「合宿教室」の総括的な回想

岡山大学医学部二年 田 中 輝 和

私は、霧島での四泊五日の合宿教室をふりかえって、この合宿で三百五十名が共に学び、共に語り合った体験が、どんなに重要なものであったかをいま痛いほど回想しています。私のみならず、参加した大部分の人々が、年令や学年の差を超越えて、真心を尽して語り合うとは一体どういうことかを学び、かつ体験したのです。それは、判りきったことのように聞いて、案外身についていなかったことです。友の心を思い量りながら、その友の語る言葉に心を集中し、耳を傾けることでした。それを肌身でくりかえし反省しながら深めていったのです。自分の心に湧き上がってくる思いを、正確な言葉で表現することも、それが大変むづかしいことを、改めて知らされた。友の心を動かすものは、そうしたこちらがわの反省と努力があつてこそ実現することをも知ることができた。

この重要なことを、この合宿では、また和歌創作という修業を通してさらに具体的に学んだ。和歌は、我々の心に発露する感動の表現であり、空想からは決して生まれ得ないものであることを気づかされた。

ある講義の中でお話に出た幕末志士の遺歌は、私の心を揺り動かさずにはおかなかった。それは和歌の上手下手の問題ではない。あの混乱の時代に、祖国の危機を直接おのが身に感じ、自らの心の中から、それに呼応する叫びが生まれた、それが志士たちの和歌であった。志士たちの緊張した心が、じかに私に迫つて来たのである。あれ程の感動と緊張とが、一つの講義から受けとめられる、などということは、いままでの学園生活では想像もできないことであつた。しかし、よく考えてみれば、私をかく感動せしめたのは、実は、彼ら志士たちの生活態度そのものではなかつたであらうか。またその生活態度を継承して努力して来られた講師その人の生活の御態度ではなかつたであらうか。

この合宿で、私たちは、また、学問をするときの心の姿勢を、講師の先生方の御講義から学ぶことができた。それは、人の話に耳を傾け、書物を読み、古典の中の先人たちの言葉に、どういふ姿勢で対すれば良いか、その点についてである。講師の先生方の御講義は、単に知的に判断するに終わら



せることができなかつた。

合宿を支える全体的気魄と誠心誠意のあふれるムードが私たち自身の心の姿勢を自ら正していつてくれたからであろうか。この心の姿勢こそ、私自身にとって、霧島合宿で学び得た最も大きな収穫であつたと思う。それはまた同時に、今からの学園に於ける生活、学間に相対するフアイトにもおそらく一新の気をもたらずにちがいないと思う。また、そうならなくてはならないと心に誓つた次第でもあつた。

私は、この合宿教室によって、祖国日本が、我々の心の中に現実に生き生きと生き続けていることに気づいた。竹山道雄先生の御講義の中にもあつたように、日本の芸術文化は、我々の生活とかけ離れたところにあるのではない。すなわち、日本の文化伝統もまた、我々の外部にあるのではなく、我々の心、我々の日々の生活と一体なのである。したがって、合宿教室で常に問題にされた「日本の文化、伝統を護る」ということも、我々の日常生活の送り方いかに懸っていることに気づいたのである。現代日本の教育問題、国防問題、また憲法問題など、すべて我々の日々の生活の中に身近に生起していることも痛感した。つい、見のがし、見すごしてきた卑近なことの中に、もっと勇氣を持って取り組んで行かなくてはだめだ、と感じたのである。

走り書きの感想文

第一班—男子学生—

友だちと心から語り合えた

この合宿についてのあらまは、知人から聞いてはいましたが、最初はやはり不安でした。でも、その不安もこの合宿に来て、すっかり消えてしまいました。それは、班の友達と心から話し合えたからです。この合宿での収穫は、このような友達がいのだと知り、心を強くしたこと。我国を背負って立つ一人として、如何にしたらよいかということをおぼろげながらわかって来たような感じがしました。そして、もっとももっと勉強しなければならぬと、つくづく思いました。

(福岡大学 商 一年 安西健二郎)

人の踏むべき道を学ぶ

開会の挨拶をなさった先生が、この合宿は人間が一生涯に歩む道を探す合宿であると言われましたが、この意味が実感として感じられるようになりました。

私は今迄、理論的な議論をやってきましたが、その議論が如何に自分のためにならないか、如何に空しいものであるかということに気づき、このような議論をしていたことに恥づかしささえ感じています。私の今迄の勉強は社会現象をいろいろと分析した学問の跡を追うことでした。そしてこのこと自体必要であり間違っているとは思いませんが、このような人の歩むべき道を教えてくれない学問の跡を追ったところで、私自身の一生の歩むべき道を発見出来るはずがありません。人生の意義は、真心を尽して人とつきあってゆくことにありと感じています。

(鹿児島大学 法文 二年 東中野 修)

「心を定める」ということ

僕は今年で四回目の合宿参加であったが、はじめて班別討論で本当に実のある話し合いができた。やはり先生方の御言葉を全心得受けとめる受けとめ方に、自己の問題点があったと思う。小柳先生が、「心を定める」ということを言われましたが、この言葉が自分にとって最も大切なものと思えてなりません。また古典のすばらしさというものを、改めて知らされた思いです。自分一人で読んでも、そのすばらしさがわかるような生活を送って行きたいと思えます。

(東京工業大学 工 四年 内田厳彦)

先生方の御講義に心が晴れた

(鹿児島大学 医 一年 瀬上一誠)

合宿での収穫を一日も早く友達に伝えたい

先生方は、人間が生きる上の基本的姿勢、生活信条という根本問題を話されているのだ、ということが、合宿の後半になつてやっと気づいた。また、古典の講義をされる際の先生の強い信念に、心がすつと晴れた気がしました。学園問題に真剣に取組んでいる友に接し、学園問題がいかに難しいか、いかに常軌を逸しているかを知り、我が学園内においては狂乱じみた行動が起きないようにしようと思ひました。

(亜細亜大学 経 三年 小沢弘幸)

「まごころ」を持って生きる

学園紛争や政治問題もさることながら、私の心に残つたのは、私達はまごころをもつことが出来るし、持つていなくてはならぬということです。社会が乱れているのは、欲得に負けて、この大切な「まごころ」を捨て去つてしまふ人が多いからであります。ところがここへ来て諸先生の御話やその態度に接して、今まで、まごころをつくしていたと自分が思つていたことが、実は中途半端なもので、誠意が足りなかつたということに気づきました。この合宿で得たことは、「まごころ」を持って生きようということです。

この合宿は二回目です。運動部にはいっていますのでこの合宿で学んだような勉強はしていませんでした。この合宿で学んださまざまな事を早く友達に伝えたい。我々の学園にはまだ学生紛争なるものはありません。しかし、学内には無気力な空気がみなぎっています。学園にもどつたらすぐにでもこの問題に積極的にとりくみたいと考えます。昨年、今年とたくさん友を得ることができたことを非常に嬉しく思ひます。学問、人生、祖国について、みんな真剣に考えているのになうたれました。これからは、もっと学問の道に志し、祖国のためにつくしてゆきたいと思ひます。

(鹿児島経済大学 経 二年 石野良孝)

真の思想をもつべきだ

私は、高校時代から、大学では経済の勉強をしようと思つて、マルクス・レーニンの著書を読んできましたが、私はその根底について何ら考えようとしませんでした。私は今後、自分が本当の思想をもたなくてはならない。またその思想は、まず身近なことを考え、行動する中から生まれてくると思ひ

ます。いくら日本文化を論しても、和歌や古典がわからないでは、単なる空論に堕つてしまうと思います。そして、今まで祖先が築いてきた日本文化を守るだけでなく、一層発展させなければならぬと思います。それが日本人として生まれてきた私の義務だと強く感じました。参加して非常によかったですと思います。

(岡山大学 法文 一年 山地 彰)

天皇を理解する糸口を見出した

初めて参加致しまして、さらに深く日本文化の偉大さを知って感激の念を新にしました。また天皇を理解する糸口を見出した気が致します。今後ますます「日本」を学んでゆくうちに、この合宿で得た学問の研究態度は大きな助けとなっていくでしよう。

同時に強く感じましたことは、多くの学友や社会人に、共にこの道を学んでゆく友だちを、一人でも多く求めていきたいことです。現在、学園、社会に於いては、日本の心というものが軽視され蔑視されています。現実になんかどう打開していくか、どうして各人の眠れる心を覚まし、自由な活動のできる環境を築き上げうるか、そこに長崎大学の同志とともに努力してゆきたいと思えます。

(長崎大学 医 二年 為西昭勇)

自分の気持がわからない

今までの自分をふり返ってみると、随分勝手気侷なことをやってきたように思います。これからも、この生き方を変えることができないかもしれませぬ。今は自分の気持が、よくわかりませぬ。

(中央大学 経 三年 杉 盛全)

第二班—男子学生—

胸にこみあげてくるものを感じた和歌相互批評

合宿当初の班別討論では、理論をふりまわして、うわついた討論が行なわれているように思われ、正直のところ期待はずれでありました。しかし、最後の和歌相互批評の時にこの見方はいっぺんにふぎとびました。お互いの心がふれあったためです。僕の歌がどうも理屈っぽく純粹でなかったことを反省させられ、結局自分が変に気取って、自分から班に溶けこもうとしなかったことを、非常に恥づかしく思いました。しかもそんな僕に対して、先生や友達は責めるどころか、一生懸命に僕の歌を理解しようとしてくれた時、僕は確かに恥づかしい思いをしました。それにもまして本当の人の心にふ

れたような気がし、胸にこみあげてくる熱いものを感じました。本当に道を求め真剣に学問に打ち込んでいる友を見て、僕の学問に対する姿勢の中には、一番大切なものがわすれられていたことを痛感しました。「君が代」「同期の桜」はいつも学校で歌う時と違って、今まで感じたことのないふるえるような、盛上るようなものをおぼえ、自然に涙が出てきました。これこそ日本の心だと思えます。

(皇学館大学 文 三年 中西和之)

深い感銘を覚えた講義

いままでの学生生活で、何か物足りなかったことが、この合宿で満された感じがした。民族の伝統、文化にふれて感動し、やはり自分も日本人なのだという実感を得て、大変うれしかった。諸先生の講義を細かいところまで理解することは、とうていできなかつたが、たとえ専門はちがっておられなくても、その人格には全く共通するものを感じた。道はちがっても、窮めたら深いところで通じる世界があるということがわかつて、深い感銘を覚えざるを得なかつた。「真に日本を愛しうるものが世界を愛しうる」という言葉をかみしめ、足りないながらも精一杯歩んでいきたい。

(九州大学 工 二年 富吉聡伍)

日本の文化と歴史を学ぶべきだ

激動する世界の中で、日本が国際社会において主体的に歩むためには、日本の歴史、文化、伝統のを一定歴史観により、階級を二分して、その一つに絶対的価値を置く考えで学ぶのではなく、ありのままの日本の歴史、文化等を学ぶべきである。そうしてこそ始めて日本人としてプライドを持ち得ると思う。我々学生は、さらに建学の精神を学び、人間として進むべき道を知ることが本来の学問であると確信しました。

(拓殖大学 商 三年 西田 亨)

素直に講義を聞けなかつた

私はマルキシズムの勉強をしに来たのではない。日本人のころを知りたかつた。だが講義は初めから学生運動の問題にとびこんでしまつて、先生方の言われようとするとところは別のところで、ひつかかつてどうしても素直になれなかつた。特に小田村先生、小柳先生の御講義には、東大紛争になりにくわしいだけに、素直に先生のころを理解できなかつたことを残念に思う。私には現在の学生運動を、日本人としての情緒を無視しているから、また革命を目指しているからという理由で否定はできない。しかし、小柳先生が引用され

た「疑ふ勿れの義、功利者流の知る所にあらず」の一言は、私のこれから先の一番大きな宿題となろう。自分のこだわりのために素直に講義を聞けなかったことを残念に思う。

（鹿児島大学 医 一年 西島 信）

講師の先生方に敬意を表したい

諸先生方に接してみて、敗戦を境として日本の民族精神が失なわれ、すべての国民が変わってしまったと思っていたほどの考えが甘いことを知った。あの未曾有の敗戦を体験してもその考えが変わることなく、今日までもち続けられた多くの先生方に敬意を表したいと思います。と同時に、先生方は現実には迫った危機に対して、どのように行動されるのか、そのところをもっとよく知りたいと思った。

（東洋大学 法 二年 藤田 忠）

天皇の御心が理解できるようになった

私はこの合宿に参加する前までは、単に天皇は昔から存続してきて現在に至っているにすぎないものと漠然と思っていた。私の住んでいた所に大正天皇と皇后様のお墓がありました。父母につれられて毎年おまいりに行き、天皇のことを話に聞きました。が別段深く考えてもみませんでした。しかし

合宿に来て諸先生方のお話を聞き、また友らとの話し合いにより、天皇のお心を少しづつ理解できたと思います。それが最も心に残ったことです。また今まで和歌は一度も作ったことがなかったのですが、自分で作ってみて初めて人の心が少なからずわかるようになってきました。和歌を作る喜びと自信を感じました。（明星大学 理工 三年 菊井健夫）

日本人であることを痛感した

合宿に来て非常に良かったと思うことは、高谷先生など諸先生のすばらしい御講義が聞けたということ、友の意見を聞き、大いに勇気付けられたということなどです。班別討論では、あまりにも形式ばっていて自由な話し合いができず、また先生方の講義以外の話題について話し合う十分な時間がなかった事を残念に思いました。しかし、講義を聞き、日がたつにつれて自分が日本人であることを痛切に感じ、また自分が、なまかじりの知識で意見を述べていたということに気づきました。今後はよく勉強して、ただ単に言葉のやりとりだけでなく、心の底からうちとけて話し合い、私の言わんとすることをわかってもらえるように努力したいと思っています。

（長崎大学 教 一年 山本 学）

最も心に残った言葉

最も心に残った言葉を記して感想にかえます。「どこに『新理想』は求められるか。それは自分なりの『宗教』を持つことと、日々の目先きの小さな実践とである。」

(明治大学 政経 三年 繁永正博)

第三班—男子学生—

自分の殻を打ち破らねばならない

初参加の為、合宿に素直にとびこんでゆけず、実際に先生方の御講義を聞いても、日頃自分が無関心であった事柄が多く、なかなか素直な気持ちで先生方の心に触れることができなかった。また自己の不勉強のために、班に於いても発言をすることができなかったことが全く残念で、そのために心が重苦しくなっていました。最後の小田村先生の「人生とは、人間として本物になるように努力することだ」とのお言葉を聞き、自分の生活態度が何とない加減なものであり、自分の心がいかにゆがんでいたかを痛感せざるを得ませんでした。

人の真心を理解しようと思わず、自分という小さい殻にとじこもっていました。今後はその殻を打ち破って大いなる世

界へ進んでゆきたいと思いました。

(長崎大学 経 三年 里 忠時)

印象に残った先生方の言葉

合宿には初参加で何かためらいがあったけれども、今日全日程を終了するに当たっての小田村先生のお話を聞いて、人生に対する態度、学問・祖国に対する態度がはっきり定まった様に感じます。また小柳先生の御講義での人に対する接し方や心の定め方などについての御言葉は、私の胸に響き深く考えさせられました。木内先生のお人柄にふれて、人間の大きさを感じさせられ「発憤せよ」という言葉とともに、「まず自分の身近にあるものから行なえ」という言葉に強く刺激されました。班別討論で、友人がいかに学園紛争の中で考えて行動しているかを知り、反省させられました。班別討論に於いて真に自分のすべてを語り尽くすことが出来なかったのは、私自身の心が定まっていなかったからだと思えます。

(慶応大学 商 二年 大浦芳博)

傲慢な態度を反省させられた

今迄自分は、他人よりも、経験を積み、国家とか、大学問題について良く知っていると自負していました。学友と話す

ときなども、教えるというような傲慢な態度であった事を深く反省しています。聖徳太子の「共に是れ凡夫のみ」という御言葉を実生活に生かしてゆきたい。

(山口大学 工 一年 佐々木和男)

未知の友達とうちとけて話しあえた

今合宿には多少の不安と期待とが入り混じった気持ちで参加しました。班別討論が始まった時、最初は発言するのが恥ずかしかったのですが、みんなと話しているうちに、どうやら自分の意見を恥ずかしい思いをせずに発言できるようになりました。初めて逢った人たちとうちとけて話しあうことができたことはこの合宿の最大の収穫となりました。また先生方の御講義によって自分の知らなかったことを教えられると同時に、先生方から励まされたことは印象に残りました。これからはもっと真剣に考えなければいけないと思いました。

(亜細亜大学 経 三年 片柳 隆)

現実的な物の見方に驚いた

こういう合宿参加の経験がなかったために最初は窮屈で逃げだしたい気もしました。しかし先生方の御講義が、自分が

今までに聞いた話と違って、現実的なのに驚きました。

(九州大学 薬 二年 上原康次郎)

広い観点から物を見たい

合宿の講義を聞き、もっと広い観点から物を見なければいけないことに気づき、自分の不勉強さをつくづく感じ、恥ずかしかった。高谷覚蔵先生の体験にもとづいた、自信に満ちた発言や、木内先生の広々とした総合的な考え方に心がひかれた。

(西南学院大学 商 一年 芳賀健児)

無責任な発言を恥ずかしく思った

合宿第五日目にして、初めて、今までの心構えや目的が全く間違っていたことを感じる。全体意見発表の時間に友達の本気で力強い言葉を聞き、全く無責任な発言をしていた自分が大変恥づかしくなった。そして日頃の自分の無気力さを痛切に感じる。

ただ「君が代」を何故二回斉唱するのか、慰霊祭を何故行なうのか等わからない点も多い。

(久留米大学附設高校卒 大野 寛)

胸をえぐられた思い

合宿参加の動機が消極的だったためか、大きな影響を受けなかったようです。医学部へ進む一人として、東大紛争の渦中で、主体性を持って正しいことと信じてやって来た事が間違いだ、小柳先生に強さと言われ、胸に短刀をつきさされた思いで、現在苦しんでいる最中です。自分の全人格を否定されたという気持が強くて、いろいろな事に抵抗を感じざるを得ません。それにひきかえ自分の思いを、すがすがしい顔で、切々と述べている友達をみると、苦しんでいる自分のみじめにも思われます。

(東京大学 理Ⅲ 一年 鴨川 盛秀)

皆と力を合わせることの大事さを痛感

この合宿は真面目で真剣な人達の集いであると思われ、実感しました。この合宿開催のために、目に見えぬところで尽くしておられる人々の苦勞を感じさせられたのです。実に尊いものだと感じられたのです。班長をやってみて、班での出来事が一つの人生の様に思えました。班内で一生懸命苦勞して初めて一人ではどうしても生きてゆけないことに気づきました。皆と力を合わせてゆかねばならないと痛感しました。

た。
(長崎大学 経 三年 白石 肇)

第四班—男子学生—

先輩の助言で迷いが解けた

今度の合宿では、班長という役目をさせられ、本当にどうしたらよいか分らないことがしばしばでした。「人の心をくみとる」とか「共に是れ凡夫」というような言葉について、それを実行し、実感する事が非常に困難なことにあらためて気づきました。ある班員の歌に、講義や班別討論の時に、素直であれということをくり返しされるけれども、どうも実感として湧いてこない、という意味のものがありません。僕はこの歌をよんで、ぐさりと胸をつかれる思いでした。実際は班の中で、「思いのままを述べてくれ」と繰返し言ったのです。だが他人に言う前に、先ず自分自身が「思いのままを述べる」態度でなくてはならなかったのです。長内先生に風呂の中で、「どうしたらよいかという事をぐじぐじ迷っているより、そんな時間があったら、班の人達と、思いきり話してみなさい。決して君は皆に対して助言するとか、導くとかいう気持になってはいけません。というより、導けるはずもないじゃないか。班の人の言う言葉をじっと聞いていれば、本当に自分のいたらなさを痛感するような言葉があちこちに

あるんだ。」と言われました。それから班に帰って、起きている友達と本気になって話してみたのです。それまでの僕には、皆によく分ってもらおうという意識があまりに強くあつたと思います。ですから、班の中からもよい意見が、生まれにくく、どうしたらよいのかと迷っていたのです。しかし、昨夜友達への「班長さんはあまりに期待しすぎているのではないのか。僕は先生の話はよく分らなかつたけれども本当に貴重な体験をさせてもらったのです」という発言を聞いて、僕は今までの自分が、班長ということを意識して気負いすぎたと思ひました。僕はその友達の手紙でひろびろとした気持ちになるのを感じました。(九州大学 医 二年 小柳左門)

天皇の御心にふれた

合宿の始め、どうしても皆と共鳴できなかったのは、天皇についての考え方です。自分としては、今まで天皇について深く考えたことはなかつたし、学校でもこの合宿とは全く異質の天皇観を学んだので、抵抗感を持たざるを得ませんでした。しかしながら、小田村先生の話を聞いたり、皆と討論しているうちに、皆が天皇を心のよりどころとして尊敬していることを知り、また天皇の御歌を理解するにつれてわずかながら皆の心に近づくことができたように思っております。先生の講義を聞き、天皇の御歌や志士の和歌にふれても、友達

ほど感動を覚えない自分の心が恐しく感じられました。

(鹿児島大学 教 一年 河内信行)

「本物の人間」になるように努めた

この合宿では、人生を如何に生きべきか、日々の生活をどのような姿勢で対処していくべきかという最も根本的なことについて学びました。人の心情を大切にすることが如何に重要なことであるか、また、イデオロギーにとらわれて行動することが、人の心情を粗末にする心の狭いつまらぬことであるかが、よくわかりました。そして日本に於ては、天皇と国民が本当に相互に信頼し、お互いの真情を大切にしてきたかを痛感致しました。特に孝明天皇、明治天皇、今上天皇の御製を拝誦して、はじめて天皇の国をおもわれる御心が如何に深いものであるかを感じました。日々の生活において自分の身近な問題をおろそかにすることなく、最善の努力をしてゆきたい、そして常に自分自身を反省し、小田村先生の言われた「本物の人間」になるよう努めてゆきたいと思っております。

(早稲田大学 文 二年 原川猛雄)

大学紛争に処すべき態度を教えられた

小田村先生の御講義を聞いて、最も痛切に感じたのは、先

生の話される態度や物の考え方が、人間味にあふれ、日本人としての感情が溢れんばかりであったということです。あまりにも人間味を失いかけていた自分を反省せずにはいられませんでした。思いあぐんでいた東大紛争に処すべき態度を明確に教えられた気がします。更に、この合宿中、天皇の御製を拝誦する機会に恵まれ、幕末の孝明天皇の御心や今上天皇の戦後の御心を推察申し上げますと、今まで天皇制についての心の内にひっかかっていたものがすうっととり除かれたような気がしました。この合宿で体得した最大のものは、班別討論において自分の心を偽りなく、正確な言葉で表現しようとする態度を学んだことです。合宿後も、この心がけだけは忘れずに真剣に生きてゆきたいと思います。

(東京大学 理1 一年 石井英一)

人間の情に反するマルクスの理論

私はこの合宿に、自分が過去に歩んできた道を違った立場からながめてみようという目的で参加した。私自身、今まで私の生き方に全面的に納得し、自分を投げ入れてしまうことはできなかつたのです。それが何故であるかを確めたかたのです。先生方の講義を聞いて、私が学んできたマルクスの理論の中に、人間の情に反するところがあるのではないかという気が強くなります。けれども今まで学んできたものを全く

捨ててしまえるかといっても、十分に納得がゆきませんし、漠然としているところです。しかし、先生方がおっしゃられたように知的判断だけにとよることなく、物事の奥にひそむ情を憶念せよという言葉は強く印象に残っています。

(大分大学 教 三年 藤原慶一)

心情の大切さを感じた

この合宿に参加して特に感じられた事は、「情」あるいは「真心」の大切さということであった。自分の考えとちがう意見を聞くとすぐ反撥して、発言している相手の心をくんでやろうとする心づかいが出来なかつた今までの自分が、何かつまらなかつたような気がします。これからは、自分の信念や思想が正で、相手は悪であるというような考え方ではなく、共に語りあいたい。また身近なことを着実にやってみてゆきたいと思う。

(西南学院大学 商 一年 久保山俊郎)

重苦しい気がする

昨年の合宿に参加して、その時あまりにもあいまいな気持ちでその期間を過してしまい、あの合宿で知った、心を打つ言葉や態度、姿勢その他をほとんど実行せずに今に至っていることを、非常に恥ずかしく思っています。最も強く反省させ

学問・人生に対する基本的姿勢をつかんだ

られたのは、「小乗の凝滞」という言葉を聞いた時です。私は一体何のために、どのような気持で今まで行動して来たのだろうか、本当に正面切って先生や友人と話し合ったことがあったらどうか、なぜもっと素直になれなかったのか、いや末だに素直になれていないのではないか。非常に重苦しい気がします。でも私は合宿に来て良かったと思います。何か心が開けたようで自分を知り得たような感じがします。

(鹿児島大学 法文 二年 金津洋雄)

勉強をやり直したい

合宿をふり返って見て、僕自身勉強が足りなかったことを身にしみて感じました。せめて「日本への回帰」を二回ほど読んできていたら、もっと積極的な発言ができたのではないかとも思われ、残念でなりません。この気持をかみしめて家に帰り勉強をやり直したいと思います。先生方の講義が胸にひびき、心おどるものを感じました。今後この感激を持続して古典や和歌を勉強してゆきたいと思っています。

(鹿児島経済大学 経 三年 木佐貫国孝)

この合宿に参加するにあたって、僕は今度こそ物事を理解し判断するときの心の姿勢及び態度を、包み隠すことなく述べ、先生方や友人たちの言葉に素直に耳を傾けようと思っていました。その思いを一層励ましてくれたのは開会式のオリエンテーションでした。この合宿へ向う姿勢について、先輩自身が一言一言かみしめるように述べられた言葉は、僕の中に強い響きを持って伝わってきました。

しかし、いざ合宿へ入ると、あれ程決心し、また努力したにもかかわらず思うようにはゆきませんでした。友人と本当に話し合うことの難しさをあらためて痛感いたしました。そこには明らかに僕自身の態度にやはり問題がありました。しかし、と僕は自問しない訳にはゆきませんでした。

その間、高谷先生の御講義をはじめとする諸先生方の貴重な体験に基づいた素晴らしい御講義があり、僕等の心を引きつけずにはおきませんでした。小田村先生の「法の背後にある立法の精神を理解することの重要性」、また竹山道雄先生の「聞く者としての態度は、結論のみ求めるのではなく、結論に至るまでの過程をこそ問題にしなければならない」など

の御言葉が、無性に心に焼きついて離れません。これらの御言葉の背後にある御態度こそ、我々の学問、人生における基本的な姿勢だと気づきました。我々の心の中にこのような姿勢が確立された時に始めて、先生方の言われる国家の意味も、天皇の問題も、イデオロギーの問題も、本当に理解できるのではないかと思うのです。この基本的な態度を僕は見失っていました。

その僕に貴重な道標を最も明確に示されたのは小柳先生の御講義でした。「話をされる先生の心の中に割って入って、先生のお気持ちを憶念することこそ、学問するものの態度ではないだろうか」との御言葉を聞いた時、僕は本当に救われたような気がいたしました。眼前がぱっと明るくなったような気がいたしました。しかしこれは、私の人生の出発の準備がやっと整った段階です。学園には問題が山積みされています。僕は学園にこれから帰って行きますが、この合宿で得た、心の基本的態度を忘れることなく、身近かなささいな問題の一つ一つもおろそかにせず、真摯な態度で対処して行くつもりです。日常のささいな事柄も、大きな問題も、本質的に異なるものではないと思うからです。

(岡山大学 医 二年 田中輝和)

人の気持をくみとる難しさがわかった

人の真心を感じ得る人間であるということが、如何に尊いものであるかをしみじみ思っています。班長をやってはじめて人の気持をくみとることが、如何に難しく苦しいものであるかを痛感しました。そして、思いを正確に、適確な言葉でさがして、表現する苦しみを持つということは、相手の気持になろうと努力することであり、自分自身をみつめ直し、心の姿勢を正そうとすることになるのであるということを学んだ気がします。そして、真実なるものに鋭敏に反応できるような、情意の豊かな人間になりたいと思います。

(鹿児島大学 法文 三年 松木 昭)

敵しかった合宿生活

国民文化研究会の大合宿に初参加です。一口に言ってもちようど名画を見終った後のような感情のたかぶりを覚えます。各先生方の口をすっぱくされての、本物の人間になれとの激励を受けても自分に確固たる自信は持てないものの、一度こいう真剣そのものの合宿に参加すれば、後々まで何かが残るということを直感しました。未知の学友達と、あたかも幼なじみの如く、親しみを持って討論したことや、班付の先

生方や班長の厳しい教示は一生忘れられないでしょう。

(鹿児島大学 工 二年 中西達夫)

いままでの考え方を反省した

合宿を終えるにあたり、合宿当初の僕の気持とは明らかに違ったのを感じます。諸先生の御講義を聞いて、天皇、学生運動、祖国等に対する私の考え方を反省しなければならぬと感じました。先生方の意見を本当に理解できたわけではないが、それにもまして、先生方が真心をもって訴えておられる思想を、深く考えるべきものだと思つたのです。私の「物の見方」は混乱しています。しかし、この混乱した自分の物の見方を、今後の生活において、少しずつ立て直したいと思っています。

(早稲田大学 法 二年 古橋一誠)

誠実な人間の集りである合宿

この合宿にくる前は、国民文化研究会は少し右よりの団体だろうと思つてた。しかし終つた今、全然そういう感じはしない。本当の人間、真の人間たんとする誠実な人間の寄り集りであるとわかつた。僕に欠けていたのはまごころだ。僕は大学生活が本当にいやになつていたが、もとを正せば学

問に対する姿勢が出来ていなかったからだと思ふ。先生も班長もみんな人間として本物になろうと努力していることが態度、話し方の真剣さによく表われていた。本物の人間になろうとせずして学問や人生を語れないということを学んだ。

(上智大学 経 一年 近藤繁明)

自分の欠点がわかつた

合宿にきてまず、国民文化研究会というのはえらく復古的な団体だと思つた。しかし、日がたつにつれて最初に感じたことが誤りであり、表面的なことだけで判断していた自分の考え方の甘さを痛感しました。このことは講義を聞いてその感想を述べる場合においても、しばしば現われていました。私は今まで気付かなかつた自分の欠点を、いろいろな人の話を聞くことによつてわかつた。このことだけでも合宿に参加した価値があつたと思ひました。

(長崎大学 教 一年 芳田真一)

相手の身になつてつきあう

初参加ですが、正直言つて最初は少し分りにくいところもありましたし、また疑問に思われる点もありました。先生方の講義を聞いて、情熱を持って話しておられるお気持が、し

みじみと感じられました。それでも全部の内容が理解できたわけではありません。いや全部理解できないということにこだわって先生方の思いまで粗末にしていたようです。小柳先生が言われたように「何々は理解出来る、がしかし、というのは駄目だ」という言葉を聞き、深く反省しております。本当に相手の身になってつきあってこそ、相手の気持が分るものであるということを、この合宿で学びました。同時に、いかに自分が勉強不足かということを感じました。これからは疑問などが生まれた場合、それにすぐ反論するのではなく、まず心を定めて実際にそのものとびこんで自分で勉強することに心がけたいと思っています。

(明星大学 理工 二年 松岡達雄)

有益だった班別討論

同年代の者同士でこのように人生問題、学問、国家等について腹を割って話しあったことは初めてでした。最初はなかなか思うようにしゃべれずにいきましたが、次第に話せるようになりました。普通はほとんど腹を割って語るといふことはないのですが、ここでは不思議と卒直に話せたような気がします。班別討論が非常に有益であったと思えるのは、正確に話すように注意する癖がついたことと、人の話を真底から受けとめようと努めるようになったことです。また学問に対し

て真剣にとりくむ必要のあることを痛感しました。特に胸打たれたのは、小柳先生の御講義でした。人の話を聴くときは自己中心的な考えを捨てさせて、その人がいわんとしていることを真心をもって理解しようという心構えが大切なので、先生が引用された「勿疑」ということが深く心の底へ焼きついて離れません。(独協大学 経 三年 中沢周一)

第六班—男子学生—

真の学問をした

最終日の全体意見発表の最後に、小田村先生がおっしゃられた言葉を聞いて国民文化研究会は右翼的だと考えていたことが、完全に崩れてしまった。今まで、本当の歴史を知らずに学校やマスコミで言われたものを、そのまま信じていた。日本人として解らねばならない心情もわからずにいた。いやそればかりではない、学生でいながら、真の学問をしたことがなかった。本を読むにしても、人の話を聞くにしても、その本に、その著者の思いに没入してゆかなければならない。学問とは、学校の成績で優をとることはなかった。いろんな知識をつめこむことのみではなかった。真の学問とは、真実を知り、本物の人間になるよう努力することであると思

う。(長崎大学 経 二年 田中日出治)

自分の思いのこもった言葉をもつ努力を

「日本人」という言葉が身近に感じられた

この合宿中、痛切に感じたのは、諸先生、諸先輩の言われる言葉を、そのまま借用し、実感のこもらないままに、如何にいい加減に用いていたかということ。先生はこう言われた、だから僕もこう言っておけば正しいだろうと、口に出した言葉が少なからずあったようで、恥づかしい気持と寂しい気持で一杯になりました。これからは、出来る限り自分の思いのこもった言葉を使って、話してゆく努力をしようと思います。

(一橋大学 商 二年 北川文雄)

自分の思想が音をたててくずれさる思いだった

合宿の案内書を手にした時は、非常なためらいと反撥を覚えた。しかし、講義を聞くことよって、今まで自分の頭の中に形成されていたと思われる思想が、音をたててくずれさっていく思いであった。余りに自分の心の狭さを感じずにはおれなかった。しかし、真実のところ、未だに心の整理がつかない状態です。

(立命館大学 法 二年 池之上晃敏)

この合宿に参加したことによって「日本人」という言葉の内容が急に身近に感じられるようになって、大変うれしい。本当に生きるということは、とても難しいことだと思っております。でも今は、やるぞという気持です。「有難うございました」と言いたい気がしています。

(東京工業大学 工 三年 天川東作)

心と心のつきあいができた

この合宿で最もうれしかったことは、心と心のつきあいを学んだことです。単に知的レベルだけで話をしたり、つきあいをしたりということでは、「ほんとうの人間のつきあい」はできないということを学びました。今後は、そうした、もう一つ深くつっこんだ姿勢で学生生活を送りたい。

(亜細亜大学 法 三年 前田終止)

謙虚な態度で生きてゆきたい

二度目の参加でしたが、昨年の参加では良く理解できなかったところを、はっきり理解することができました。頭の中

でわかったということだけでなく、そのわかった事を実際の生活態度において、自然に、謙虚に、ひたむきな態度で実践しなければならぬということ強く感じました。一息に頑張ろうと張りきってもできないと思うし、この合宿でうけた感激を忘れないように一歩一歩あゆんでゆかなければならないのだと強く思いました。

(熊本大学 教 四年 永井幸男)

常に日本人であることを自覚して

合宿が終了しようとしている今、私が最も強く思っていることは、「どんな活動をする場合においても、自分が日本人であるという自覚をもつことだ」と小田村先生の言われたことである。自分たちの国には欠点もあるが、多大なる長所もある。それを学ばずして他国の学問体系を無闇にとり入れることはまちがっている。そういう点で現在の学生運動は誤っていると思う。私は、大学に帰ったならば、地道な学生運動、即ち自分が学生であり、日本人であるということをお忘れずに自分の生活からにじみだした活動をやっていきたい。

(九州大学 教 一年 桑野正紀)

ごまかしのない生活を送りたい

一生懸命に講義を聞き、班別討論をおこなったから悔いはないが、小田村先生の真剣な生き方を聞いて、今までの自分の日常の生活態度について考えさせられた。人間として本物に近づくように、ごまかしのない生活を力一杯おこなってゆきたいと思う。

(富山大学 工 三年 望月保宏)

厳粛で身のひきしまる思い

開会式で歌った「君が代」や朝の国旗掲揚など、今まで、こんなにも厳粛で、身のひきしまる思いがしたことはありませんでした。特に私が感激したことは、人間としての生きる道を示してくださいましたことです。毎日を、学校の講義を聴くだけですごしておりましたが、今は、自己をみつめ、自己を反省する心を持つことが最も大切であるということを感じています。

(鹿児島大学 経 二年 緒垣正友)

学問に取り組む姿勢が間違っていた

私は高校時代、古典の輪読会に参加して様々な教えをうけ、その後大学でも同じようなメンバーで輪読会を持ちました。しかし輪読会に参加する自分の姿勢は余りに惰性的で、高校時代もやっていたからという気持が強かったように思えます。大学に入った解放感、また運動クラブにはいり、それが忙しいということで、次第に学問に取り組む毅然とした姿勢を失っていたことは否めない事実であると思います。東大紛争においては、過激な学生運動に対して批判の態度は示しても、その批判の根底の問題に真剣にとり組む気迫に欠けていたことを恥づかしく思っています。しかし合宿に参加し、特に小田村先生と小柳先生の御講義をお聞きして、今までの自分の学問に対する姿勢が卑怯で間違っていたと痛感しました。

(東京大学 文1 一年 伊藤哲朗)

かけがえのない経験をした

この合宿で、学問あるいは自分の悩みというものを、自分

が正確に吟味した言葉で語れば、友達がそれに真面目に答えてくれるというかけがえのない経験をしました。しかし、反省することは、自分の気持に相手が答えてくれたのに、果して自分がその友だちの気持を本当に理解し、その友達の言葉に正確にこたえていたかどうかということです。そのことを考えると、不安な気になります。自分の言葉に相手が答えてくれた喜びを大切にして、自分を甘やかすことなく、この気持を学校、日常生活でも感じられるようにしたいと思っています。

(早稲田大学 文 三年 広瀬清治)

歴史の見方を学んだ

僕は今まで、いわゆるマルクス主義的立場にある教授の歴史書を好んで読んできましたが、この合宿で全く違った見方を教えられました。何だか目の前が広がってきたようです。僕は歴史の正しい見方は分析的で、常に客観的にみるという態度でなければならぬと考えていました。しかし、これは西洋人の思考形式です。我々は日本人です。何も西洋人の真似をしなくてもよい。日本人には日本人しかわからぬ独自のものがある。そして日本の歴史の中に脈々と波打つものは、国民の同胞感であると感じます。日本人は本当に心情的、真心を重んずる国民であると世界に誇ってもいいと思います。

す。日本人は日々の生活において無意識のうちに人倫の道を求め、近づこうとしているのだと思います。日本人が真心を重んずる尊さを、よりはっきりと再認識しました。信念の為には己を捨てて、人間の至高の姿を求めて、今からでもすぐ新しい視野に立って、意欲をもち学問にとりくみたいと思えます。

(上智大学 法 一年 米津 茂)

言葉の背後にある精神に付き合おう

先生方の講義をきいて、今度の敗戦によって断絶していた日本の文化的、歴史的な伝統が自分の眼前に現われてきたような気がしてなりません。日本の民族の伝統を受けついでいこうと心から感じました。

また、他人といろいろな思想上の問題を語り合う時に、語っている人の表面的な言葉だけでなく、その人の心の奥深くまで立ち入って、言葉の背後にある精神に付き合っていくことがいかに大切であるかを痛感しました。いままでいかに日常自分の使っている言葉が単純で、あさはかで、思慮のないものであったかを反省し、これからは一語一語を良く吟味して大切に使うていかなければならないと心から感じました。

(鹿児島大学 法 二年 高木道弘)

学問に対する態度を知った

最初あまり参加しなかったが、やはり参加して良かったと思います。まず学問に対する態度が自分でつかめたからです。今まで学問という言葉に対して深く考えたことはなかったけれども、先生方の御講義を聞いているうちに、自分の学問の姿勢について、これではいけないと思う様になりました。また、日本人として、我々祖先が残してくれた文化について深く考えさせられました。これからの大学生活の目標は日本人としての自覚を高めつつ生きていくことに、おきたいと思えます。

(日本大学 商 一年 加藤邦泰)

大学生活の目標を得た

二回目の参加ですが、今回は日本の大学が揺れ動いている現状の中で、学生の進むべき道、学生のとるべき道を聞かせていただくように参加しました。川井先生、小田村先生の御講義を聞きまして、「大学」というものがどのようなものであるか、そして今の学生運動の在り方が誤った方向にむかっていることがわかりました。私は大学のサークルで新聞部に参加しており、十月頃の新聞に安保問題、学生運動の現状を特集として取り扱っております。

また私自身、残りの大学生活の目標をこの合宿を通じて得ることができたと思っています。

(亜細亜大学 商 三年 鈴木雅教)

自分の考えが変ってきた

私は皇学館高校一年の時、大阪にある「千早鍛練会」に参加したことがあります。その時に、平泉澄先生等多くの先生の話の承りましたが、大変強い抵抗を感じました。

それから三年経て、先輩に勧められて気の進まぬままこの合宿に参加しましたが、相当自分の考え方が高校時代とは変っているのに気がつきました。全国各地から、この合宿に参加した人々の感想を聴き、力づけられると共に、素直な態度で合宿に臨まねばならぬ事に気付いたので。

(皇学館大学 文 一年 白江恒夫)

学問に志をたてる

大学に入っても学問ということはどういうことかわからなかった。二年生になって「志をたてる」ことであるということとを「日本思想の系譜」の山鹿素行の文章の中で知った。では「志」とは何かと言うとなかなかわからない。しかし九大信和会の人々が日本の歴史伝統に流れている精神を、勉強しよ

うと励んでいるのを見るにつけ僕もやってみたく思っていたが、この合宿に参加して新たにやって行こうという気持ちになった。

学問は、学ぼうという意志がまま受け身の態度でやってはならない。また自分の思い通りに好き勝手にやっても仕方ないものと思う。このことを木内先生は「追体験」、夜久先生は「心にてらしてみろ」と言われた。この言葉の意味は、意見は素直に聞かなければならない、そのうえで自分の体験にてらし合わせて、考えねばならないという意味だと思ふ。これこそ学問の方向とすべきことであると思ふ。

(九州大学 工 一年 千田 博)

真の学問に右とか左とかない

真の学問の前には、右とか左とかいうことがいかにちっけなものであるかに気付き、今までの自分の気持を取っかく思います。音楽の練習に毎日を追われ、政治にも関心がなく、自分の技術を向上させればよいのだという個人主義的な考え方を捨てたいと思います。現在の日本の音楽界をリードする人々には、マルキストが多いように思われます。私は、しっかりした自分の考えをもって、そういう人々に対処していきたいと思えます。

(国立音楽大学 器楽 二年 大越 静)

自分の思いを正確に語る難しさを知った

先生方の講義を聴いて本当の学問に取り組む正しい態度がはつきりとわかりました。

次に、日頃自分がいかに日本人としての自覚に欠けていたか恥づかしく思い、これからは世界の中における日本人として正しく生きていきたいと思えます。班別討論を通じて、人と話し合いをする際、相手の意見を聞くときの態度が間違っていたことを感じました。同時に自分の思っていることを一つみかくさずに述べるといことが非常にむずかしいと思えました。

(東京工業大学 工 一年 村尾正昭)

「だがしかし…」が私の成長を妨げていた

人間として本物になりたい。ニセモノはだめです。この胸につき上げてくる大きな感動を力にして努力してゆきたい。「あなたの言うことは正しい。だがしかし……」という言葉が自分の成長をどれほどおさえてきたことだろう。枝葉末節ばかり見つめ大切なことを忘れていたのだ。心に湧き上がる思いを源として生きていかねばならない。

先生の御言葉に救われた

(鹿児島大学 医 一年 甲斐俊朗)

班長をしていて悩んでいるとき、国文研の先生方に相談すると、真剣に耳をかたむけて、助言や励ましを与えて下さったことに感謝しています。とくに「僕は自分の今までもっていたものが全部なくなってしまった気がします」と言うのと、長内先生が「何もかもなくなっても、君にはまだ情熱というものが残っているではないか、今晚徹夜をして、明治天皇御製を、『どうか先輩助けて下さい』と念じてよんでみない」といわれ、一時半頃まで心をこめて拝誦しました。このときほど、御製に、心をゆり動かされたことはありませんでした。心が統べられ、新たな力がわいてくるのを覚え、最後までやり通すことができました。自分にこのように鍛えられる場というものが与えられ、立派な先生方に教えを受けられたことは、僕にとって非常に喜びです。川久保君への黙禱や、夜久先生などの歌をみて、国文研の方々の人生態度に感服しています。

(西南学院大学 文 三年 小野吉宜)

最も大切なことを教えられた

この合宿で私は人生において最も大切なことを教えられた

気がします。即ち、観念的な言葉は人の心を打たないということ、また心の底から相手の言葉を真剣に聞かない者は、自分の心も相手に伝えることは出来ないということをも身を持って感じました。更に現実に鋭敏に反応する卒直さがなくては人の真の生き方はないと思いました。

(上智大学 文 一年 土岐直人)

生きる指針を得る事ができた

私は「いかに生くべきか」という疑問を抱いて参加しましたが、その解答よりも、むしろ生きる指針を得る事が出来たと思います。それは真心をもって生きるということです。真心をもって生きるということは大変にむずかしいことだと思いますが、困難を克服して生きたい。

(亜細亜大学 経 三年 江ヶ崎信夫)

大きな暗示をえた

「何が真実であり、何が事実であるのか」という私の日頃からの疑問に対し、先生方の語られる一言一句は、異なった角度からの見方として大きな暗示を与えてくれた。私が現在おかれている立場をより一層認識できたことは、これからの私の行動の源となってくれることであろう。

(拓殖大学 商 三年 高浜史朗)

「共に学び共に語ろう」の意味がわかった

「共に学び共に語ろう」という呼びかけの垂幕を見てから、私の心は不安と緊張につつまれた。合宿を経験していくうちに垂幕の意味が次第にわかってきた。現在の我々には利己主義が強く根ざしていることを思うと悲しくなってくる。

また、古典の形式のみにとらわれ、人の情を知らずに来た自分が悲しい。諸先生の御講義に深く心をうた、先生方の思いを正しく理解し。かみしめて、人間として生きる道を探し求めてゆきたい。

(東北学院大学 工 二年 星野彦治郎)

素直になれと心に念じつつ

私はいまだに迷っております。先生方の云われる言葉が、あと一步というところでわからなかったのです。素直になれと自分に云いきかせながら講義を聞きました。最後の全体意見発表のとき小田村先生が、私のように迷っている者まで心にとめて話しておられたことに深く頭が下がりました。本物の人間に私もなりたい。

(長崎大学 工 二年 江頭弘道)

社会に出る心構えが出来た

僕にとって最も心に残ったことは発憤するという言葉聞き、社会に飛びたつ心構えが出来たということです。

(鹿児島工業短期大学 二年 樋口義一)

第九班—男子学生—

まず一人の友を得たい

この合宿において私が得たものは「相手の気持ちになって考える」というごくあたりまえのことを身をもって体験したこととです。また、友と語る時、理論を相手にわからせることは大した問題ではなく、大切なことはいかにして相手に自分の心を伝えるかということなのだ。一度に多くの者に自分の心を伝えることは到底不可能であると思うし、やはり松陰先生が言われているように一人より十人、十人より百人という気持ちで自分の思いを伝えてゆかねばならないと思った。

(福岡教育大学 教 三年 北山 孝)

和歌の大切さがわかった

私は勉強が嫌いで抵抗を感じていましたが、今の心境は、学問はやはりやらねばならぬものだと思えるようになっていきます。その裏づけとなったのは、諸先生方の御講義はもちろんですが、特に和歌に負うところが大きなのです。私は和歌を作って初めて、己の心が物の本質をはっきりとつかんでいなかったことや、訴えたい事が喉もとまでできていないのに言葉として表わせないということを感じました。もともと私は相手の言葉よりも心を知ることに注意してきましたが、心を知るためには言葉が重要な役割を果していることを知りました。相手の心を理解出来る学問をしたいと思えますし、和歌は折にふれて生涯つくってゆきたいと思えます。

(福岡大学 法 二年 磯野俊雄)

生活態度の根底をゆさぶられた

合宿参加までの僕の生き方は必ずしも積極的なものではなかったように思います。しかし三日目の、学生時代の体験を通して語られる小田村先生の御講義や、四日目の、我々一人一人を叱りつけられるような小柳先生の御講義等を聴いて、自分自身が非常に恥づかしく感じられ、こんなことではいけ

ないと思わずにはいられませんでした。我々の学園は、今紛争のさなかにあります。そのただなかにあって自分自身の身のまわりに起こった問題をごまかしたり、真剣にそれにとり組んでいこうとしなかった今までの自分の生活態度を根底から揺さぶられたように感じました。

(東京大学 教養 二年 石村善悟)

「自分をよく見せよう」がいけない

日々の生活を真剣に生きることが非常に大事なことだと思つた。私は今まで本当に心の底から湧きあがってくる思いがあつてもいざ行動しようと思うと躊躇してしまい安易な道を選ぼうとすることが多かった。しかし、この合宿において、自分の心を偽つた生活ではなく、真剣に生きようと努力しておられる師のあることを知つた。しみじみとかつ厳しく語られる師の、ひとつひとつのことが自分の胸深く、痛いまでにしみ込んできた。自分をよく見せようという考えを振り捨て、自分の我を捨ててぶつかっていけば、真剣な生活ができるという気がしてきた。学園内の暴力黙認、あるいは、全くの傍観的態度を断固として打ち砕かねばならない。恐れていてはならない。自分を偽ってはいはならない。まちがっている者に対しては、堂々とはっきり、異議を述べねばならない。

(九州大学 法 二年 水永正憲)

和歌相互批評は楽しかった

和歌を作つてみんなと批評し合うことが、なんとなごやかで、なんと楽しいことかと思ひました。

私が和歌の最後の言葉を適確に表現できないままに作つたところを、班付の長内先生に、「最後の言葉は君の性格が現われている」と指摘されたときはほんとうにはずかしく思ひました。一語一句もおろそかにしないということは、常に真心を持つて事に当るといふことと同じではなからうか。私は、この合宿を契機に正しい勉強を進めてゆこうと思ひます。

(西南学院大学 商 一年 日高 久)

人生の再出発

諸先生の講義やお話しを聞いて、合宿教室へ参加する前よりも一層疑問が湧き起つてきたが、真剣に学ぼうとしている人々の態度に接したことはうれしかった。しかし、人が二人集まるどころには虚偽が始まるという言葉も頭から去らない。今までの自分の人生観を根本的に検討して、また新たに始めねばならぬことを痛感した。

(明治大学 政経 一年 山内公治)

少なくとも思いやりを忘れずに

諸先生の御講義を通じて、自分の信念を貫いて生きるということは、他人の心を本当に思いやって生きるということに他ならないと気付いた。自分には、人間を本当に信頼出来るかどうかはわからないが、少なくとも他人を思いやる気持だけは忘れずに生きていきたいと思う。

(中央大学 理工 二年 田所 健)

この教えを血肉にしたい

この合宿に参加して自分は、新たに確固たる人生観の基礎を見つけることができたように思う。我が身に流れる日本人の血に目覚めさせられたように思います。

この感激を、夏の一時期の思い出として留めて置くだけでなく、日々の精進によりその教えを実際に自分の血肉としていかしてゆきたい。

(長崎大学 経 三年 田中 洋)

第十班—男子学生—

友よ再び会おう

合宿に参加するまでは不安でした。と云うのは、この会は、例えば、現在の学生運動にただ対抗するだけの勢力ではないだろうかと思っていたからです。ところが、諸先生の熱を帯びた講義をきき、三日目、四日目になってやっと溶けこめた。天皇に対する再考を促され、日本の良さ、世界に誇る芸術など拝聴しておりますと胸の高まりは押えきれずただ聞き入るだけでノートを取ることができなかったほどです。

だが、何と云っても班別討論における腹をわって語る友だちの意見、それに対する友達の真剣なまなざし、自分の意見に対する鋭い返答や助言等、ほんとうに有意義な五日間でした。別れるとなるとただ寂しくて、最後の夜は遅くまで、お互いに心ゆくまで語り合いました。

友よ再び会おう。そしてまた語ろう。今度会うときは友らは一層立派になっているだろう。僕も負けずに頑張るから。

(日本大学 法 二年 松田 元)

高谷先生のご講義に感動

私は左翼系高校出身で、また大学も学生運動が盛んで、自分と同じ思想、世界観をもった者を見いだせずに悩んでいた。しかしこの合宿では、同じ目的をもった同胞三百余人が集い、実にうれしかった。

ただ、三日目頃よりやっと班員がうちとけて心を割って話しあいが出来かけてからは、残り二日が余りに短く感じられ、また班別討論の時間が短かったことも残念だった。

講演は、むずかしくて理解できないのもあったが、高谷先生の話は実に感動的で、共産主義の恐怖を体験された迫力にじみ出て、今まで、本で知っていた恐怖が身近に感じられるようになった。日常生活に戻っても、大いに発憤したいと考えています。

(中央大学 法 一年 中川雅行)

先生方の情熱と気迫に頭が下った

私は、身体の調子が思わしくなかったのですが、素直な班員の方々と接して、実に楽しく最終日まで過ごすことができました。

講義をなさった先生方の情熱と気迫に頭の下がる思いがしました。これからも是非、先生方とまごころのこもったお付

きあいをさせていただきたいと思えます。

(鹿児島大学 文理 四年 福寿一男)

目先の小さな実践が大切なのだ

入学して、二回目の合宿を経験し、今までに学んださまざまなことの整理がついたように思いました。理論と実践はどのようにあるべきか、このことは常に頭を悩ましていたことでした。木内先生が「我らは日々の目先の小さな実践を行なう事である」と云われたとき、「これだ」と思いました。

勉強の足りない一学生が、祖国とか学問とか十分に理解していないことを云っても何にもならない。どんな小さなことでも、まず自分自身の血となり肉となるように行なえば良いということに気づき勇気づけられた。この感動をもとに、これからは自分の個性をいかした活動を行なって行きたいと思えます。

(東北大学 工 二年 河合忠雄)

新しい一步を踏みだすことができました

諸先生の立派な御講義・御言葉に接し、迷いに迷っていた自分は再び新しい一步を踏みだすことができるように感じました。私が迷っていたことと云うのは、今後の自分の道をどこに見出すかということと、それに日本はこれからどうした

ら良いのか、現在のままで進めば、恐しいことが日本の将来に起ることを気付きながらも、座視しているだけではないか、といったことです。この迷いが、この合宿を通じて、解けたような気がしました。すなわち、日本人はあくまで日本人であり、それではじめて世界人、人類であり得るといふ言葉は、漠然としていた自分の考えにはっきりした自覚と自信を与えてくれたようです。

これからは日本人としての自覚と誇りを持って生きます。そして出来る限り友に語り、真の日本人の道を論じていき、次の日本をになう者の一人として、はづかしくない日本をつくるべく努力します。

(大分大学 経 三年 江畑守男)

政治の中へ文化を

私の感じたことは、伝統に立脚した日本的心情は、現代の政治にどのような影響を及ぼしうるか、すなわち文化活動が実際の政治のなかで重要な役割を果たしうるのか、ということである。

竹山先生も云われたごとく、異質の次元のもの同士で、同質レベルの問題を論議できないであろう。政治は俗世的で合理的な国家利益の追求である。この中へ、文化的な民族意識を移入しようと試みることは、国際政治における現代日本の

諸条件を考えるとき、再考に価する問題であると思われる。

(上智大学 法 三年 酒井唯之)

勉強のたりないことを感じた

現在の学生運動を考えるに、三派・民青など学生でないような学生にあまりにも学校はひっぱられ、それに対して真の学生たる道を考える人はいない。僕はこの合宿で、自分に勇気がないこと、勉強のたりないことをつくづく感じた。僕たちのなすべきことは、高尚な理論だけではなく、身辺の小さな常識的な実践からはじめなくてはならぬ。まず日本人としての自覚をもち、歪めて歴史を見るのではなく、真の歴史を見るように努めよう。

(玉川大学 工 一年 原 義人)

学問のきびしさ

木内先生の講義では、話の大きいのに驚いた。また二時間の講義が終る瞬間まで、身体の節々の痛みを感じなかったほどに情熱的だった高谷先生の実践的なお話や、その他諸先生の学問や文化についてのお話は、たんなる方法論を述べるのではなく、正しい心をもってお互いに信頼しあって道を求めてゆくことの大切さを述べられた。いま思い出されるのは、和歌を詠みあったとき目がしらが熱くなった感動である、そ

のとき真心を、日本の心を感じた。今から、なにが正しいかをよく考え、真心をもって学問を続けてゆこうと思う。最後に、この四百人で聴いた講義の内容を学校の講義と比較してみても、今まで学問のきびしさや本当の学問をしてきたのだからうかと思つた。

(鹿児島大学 農 二年 定栄安治)

第十一班—男子学生—

甘かった自分を思いしらされた

学園紛争の真最中であつて「まず行動」を要求されていた私は、「空しさが残つたらいやだなあ」と友人と話しながら合宿に参加しました。いわば、友人・先生への義理で参加したようなものだったと思います。その消極的な気持が、一日二日と先輩にぶつかつて話をしてゆくうちに、いつの間にか消えてゆきました。「大方こんなことを云われるのではないか」と思つて話してみると、それとまるで違う新しい見方を示される、あるいは自分が絶対に正しいと考えていたことが見事に崩れてゆく、これには爽快な感じさえしました。

先輩に突っ込まれ、答に窮してしまい議論しているうちに、いつの間にか涙がでてきたこともありました。いかに自分が甘かったかを思い知らされると共に、「僕がこんなに突っ込んで聞くのは、日本がいま重大な転機にあつて、大学の紛争

もその一つだと思つたらなんだよ。その中で君たちがどうしたらよいのか、それは他人の問題とは思えないからなんだ」と云われた先輩の言葉を実にうれしく感じました。更にまた「だが、しかし先生」となぜ直ぐ云うのか、「千万人と雖も我ゆかん」という決意がなぜできないか」と云われた小柳先生はじめ講師の先生方のお話に、胸ぐらを掴まれて揺さぶられたような感じがしました。これから先、大学の中で自分をどう生かしたらよいのか、やつとその道が見えてきました。最後に、見も知らなかつた友人と僅か四泊五日の間に、何と多くの事が話せたかと考えると、合宿に参加して本当に良かったと思います。(東京大学 教養 一年 西島 正)

別の世界にきた感じがした

私はこの合宿にきて、講義内容を聞き、その素晴らしさにまるで別の世界にきた感じをうけました。今までが余りにも霧囲気のちがう世界に住んでいたのです。今までの環境を良いとは思わなかつたものの、まあ何とか卒業さえすればよいという、安易な気持ちに落ちいつていたようです。時折、焦燥を感じ、迷い、何か神髄になるものがほしいとは思ひ続けていました。

私は、そのことをこの合宿に来て考えさせられました。この合宿で学んだことが、これからの私の人間生活に最も大切

なものであることを知りました。今まで私を覆っていた幕が開かれてゆく想いでふるえるような感激を覚えます。

私には、日本人の心を求め、それを勉強してゆくことが最も大切であると思います。

(西南学院大学 経 二年 毛利 享)

プラトンからも学ぼう

日本の伝統的文化の素晴しさを否定する現在の社会状況を憂うるあまりに、もし西洋の文化思想を否定的に評価するよるなことになるれば、それは正しいとは思われません。西洋の伝統的文化、例えばプラトンとかトマス・アクイナスなどからは無限に学ぶべきものがあるのではないか、私たちはそれを余り学んでいないのではないかと思えます。この点を竹山・小田村両先生にお聞きしたかった。ただ夜久先生の御講義を通じて初めて今上天皇の御歌をよみ、今まで自分が全く天皇の心を理解していなかった、いや理解しようときへしていなかったことを痛感し、相手の心を知るといのはこんなことであつたのかと思いました。

(上智大学 法 三年 田上桂作)

先輩のはげましに涙が浮かんだ

私は、この合宿では班長ということで、昨年とは違った意味で色々考えさせられました。学生運動にしても共産主義にしても、とかくその批判にばかり心がうばわれてしまうのですが、まず日本の心に目覚めようということで、私たち富山大学信和会では勉強を続けてきました。だが、今ではこの見捨てがたい学生運動の問題に、自分はどう対応すべきかという事で悩んでいます。

こんな話を班付の先生に話したら、その先生から「あなた方の信和会の合宿勉強の様子を、それに参加した小田村先生から聞いたとき、遠い北陸の雪の中でも合宿をやっている人たちがいるのだなあと思って考えさせられました」と聞いたとき、自分の悩んでいることにかすかな光を当ててくださったような気がして涙が浮かびました。私はこのとき、連帯感という言葉の生きた意味を知つたような気がしました。

(富山大学 工 三年 山田 滋)

勉強の方針が定まった

この合宿に参加した理由は、自分の殻にだけ閉じ込もっていては危険である、他人の考えを聞くことはよいことだと考えただけのことでした。天皇制についても、この合宿に来るまでは全くわかりませんでした。御歌をよめばわかる、

理論では理解できるものではないと聞かされて、勉強の方針が定まっただけでも、この合宿の価値は大いにありました。これまでの自分の性質や行動が、どんなに欺瞞にみちているものであったかが、自分をさらけだしてみて、よくわかりました。

(早稲田大学 理工 二年 日馬 譲)

考えることの窓口が出来た

まずこの合宿において、感動したというよりむしろ悩みの方が大きい。でも考えることの窓口が出来たことは確かです。高谷・小田村その他の諸先生の講義は大変有意義でした。しかし今迷っています。天皇についての話を聞き、とまどいを感じています。初めてこの合宿に参加して、国旗掲揚、リクリエーションにおける軍歌、慰霊祭など、これらは右翼化していないかと、私は言葉にならない迷いを感じています。山を降りてこのことについて勉強しようと思えます。古典を読み、その時代の背景を掴み、この会が示唆したことが妥当か否かを検討してみたい。

とにかく、学問の姿勢、人生について、祖国、いな現在の日本について考える指針を与えて下さったことに深く感謝します。

(鹿児島大学 工 二年 坪井信博)

自分の言葉で話す

イデオロギー(思想)や宗教を論ずる場合、ただ知識をならべるだけに終りがちだが、自分の言葉で話すことが大切だと思う。また、たとえ考えは違っていても、相手の主張に一度深く心を動かして考えてみる必要があると思う。

(鹿児島経済大学 経 二年 有馬健二)

第十二班—男子学生—

理論だけでは相手の心をつかめない

私たちが日本に生まれ育ったことは、運命的なことであり、私たちの生き方や物の考え方には、共通の要素が多くあることを強く感じました。私たちは、そのことからのがれられないし、またそれから全く遊離した時点で物を考えることは、大きなまちがいであることが、だんだんわかってきました。それと、私は、以前から理論とか論理的なもののお考え方を大事にして、それ以外のものを排斥しがちだったので、それでは決して相手の心をつかめない、ということが、はっきりわかりました。

(鹿児島大学 法文 二年 岡本幸信)

学園で教えられなかった明治憲法

私たちは、学園において、友達と、天皇制や憲法問題を論議いたします。然し、そのような論議はいつもかみ合わせずに、からまわりしてしまいます。戦後の教育を受けてきた私たちは、現憲法は世界に冠たる優秀な憲法であると教えられました。明治憲法については、ほとんど教えられていませんでした。今後、学園に帰って、私は祖国の歴史を自分の目で見て、自分の心で触れたいと思います。

(明治大学 商 三年 豊島典雄)

伝統にめざめた

私はこの合宿に参加して、「伝統」という言葉の意味を改めて考えさせられた。現在の混乱した日本を救うためにも、正しい歴史意識に目覚め、真心をもって人に接する生活態度が必要であると思います。理論的なことのみに固執するという態度ではなく、情意を尊重する生活態度こそが、日本人の心の伝統であると思います。

ただ、気がかりな事は、この合宿ではマルクス主義が悪いものだという先入感が強すぎるように思えた。私達は否定から始めるのではなく、批判精神を働かしていきながら、真なるものを学びとっていかうとする学園態度こそが、大切であ

ると思う。(拓殖大学 政経 二年 沼田 稔)

合宿主旨に賛成して参加した

この合宿に参加したのは、他人や先生から勧められたわけではありませんでした。高校を卒業してから二年間浪人生活を送りましたが、その時に、自分自身の生き方、学問に対する態度などに悩みました。まずそれに答えてくれたのが岡潔先生の「春宵十話」でした。それを読み、自分自身は言うにおよばず日本人全体、特に若い年齢層に日本の伝統を踏まえた情緒と言うものが欠けていることを、強く反省させられました。次に福沢諭吉や小泉信三等の著書にふれ、先生方の生活態度、学問に対する態度などに深く感銘しました。そして大学では、入学当初から学生運動が大変盛んでした。学生運動家の言うことは、真実を伝えることではなく、一方的で大いに反撥を感じました。ところが自分は、彼らの思想そのものをほとんど知らないし、また私の反撥する感情を論理化する力もなく、正しいと信ずる気持もありません。ただ今まで自分の感覚をもとにして考えることしか出きませんでした。そんなわけで、いろいろと自分の不満を少しでも満してくれる会なり先生はいないかと探していたところ、偶然この合宿のパンフレットを手にして、その主旨に同感し参加しました。講義で先生方が最初からマルクス主義を反駁され、あま

りの激しさにちよっと、戸惑いました。勉強不足のせいで、自分の心の歯車がしっかりとかみ合わなかった気がします。また和歌を作り、お互いに批評し合い、友と心が打ちとけた気がしました。

(鹿児島大学 工 一年 柳田芳光)

本物の人間になりたい

僕は、この合宿へ何かを得ようと思いつつも、いくばくかの不安を感じながらやって来ました。ところが僕のこの不安というのは、結局この合宿以前のいかげんな精神生活からくるものだということが、今になってわかりました。僕達、東大生は、今紛争のさなかにあります。自分の学園の問題に関して、いかにいいかげんに対してきたかを、小田村先生、小柳先生の御講義をお聞きして痛切に感じました。小田村先生が言われた「本物の人間になれ」という言葉が、頭の中に焼きついてはなれません。これからは毎日、真剣に「本物の人間になる」ために努力しなければならぬと決意しております。

(東京大学 理 I 一年 青山直幸)

多弁は必要ではない

班別討論などを聞いて、心のこもらない言葉だけが多すぎると思いました。そして大抵その言葉は、自分の思いではな

くて書物からの借物のように感じられました。私はそれを悪いと決めつけるのではないのですが、人間は根本さえ見えわれば良い、学問の道もそうであると思います。

(亜細亜大学 経 三年 大場一知)

「まごころの尊さ」を実感した

私は今迄、人のまごころの尊さについて多くの人の話を聞いてきましたが、私はこの合宿ではじめて、まごころをつくすという事を体験的に知る事ができ、その尊さを心の底に植えつける事が出来ました。

特に小柳先生の御講義の中で、吉田松陰の言葉から「心の定め方」の意味を知る事が出来ました。理論的考察に裏づけられた主体性を持つ事も大切だが、それ以上に理論を超越したものは、まごころであるということ強く感じました。この体験を生かして背のびをせずに、私なりに少しずつでも自己を高めていこうと思います。

(鹿児島経済大学 経 二年 相徳和義)

歴史と古典に無知であった

僕は、この合宿で、いかに学校において、日本の良き歴史と古典が正しく教えられていないかを知りました。自分自身

が、歴史と古典について無知であることに気付き、深く反省させられました。僕たちは、合宿で学んだことを身に付け、学校や周囲の友達に、日本人としての自覚を促すよう、呼びかけていかねばなりません。

(明治大学 政経 三年 井手一雄)

ねむっていた心が目覚めた思い

合宿を終えた今、心の中のもやもやが消えてゆくような気がする。心のそこから大声でさげびたい。今までの自分とはまったく違って来たような気さえる。

友達や先生方からさまざまなことを学んだが、今後これら のことをふまえて勉強してゆきたい。合宿のはじめの頃は、先生方の講義が一方的すぎるのではないかと、班別討論でも、自分だけ異なった考え方をしているようで孤独な感じがした。もう帰ろうかとも思ったが、三日目の韓国岳登山で和歌を作ったり、慰霊祭に参加しているうちに、胸内にそれまでねむっていた心が、目覚めるように湧きあがってくるのを覚えた。これを契機として学問・人生・祖国に本気でとりくんでゆきたい。

(西南学院大学 法 二年 石川正俊)

第十三班—男子学生—

求め続けてきた学問を見出した

大学入学以来求め続けてきた学問が、この合宿に参加してはつきりとわかったような気がする。日本人として、日本の歴史、文化、精神というものがどういうものなのかをよく理解して、恥づかしくないように生きることが学問ではなかるうかと思えます。高谷先生の御講義を聴き、卒直にいつて私は先生の情熱に圧倒された。今まで表面的に物事を判断していたが、三派全学連の不法な行動などをもっと徹底的に批判して勉強してゆきたい。

(長崎大学 教 一年 橋本晃一)

合宿で大きく進歩した

合宿には二度目の参加です。思想混迷の現代において、何を基準にして物事を考えたらよいかと思うとき、私は古くから伝わってきた日本人の心、日本の精神の中に求める基準があると確信してきました。このことに私は自信を持ち、つきにはさらに進んで日本精神が何であるかを求めて進まねばならないと思う。これに気づき確信をもてただけでも大きな進

歩である。今後は実行にうつすだけだ。

(明星大学 理工 四年 平井隆洋)

「まず心を定めよ」という言葉に感動した

私はこの合宿教室によって「まず心を定めよ」という言葉に強い感動を覚えました。いろいろなことを問題にする前にまずなによりも、自分の信念を持たなければ道は開けないという小柳先生のお言葉には、ただただ深く感動するだけでした。私はこのお言葉を信じて、大学に帰ってから、祖国や人生を語りあえる学問の場をめざして、ささやかでも力を尽してゆきたいと思えます。

(熊本大学 工 二年 松田信一郎)

一生懸命語り合った

合宿に臨んで自分は班をまとめようなどという気は出来るだけ起きないようにして班長をつとめようと心に誓った。けれども第一日目も二日目もどうも話しが発展しない。三日目になって意を決して班の友達の意見に納得のゆくまで食い下って行った、そこではじめて討論に熱がこもり友達も自分の考えを自信を持って発言してくれる様になった。四日目の小柳先生の御講義の後、三人の友達と激論を交わしたが、どう

しても話しが通じない。一生懸命語りあえば心はきつと通じるはずだと思ひ、消灯後友と語り合っているうちに、不思議とお互いの心の間をおおっていたものが何処かに消え去った感じで、お互いの気持が通い合ったときは本当に嬉しかった。

合宿を終えて、本当に共同生活を送ったのだ、という喜びが泉のように湧き上ってきます。

各人が正しいものを求めてゆく姿勢を持ち続けていたからこそお互いの心が通いあったのだとしみじみ感じています。

(上智大学 法 三年 津下有道)

本物の人間になろう

今回の合宿で一番印象に残った御言葉は、小田村先生が言われた「人間として本物になろう」ということでした。それは何よりもまず我々のなすべきことは、反共というイデオロギーを固めるよりも、学問への正しい態度を定めるということであると思う。

現在のジャーナリズムに惑わされることなく、地道にでも古典にふれて日本の良さを知り、人間のまごころに接し続けることが大切だと思う。

(防衛大学 航空 三年 太田文雄)

素直に話し合えた喜び

合宿参加は今年で二回目です。去年はなかなか発言も出来ませんでした。今年、班でそれぞれの問題を素直に出し合っていて、話し合うことが出来てうれしかった。自分の信頼できる友達に対して苦しみや悲しみを素直にうちあければ、きっと心が通ずるのだということを経験しました。

(亜細亜大学 経 三年 大塚達朗)

親に対して素直になりたい

マルクス主義に疑問を感じていたのですが、マルクス主義を体験を通じて学ばれた高谷先生のお話しを聞いた時に、疑問がとける思いでした。先生には、夜おそくまで親切に教えていただき、大変ありがたい気持ちで一杯です。山田先生の御講義で、親子の中にも情がかよわなくなってきたというお言葉を聞いた時、親に対して、もっと素直になりたいと思います。

(九州大学 医 二年 遠藤政幸)

感動に押し流されたくない

多くの参加者が、それぞれ異なった考え方を持っているの

は当然だと思えますし、相異していることこそが大切なのだと思います。

この合宿で私も感動を受けました。しかしこの感動に押し流されてしまうことだけはさげたい。

(上智大学 経 一年 深谷昭広)

真心をもつことの大切さを感じた

合宿に来るまでは、他人と話すことが僕にはできそうもないと思えて、班別討論の事が気にかかっていました。参加してみてもやはり、他人と話すことのむずかしさを、ますます感じました。けれども合宿を終えた今、感ずるのは、自分がみじめだということだけではありません。先輩の話や、講師の方々のお言葉を聞いて、真心を持つことの大切さを感じさせられました。真面目に自分と身のまわりのことがらを見つめて、勇気と自信とを持って生きておられることを、講師の先生方のお姿に感じました。

(長崎大学 水産 一年 松岡英二)

イデオロギーを超えるもの

私はこれまでイデオロギー的論戦の中で何か一種の冷やかなる物を感じずにはおれませんでした。だからこれに情熱を

燃やして一生懸命になっている人と話しても、そこには何か
が失なわれているようで恐ろしい気がします。

私は人間を結ぶのは理論ではなく、それを越えた何かであ
ると信じます。それがかすかではあります但し明らかになりつ
つあるように思います。そのことを、この合宿教室は教えて
くれました。

(九州英数学館 石橋竹敏)

苦しい息のつまりそうな四泊五日だった

私の頭は、全く混乱している。学園紛争の解決に対する苦
しい気持は少しも減じていない。学校においてはスト破りを
したことで「右翼・反動・ナンセンス」と非難され、また完
全な村八分をくってしまい、この合宿では「君は間違ってい
る」と言われる。同じ学校の友人が、全体意見発表の時「私
達をごまかしていた、真剣さに欠けていた。」と述べる。だ
が、私は小田村先生、小柳先生の御講義をお聞きした現在で
も、自分の態度をごまかしであった、真剣さに欠けていたと
口にすることはできない。私は学園紛争を憂れえることに
いて、決していいかげんではない。苦しい息のつまりそうな
四泊五日だった。

(東京大学 文 I 一年 洪谷典章)

第十四班—男子学生—

外に向って行動したい

講義で最も強く感じたのは我々の大学内に紛争が起きてい
るにもかかわらず、自分が如何に逃避していたかということ
です。小田村・小柳・夜久先生のお話を聞いて、無意識の中
にも、自分達が他から孤立させられることを恐れていた心が
さらけだされたような感じがします。また、我々は東大信和
会というグループを作り、毎週読書会を開いて勉強をしてき
ましたが、学園の紛争解決のための行動は何もしてこなかっ
た。これは、とりもなおさず読書会により、騒々しい学園の
中で不安をまぎらわせ、自分をごまかしていたのではなか
ろうかと感じさせられました。我々は、特に私は、学園の正
常化のために第一歩すら踏みだしていないことに気づきまし
た。今後は、効果の大小に気をとられずに、外に向って行動
しようと強く思っています。

(東京大学 教養 二年 西村隆夫)

友達が如何に大切であるかがわかった

先生方の講義や友達の見解等を聞いていくうちに、自分な

りの価値観、判断の基準がぐらついて、だんだん自信を失な
って、わからなくなってきた。天皇についても、明治憲法に
ついては何一つ結論みたいなものを得ることはできなかった
が、物を考える上での基本的態度、心のもってゆき方などは
得たつもりです。自分が無知だったということに気づいただけ
でも、私にとっては大きな収穫でした。また知識だけでは
相手の心を揺り動かし感動させることはできないことがわか
りました。相手にありのままの自分を卒直にぶちつけるとい
うことがどんなに大事であるかとか、友達が人生において如
何に大切なものであるか等をわかつていただいた。最後に
合宿教室で得たものを基礎として、自分で判断し、自分の心
で決めるといふ心構えで生活してゆこうと思ってます。合宿
に参加する前と今では、大げさなようですが、自分が別人に
なったような気がします。

(鹿児島大学 法文 二年 藤田 初)

先生方の真剣な姿に心うたれた

先生方の御講義をはじめ、合宿での色々なことがすべて私
にとっては問題の提起で、最初の三日間はとまどって困って
しまいました。でも小田村先生の、学問とは何かという講義
を聞いて、日頃大学で無味乾燥な講義に馴らされていた私は
心を強く揺り動かされました。また先生方の熱意あふれる講

義こそ、本当の学問だと感じました。とくに高谷先生の体験
のじみでた、情熱があふればかりのご講義には思わず涙
がでてきそうになりました。それとともに、小田村・夜久・
竹山先生の学問に対する真剣な姿勢を私も身につけようと思
いました。勇気と信念をもって、苦しい時は先生方のお姿を
思い起こして学園の正常化に取組んでいく積りでです。

(東北大学 工 一年 出川 通)

間違いを指摘する勇気を出そう

先生方のご講義をお聞きして恥かしくなった。今まで、大
学の授業をまじめにうけて、それを一生懸命にやろうという
意志がもてさえすれば、それで学問に対する姿勢ができたの
だと考えていた。しかしそれだけではだめだと思ふようにな
った。例えば私の学園でも、教室の入口、廊下、製図室と、
場所をわきまえずにビラが公然と貼られている。それがいけ
ないことだと思ひながらも、それを言いだす勇気がでなかつ
たことが残念である。ビラは必ず掲示場所以外に貼らせない
ように勇気を出して指摘しようと思う。

(東京工業大学 工 四年 大岡 弘)

「疑う勿れの義」という言葉に感動した

(上智大学 経 一年 北崎伸一)

努力の目標ができた

「疑う勿れの義、功利者流の知る所に非ず」との吉田松陰の言葉に私は後頭部をなぐられた気がした。私はどうして物事を素直に受けとめられないのかと、自分が腹立たしく思われ、自分が情けなくなってきたのです。疑うということは一見もつともらしく思われるが、それだけでは決して真理を体得できないと思うのです。人間にとって一番大切な真心を欠如させるからです。人間の人間たるゆえんの真心を忘れては、この世に生をうけた意味がないということが、この合宿を通してわかりました。いっばしの懷疑主義者であると自認していた私は、人間としてのまっとうな道から大分外れていたようです。私は自己を厳しく反省させられました。

(神戸大学 法 三年 足立哲朗)

大日本帝国憲法に取組みたい

川井先生のご講義を拝聴した時、自分がいかになまけていたかがよくわかりました。神情開朗という言葉のすがすがしさが良くわかります。是非、この体験を友達に伝えたいと思います。霧島の山を下ったその日より勇敢に学問を開始したい。大日本帝国憲法に真剣に取組みたい。

自分が如何に人の話の真意を汲み取る力がなかったかというのをこの合宿で思い知らされました。というのは、講義して下さった先生方が何を僕たちに訴えたかったのが良く把握できなかったし、班別討論で、班員が一生懸命に語りかけていたことを十分に受けとめることもできなかった。こんなことで一体どうして、お互に信頼し合えるつきあいができるのかと苦しみました。僕は今後、人とのつき合いにおいて、自分の納得のいく言葉で正確に相手に伝えるという、人間としての基本的態度を自分のものにする努力を積み重ねようと思心しました。

(早稲田大学 法 三年 斉藤 実)

マルキシズムの誤りを確信した

高谷先生のご講義に感動しました。毎晩、先生のお部屋にお邪魔し、夜遅くまでお話を聞き、そこではじめて、三派全学連の行動と思想は誤っているということをはっきり感じとりました。そして、共産主義体制下では真の人類の幸福は決してありえないと確信しました。そこで今後は、マルクス

・エンゲルス等の著作をより深く勉強し、全学連に共産主義の誤ちを指摘し、真に人類の幸福のために戦うつもりです。

(長崎大学 経 一年 赤繁明法)

本当の友達づきあいをしたい

私がこの合宿に来て最も感じたことは友と話すときも、本を読むときも誠をもって当るということ、そして自分の思っていることを、何もかも友に話し、友も自分に話してくれるような何のわだかまりもない、本当の友達づきあいをこれからしてゆきたいということです。

(日本大学 農獣 一年 坂田敬治)

高谷先生の情熱に感激した

高谷先生の部屋に数人でお話しを聞きにいったとき、先生は夜中の一時、二時頃まで一生懸命、我々に教えて下さった。先生は相当なお年であられるにもかかわらず、「私は明日の朝までお話をしても構いません」とまで云われたのには、非常に感激した。

(松江南高校 二年 青砥誠一)

第十五班——男子学生——

真心をもって物事を考えよう

第一に私は諸先生方の情熱に心うたれました。御講義や合宿生活を通じて溢れ出る諸先生方の熱意が心にじかにしみとおってくるのです。また、大学での一般の論議がともすれば表面的なものになるのに対し、この合宿では皆が真剣になって、よく考えて、真心をもって話合っていることは素晴らしいことだと思いました。私は何といたっても真心をもって誠の道を進むということが、そしてその心構えをもって物事を考えるということが大切だと思いました。

(東京大学 文I 一年 小田村初男)

御製に心うたれた

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめりけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさととどめけりただたふれゆく民をおもひて

和歌というものの美しさ、日本的な響き、情緒を霧島合宿で初めて知った。それはもうまったく素晴らしいものであつ

た。特に右に引用した、今上陛下の御歌には、理屈ではない、本当に国民の身を案じて下さっていた御心がはつきりと表わられていて、何か目頭が熱くなるような気がする。この御歌からでも、あのマッカーサーとの会見の場面がはつきりと想像できるのではないか。人間の心、日本の心、この素晴らしいものが失われている現在、和歌に接することによって「ああ、自分は日本に生まれてきて本当によかった」と皆が言えるように、色々な機会に和歌創作を広めてゆきたいものだ。この合宿の五日間、色々な人達と接してみても、皆が一生懸命、この日本を良くしようと思っていることが、態度を見ていると、話しをしていても感じられ、非常に心強く思った。

(岡山大学 法文 一年 井上雅茂)

千万人と云えども我行かん

諸先生方の御講義、特に小柳先生の「君達には、孤立化を恐れて『千万人と云えども我行かん』と云う気概がない。そして、多数派の意見であれば、誤りがあると思っても、それを正してゆく勇気がない」とおっしゃられたこと。そして、川井先生の「発憤せよ、そしてまず身近なところから行動せよ」との言葉を聞いてはっと気がつきました。一体いま何をしたらよいのかと苦しんでいた私は、「よし」という気持ちになりました。私は身近なところから、つまりクラス討論等

の場において、自治会の主張に押し流されそうな学友がいても「私はそうは思わない」と発言して、積極的に働きかけようと思います。この合宿で自分にもそれができるのだという勇気が与えられたような気がします。

(早稲田大学 教 二年 戸辺 武)

解決の糸口が見つかった

天皇とか、民族主義とかいう言葉に対して、うしろめたさがなくなりました。いかにもせまくて島国根性ではないかと、心のかたすみで思っていました。しかし一方、自分は日本人であるとの自覚もあって、どうもスッキリした考えができませんでした。しかしようやく解決の糸口が見いだされたような気がしております。でもまだ心高らかに、日本人、祖国日本と云うことができなくて恥づかしいのですが、日本民族の一員であるとの自覚を高めたいと思います。それからマルクス主義者達の圧倒するような積極的な行動に、気遅れがしてなりませんでしたが、これからはこのマルクス主義に対してハッキリした反対を示したいと思えます。

(鹿児島大学 水産 一年 安元 進)

自分が恥づかしくなった

御講義の中で最も印象に残ったことは、文字や言葉を表面的に理解するのではなく、言った人の真意を汲みとることでした。このことは以前からそうしなければならぬと思っていましたが、御講義をお聞きして肌で感じさせられたように思います。また御講義にも増して、私が感激し、反省させられたのが最後の全体意見発表でした。私と同じ若者がかくのごとく純粋な心を持っているのかと、皆の感想を聞いているうちに自分が恥づかしくなり、もっと大きな心を持って生きていかなければならないと思いました。

(福岡教育大学 教 三年 土佐野実)

深い感激を得た

自分の人生を深い感激をもって生きて来たことのなかった私は、地区別懇談会で長内先生が云われた「人間には人それぞれの生き方があり、人が学生問題に取り組むからといって、自分もそれに取組まなければならぬ」ということではない。それを考えることは大事なことであるが、背伸びしないで自分なりに、人間として本物になるよう、また人間として日本人として、私は強く生きたい」とのお話しは自分の胸に

迫るものがあつた。人間として本物になるため、これからの生活を送りたい。

(金沢大学 工 二年 岩崎哲夫)

一刻たりとも無駄にできない

合宿に参加して自分には今までの生活に反省させられる点が非常に多いことを感じました。一つの問題に対して自分の理解のゆくまで考え、話し合うことの大切さを感じた。しかしながら、自分は班別討論の場で、自分の意見を卒直に出すことができなかったことが残念でならない。とにかく自分は何のために生まれてきたのか、人生において自分は何をすべきか、何か自分の生きる道、自分のすべきことがあるのではないか。こう考えると、一刻たりとも無駄にはできないと思います。

(亜細亜大学 商 一年 黒川邦久)

全学連を正しい方向へ

私は全学連を正しい方向に導く義務がある。私は一般学生と団結し、彼らの一人一人に正しい生き方を話してやりたい。私の大学には紛争は起きてないが、事なかれ主義ではないかと思つた。

(亜細亜大学 商 三年 鴨下正克)

背伸びしないで確実に

私は今回も今上天皇の御製にふれて感激いたしました。過去において何度もふれたことのある御製ですが、やはり感激しました。私はこのような天皇が日本におられることを大変幸せに思います。

また、心に強く残ったのは、木内先生の話された「日々の小さな実践」と小田村先生の話された「背伸びしないで確実に」というお話しでした。私はこれからの生活において、身のまわりのことから着実にやってゆきたいと思っております。

(玉川大学 工 三年 細田邦泰)

第十六班—男子学生—

生活の指針ができた

この合宿教室は、三派全学連などの学生運動に対抗する目的で開かれたのではなく、小田村先生のお話にあったように、真剣に人生をみつめる人になってもらいたいということが目的であると思った。

人が真剣に自分の人生を考えた時、各自の立場で出来るかぎりのことを行なう、それがひいては日本を守り、発展させる

ていくのではなからうか。私達の祖先がそれぞれの立場で真剣に自己の人生を生きてきたからこそ、今日まで日本が発展してきたのだと思う。この合宿で得た「人生とは本物の人間になろうとする事だ」ということを、これからの生活の指針にしてゆきたいと思う。

(慶応大学 法 一年 河合一寛)

合宿での思いを抱いて生きる

学生の姿はどうあるべきか、僕は合宿教室を通じて、このことが本当にわかった。物事に真剣に取組む姿ほど美しく素晴らしいものはない。物事に対し、素直で誠実な心を持って対処してゆけば、必ず真実が発見できるに違いない。真剣な討論、熱心な先生方の講義、僕は自分の考えが壁に突きあたった時、これらのことを思い出し、歩み続けたい。それがいかに遅々たるものであっても。

(神戸大学 法 三年 安藤幹雄)

日本精神の素晴らしさに感動した

この合宿における感想として、まず私は「自分自身が日本人である」との確信を得たことをあげようと思う。

あの幕末の志士の偽らざる歌を、くり返しくり返し心の

でよみ返す時、心の奥底に「ある種の感動」、「胸をしめつけられるような想い」が湧き起ってくるのをどうしても押えることができない。日本精神の素晴らしさを語られる諸講義において、僕は幾度も深い感激に身を震わせた。

歌の全体批評の時、僕の歌を評して山田先生はこういわれた。「今後とも歌心を失わないでほしい、歌心を失ったら三派の学生と同じになる」と。僕はそのことを肝に命じてこの霧島の地を去りたいと思う。我々の活動がアンチ民青、アンチ三派の活動でなく、深く民族精神の原点に根ざしたものである以上、民族精神の発露として花咲いた歌心は、我々の活動にまさに必須のものであると思う。

(長崎大学 教 三年 安東 巖)

日本人の情緒の中に生きよう

この合宿に参加して本当によかったと思います。というのは諸先生方の講義を聞いて、その話される問題は異なっている、そこには一貫した精神が流れていることにはじめて気がついたからです。それは小田村先生の云われた「本物の人間」に通ずるものです。そして日本人であれば、誰もが帰趨すべき道なのです。

真心、情緒等わからないものばかりですが、これからの自分の道は、真心、日本人の情緒というものを、生涯追求する

ことにあると確信します。そして、絶えずこのような姿勢で、自分のこれからの生活に対処してゆきたいと思えます。

(富山大学 工 三年 浜岸悦生)

日本的なものを勉強しよう

この合宿を通じて、私の今までの勉強がいかにか知識面だけに限られていたかを痛切に感じました。

また、私達は外国の模倣でない和歌や、昔からある日本のなものを探求し、考えなければならぬと思いました。

(福岡大学 商 二年 山本雅史)

発憤し決意を持続させよう

私は学園の構内で毎日繰返される全学連の暴走を見て、日本の前途を憂え、彼らと対決してきたつもりでした。しかしその対決は観念の世界のみで、行動がともなっていないませんでした。この自分に較べ、同じ班になった長崎大学の安東さんに会って、その言動に感動させられた。私は彼のように、自分の生活つまり人生目的を全学連との対決にもとめて行動することができなかった。また、そう自覚すべきものとも考えていなかった。彼の話を聞くにつれ、臍げながら自分の進むべき道に気づいてきた。私は発憤した。この気持を持続した

い。何十回、何百回と発憤しつづけることだ。それでこそはじめてその決意は持続するのだと思います。

(法政大学 法 二年 小川洋司)

反撥を感じた

私はこの合宿に参加して、多少とも反撥抵抗を感じた者の一人であります。なぜかといいますと、全般的に国民文化研究会の先生方やその他の年長者の発言力が強過ぎるように思えるからです。もちろん、先輩および年長者の意見、行動は尊重すべきではありますが、学生の自主的な会の運営も一考する必要があるように思えます。

それから「日本文化の本質」を理解し、近い将来の日本の危機的状況を認識したならば、私は今の学生運動に本当に生命をかけることができるような気がする。

(長崎大学 経 二年 岸川 守)

固定観念のない合宿

全体にあふれるエネルギーにまず驚きました。そしてこのエネルギーはどこからくるのか私なりに考えてみますと、この合宿には、こう考えろというイデオロギーがなく、全体が日本人であるという共通の意識とその心情によって、結ばれ

ていたからだと思いました。

私の大学にはよその大学のようにマルクス主義は充満していないけれど、何かこう考えねばならぬかのようなムードがあり、学生は何となく抑圧を感じています。しかし、私は今後学園に帰って、我々の学んでいることは絶対に間違っていないんだということを学友に語りかけたいと思っております。

(皇学館大学 文 三年 吉田慎一)

第十七班—男子学生—

ごまかしのなかつた五日間

私はこの合宿に臨むにあたって熱意をもってやろうと決心し、厳しい日程での肉体的苦痛をいとわず、全精神を集中してすべてのことにあたったつもりです。そのためか先生方の御講義の内容、班別討論、班員との雑談の中で、話す人の考えていること、話の奥に流れていることなどが、以前よりはつきりとわかってきたように感じます。このことはこの合宿での大きな成果でした。もう一つの前は木内先生のお考えに触れることができたということです。人間のめぐりあいについての質問をしたのですが、非常に親切にお答えくださり感激しました。四泊五日の合宿を終えて感じる、このすがすがしさは久しぶりに自分を取り戻したという思いです。

(長崎大学 経 三年 佐藤健治)

感激の涙のこぼれるような人生を送りたい

自分自身、人間として何が本物であるのか、以前から考え続けていましたが、この合宿に参加して、新たに一つの契機を与えられた。日本人である以上、過去の歴史を知り、また祖先の心情にふれて、自分の立場を正しく認識しながら精一杯歩みたいと思う。非常な困難と苦しみをとまなうこととは思いますが、先生方が正しく踏み行なってこられた道を学んで古人の心にせまって感激の涙を流したい。

(九州大学 工 三年 河野 勤)

まず日本のことを学ぼう

参加前の気持は、少々ためらいもありましたが、学問に向う自分の姿勢を先生の御言葉や、友達との付き合いでしっかりしたものにしたかったです。私は他にみられない日本独特の文化の中に、国民の心の底に流れている何ものかを感じるのです。各地でそれぞれの問題に取組み活躍している友達の話しを聞く度に、胸の血が騒ぐ思いです。しかし、今の私にはすぐに行動することは大変勇気のいることです。静観とい

ったら、学園で行動して苦しんでいる人々に対して、失礼になるかもしれませんが、私はまず日本の文化・教育・政治を地道に勉強しようと考えています。

(玉川大学 文 二年 姫野道夫)

古典の読み方が純粹でなかった

昨年、の合宿から帰ってからの一年間、万葉集、古事記を始め幕末志士の歌に到るまで、とにかく気遣いのようになって日本の古典を読み漁りました。しかし、この合宿で僕の今までの古典の読み方がちっとも純粹でなかったことに気がきました。古典を読む時の態度に関して、小田村先生は、「その古典を書いた人の気持になって読みなさい」と言われました。しかし、そのような気持で古典を読むことに私は内心恐れを抱いていました。その人自身になりきるような読み方だとすべてが良く見え、盲信するようになるのではないかと、う心配を持っていたため、信念をもって読むことがいまままでできなかったからです。(金沢大学 工 二年 羽喰守秀)

ひとりよがりにながついた

この合宿に、私の大学から同じ志をもった学友二十数名が

参加している。ところで、大学では同じ者ばかりと接触しているため、話合ってもマンネリ化し、あまり面白くなかった。そこで私はこの合宿に参加したのですが、成果があったと思う。特に、今までの自分が闘争本位のひとりよがりな考え方になっていた点に気がついたことである。日本人の心・考え方を聞いたとき大切なものを忘れていたように、自分があまりにも日本人として恥づかしい気がした。

(長崎大学 教 二年 浜田敏和)

講義の内容にとまどった

先生方のご講義の内容が、今まで自分の考えていたこととかなり異っていて、とまどった。また同じ班の人々の考え方も異っていることも多かった。もちろん、まったく同感して、思わず「その通りです、僕もそう思います」と大声を張りあげそうになったこともあった。特に高谷先生、竹山先生のお話などを聞いて、そう感じた。

次に僕が大いに反省しなければならぬと感じたことは、僕の議論が、議論のための議論になりがちであったことです。ともかく、僕はこれから一年、これらの問題について十分考えようと思っている。

(秋田大学 鉦山 一年 渡辺 晃)

日本人としての自覚に目覚めた

私は初めて合宿に参加致しました。国民文化研究会のパンフレットを読んで、最初、この合宿教室は洗脳教育をするためのものではないかと非常に心配しました。しかし、来てみると学園にいる時よりも、班で知り合った友だちに、自分の心のもやもやとしたものを何のこだわりもなしに語れた。その時の気持は大変さわやかであった。そして今迄忘れていた真の日本人としての自覚に目覚めたような気がする。その契機を与えてくれた諸先生の御講義に感動した。今の気持を忘れずに、これからの人生を歩んでゆきたい。

(明星大学 理工 三年 藤沢史人)

古典の心にふれたい

この合宿教室に、友達から勧められて不安ながらも、やってきた理由は、「知識がなければ何も語れない」と日頃痛感しているので、何らかの知識が得られるのではないかと思っただからでした。しかし、一緒に討論に参加して下さった国民文化研究会の先生に、自分の考えがいかに間違っていたかを指摘され、はっと目がさめたような気がしました。本当は自分の意見を発表する勇気が欠けていたからで、一種の自己弁

第十八班——男子学生——

護になっていたのだと思いました。ただ単に知識を得るだけでなく、物事その立場になって考え、それを自分の生き方の中で考えてゆく必要があることを強く感じました。今は古典の心にふれたいという気持ちで一杯です。

(鹿児島大学 工 二年 古賀 保)

祖先の心情を受け継ぎたい

合宿は初参加で、期待に胸をふくらませる一方、初参加で班長という重荷を負わされ、複雑な気持ちで合宿教室に臨みました。三日目まではこのような複雑な気持ちが強く、講義に対する心の姿勢も整わず先生方の一語一語をかみしめて聞くことが出来ませんでした。そのため、班員が何を考え、どういう感想をいだいているのが全くつかめず、班別討論もうまくゆかず、非常に悩み、苦しみました。しかし四日目から御講義を素直に聞けるようになりました。

この合宿で最も感じた事は、私達の祖先が何と素直な、まっすぐな心情の持主であったかという事です。この祖先の心を、物の見方を、思いやりを私を受け継ぎ、子孫に受け継いでもらう事こそが日本の歴史であろうと思います。私達が概念的に、簡単に論じている天皇制の問題も祖先の心情をぬき

にしては考えられないと感じました。少しづつでも日本人の心情に近づき、人を信頼してゆくことの素晴らしさを体得したいと思います。(鹿児島大学 法文 三年 寿美博太郎)

先ず足元のことから行なおう

私が今回の合宿で得たことは、日本人の心が何であるかを知り得たことであり、また外国の思想を無批判に絶対的なものだと受け入れ、革命を起こそうとしている人々に対して、私達はどのように戦ってゆけばよいかということです。特に二年後の安保闘争が懸念されます。けれども自分の置かれている立場を離れて無理なことをするのはなく、まず足元のことから行いたい。それがついには国を守ることにもつながることだと思っています。

(玉川大学 教 一年 森山 新)

日本の歴史・文化を学びたい

今迄いかに自分が裏づけない誤った教育を受けて来たかを感じました。また私達が日頃討論している憲法や共産主義についての論議が、いかにうわっ調子のものであるかがつくづく反省させられました。私は一生懸命、日本の歴史、文化を勉強してゆきたい。本物の人間になるために真面目に

生きたいと思えます。(東海大学 経 一年 松本洋治)

祖先の思いに連なろう

親おもふ心にまさる親心けふのおとづれ何と聞くらむ

父ならぬ父を父とも頼みつつありけるものをあはれ吾が子や

これらの和歌を詠んだ吉田松陰や伴林光平、その他幕末の志士達の悲痛な思いによって日本がささえられて来たことを知るにつけても、世俗的な思いを捨てきれない自分が口惜しくてならない。慰霊祭でも、今一つ素直になれなかったことがなさけない。一昨年、伊勢神宮にお参りした時の純粋な気持ちをなくしたのだろうか。

自治会の活動をしている時は純粋な気持を失なっているなどとは全く感じていなかった。これからは古典にふれて、祖先の思いに連なって生きていくことにより、自分の直面している問題を克服したい。

(長崎大学 水産 二年 松岡 淳)

道を求める心を大切にしたい

これまでの学内での自分の行動が、いかに逃避的なものであったかを深く反省している。純粋な心にふれて、感動して、自分の心を大切にしたいと思った。合宿を終え、山を降

りても道を求める志を大切にしたい。現実の学園生活に真正面より取りくんでゆこうと思う。

(九州大学 法 一年 大田黒 裕)

甘えない強い心を持ちたい

このような場を与えて下さったことを感謝いたします。甘えない強い心が必要だと感じました。班の人達とうちとける努力が足りなかったことを反省しています。和歌を詠んでみて自分のくだらなさがわかりました。

(九州大学 医 二年 小川 清)

真心こそが大切なのだ

前の合宿で日本の情緒の一端にふれて、この合宿の意義を理解したと思っていた考え方の甘さと、前回の合宿からあまり成長することのなかったことを先輩にさとされた時に、言葉も出ず涙が浮かんだ。真心をもって相手の心を理解していなかった私の言葉は、先輩の真実の生き方の前では無力を露呈し、自分の人間としての小ささを示すことになったのだ。私は屋上へかけ上り泣いた。己れの小ささが悲しくて泣いた。先輩の慈愛がむしろにくくて泣いた。

日常茶飯の何でもない行為の中に、「真心」を見出すこと

の大切さがしみじみ感じられた。当り前の挨拶さえも忘れてしまった現代の殺伐さの中で、人と人を結びつけるものは「真心」なのだ。私は今、心の中に灯がともされたような静かな感激で満ちあふれている。

(慶応大学 法 三年 雨宮夏雄)

祖先の心にふれ和歌に親しみたい

心の奥に沈んでいたものが呼び起こされる気がした。最も強く感じたのは古典を読みたいということです。我々の祖先の遺された書物にふれ、祖先の心にふれようと思う。また和歌は人のつきあいに大きな作用をなすものであり、自分の気持ちを相手に伝えるために、言葉を正確に使う修練になると感じ、和歌に親しみたいと思いました。

(亜細亜大学 商 二年 吉田悦郎)

なじめなかった合宿教室

学生運動を行っている三派系、革マル系の学生達も国を思うという点では発憤している人達だ。理論や戦術に対しては反対ですが、彼らも国を思って発憤している点では共鳴出来ません。けれどもこの合宿では彼らを全く認めていないような気がしてなじむことが出来ず、慰霊祭に出席した時も限定さ

れた霊を祭られているように感じました。

(鹿児島大学 農 三年 納山栄樹)

第十九班—男子学生—

友達の素直な心に打たれた

合宿最後の夜、今夜が最後の夜だということで班員一同でお茶を飲んでいううちに、誰からともなく合宿の感想を述べ始めた。その日まで口数の少なかった一人の友達がぼつりぼつりと語り始めたが、彼の言葉を聞いた時、僕は自分が何と一人よがり、自分の考え方に固執したままで、この合宿を過ごしてきたかと思い知らされた。僕は自分の考え方を確かめにこの合宿に来て、確かめられたらと思い、合宿に来た目的は達成されたと安心していった。そんな時に彼の言葉を聞き、これが真心、素直な心というのだろうと思った。

心の底から思いが湧いてくる友達の言葉に、自分のいたらかなさを感じると同時に、ああ素晴らしい友達にめぐり逢えたという喜びを感じた。(亜細亜大学 商 四年 宝辺幸盛)

「和歌の心」を強く感じた

この合宿を通じて最も強く感じたことは、「我が霊はなほ

世に上げるみささぎの小笹の上におかむとぞ思ふ（伴林光平）等の和歌にふれて、「和歌の心」を感じたことです。大学の現状を目のあたりにみて、何とかしなければならぬという気持ちで、学内正常化の運動に努力して来たつもりです。憎しみの心でもって暴力をも辞さないという学生活動家達に對してゆくうちに、私自身も彼らと同じように憎しみの心で行動する可能性があります。

間違つたものに対する厳しい怒りは必要ではありませんが、私達は「和歌の心」を忘れてはならないと思ひました。

（長崎大学 教 三年 熊谷幸雄）

次第に心が開けていった

合宿の第一日目、第二日目あたりは、班別討論でも自分の考え方に固執してしまつていて、中々心を開いて友達と語ることが出来なかつた。けれども三日目、四日目になると、友達との語らいの中で心のふれあいを感じ、すっかりした気持ちになつた。

各先生方の御講義は自分に身近かなものとして聞いたが、今後は合宿で得た感動を持続させつつ読書したり、マルクス主義を考えてみたい。（同志社大学 商 三年 中村 誠）

人と語りあうのはむずかしい

四泊五日の合宿が短かつたようでもあるし、遠い昔のようにも感じられる。班長という大役を初めてやってみて、今更ながら他人に語りかけるむずかしさを感じた。合宿を終えた時はいつでも日頃の生活を反省させられるのであるが、本当に自分の生活を反省しながら生き生きとした生命を保つのは、実に困難だと感じた。自分の身のまわりの問題を、ひとつひとつ解決してゆくことが僕にとっては先決問題であると思ひました。

最後の夜に皆が各人の思ひを、ある人は激しく、ある人は自分の言葉を確かめつつ静かに語ってくれた時は最も嬉しかつた。（皇学館大学 文 三年 山脇敏夫）

天皇の御心にはじめてふれた

日本の古い歴史に對して愛着が湧いて来た。国民文化研究会の先輩方から、明治天皇や今上天皇が国民のためにいかに御心を尽くされたかをうかがつて感心した。しかし天皇をお慕いする程までには、正直いつてまだなれない気持ちがある。

（千葉大学 医 一年 出口不二夫）

うるおいのある心を持ちたい

先輩のすすめでこの合宿に参加した。まだ漠然としたものではあるが何かがつかめた気がする。もっと自分の生活をひきしめなければならぬ、まず自分自身を充実してゆかなければと考える。果たして自分の心にどれだけうるおいがあったのだろうか。ほとんどなかったような気さえする。合宿に來て和歌を学び、慰霊祭に参加して日本人の心をはっきりと実感した。やることは数多いがうるおいのある心を持って、やれることから一つずつやろうと決心した。

(長崎大学 薬 一年 西村敬一)

「学問・人生・祖国」を真剣に考えたい

まず自己の思いおよび他人の思いを、大切にしたい。相手の語る言葉の根底にある、心の動きを大切にしなければ真の会話はあり得ないと感じた。

次に国家や民族が自分と直接に結びついていることを実感することは、とりもなおさずこの日本が、どのような精神のもとに成り立って来たかを知ることであり、これを知らずしてはこれからの日本を築いてゆくことは不可能であると感じた。私はこの合宿で多くのことを学んだが以上二つのことを

真剣に考えられる心を鍛えてゆきたい。

(鹿児島大学 法文 三年 戸沢正志)

初心を忘れまい

私は常日頃学園の現状について深い憂いを持っており、様々な問題意識を携えて合宿にのぞきました。けれども昨年の合宿での感激を今年も得ることが出来たかとなると、自責の念にとらわれます。さまざまな悩みを、真剣に語り合う班員の方々を見るにつけても、何度も初心にかえろうと思いましたが。真剣に物事に取組む姿勢を持続することの大切さをあらためて思い知らされました。

(中央大学 法 四年 野口明宏)

第二十班—男子学生—

古典と和歌の素晴らしさに感動

この合宿に参加して古典がいかにすばらしいものか、和歌がいかにすばらしいものかを知ることが出来た喜びは、本当に言葉では言い表わせない。なにもものにもかえがたい日本人の心を得たのではないかと思う。ふりかえってみればこの三年間、種々の社会問題や学生問題に対して、自分がどの方向

に行くべきかを考え続けて、心の安まる時がなかったような気がした。阿蘇合宿に初めて参加して学問に対する基本的な態度を教えられたが、今合宿では真剣にそれを考え続けていたのだからかと疑わざるを得ない思いを抱いた。一、二年の頃は自分の活動をすぐ国のためという言葉で表わしていたが、今は何だか簡単に言えない気がする。社会に出ても自分のまわりの人に対して、この人生の基本的な態度は忘れまいと思う。残り少ない大学生活において大学内でも地道に本當の学問をしてゆこうと思う。

(岡山大学 法文 四年 斉藤利明)

本心を理解してもらえなかった

初参加の私にとって今合宿の印象は、自分の生き方に対して自信が出来たという満足感と、反面内心に燃える情熱が、国民文化研究会の方々に理解していただけなかった失望の念とを感じていることである。情熱を持って日本人として活動しようとしている自分の気持を、誤解と非難といった形で受けとられたのは残念である。同じ意志を持っていても反対意見もありうるのに、意見が反対だからといって、分かっている、誤っているときめつけるのであるなら困る。

私は人一倍日本を愛しているということを再確認した。安易に同調せずに立派な日本人になろうと思う。

(東京工業大学 化 四年 木暮英雄)
心の通いあいを実感

地元鹿児島で開催され、私にとっては学生生活最後の今合宿は良き思い出になることでしょう。私達の班は四年生だけであり、進むべき道はそれぞれに異っていたが、何か心の通い合う語らいができたと思います。初めは自我を強く押し出して親しい話し合いができなかったが、一日、二日と過ぎるに連れて親しみ深くなり、今となっては別れ難い思いが強くなります。

(鹿児島経済大学 経 四年 三園敏則)

スケジュールにゆとりを

質問の時間が少なく、自分はどうか考えたらいいかという暇もない程詰まったスケジュールであった。もっとスケジュールにゆとりがほしかった。

(中央大学 経 四年 三輪隆彦)

世代の異なる人達の考えにふれた

合宿教室の諸講義は、私の考えや信じている事と異なる部分も多かったが、世代の異なる人達の考え方が少し理解出来

たように大いに参考になった。私は、日本人の心の中に潜んでいるにもかかわらず、現在忘れ去られようとしている日本の文化、伝統を正しく理解しうる心をよびますことには、賛成である。ただその場合、時代錯誤的な要素や非合理性があつてはならないと思う。(明星大学 理 四年 北浜弘幸)

理論と実践とは別のものではない

我々が日頃学園生活でしばしば討論して来た「理論が先か、実践が先か」ということが、いかに無意味なことであるかを知った。理論と実践を区別すること自体が間違っているであり、まして両方を対立していると考えるに至っては、物事を真剣に考えていないのを自ら暴露している。このことが今合宿の小柳先生の御講義を聞いてはつきりと理解できた。「これは正しいと思う。ではそこに心を定めよ」との小柳先生の言葉には理論とか実践とかいう言葉はない。しかしこの言葉の中に理論があり実践がある。

「疑ふ勿れの義、功利者流の知る所にあらず」実に心あらわれる言葉であった。(長崎大学 教 四年 椛島有三)

祖国日本を語り合えた喜び

父の勧めでこの合宿に参加しました。非常に嬉しく思った

ことは、これだけ多くの学生と祖国日本について一緒に討論しあえたことであり、また日本に対する先生や友達の切々とした思いを、自分の心に直接感じたことです。この感激を大切にして自分を鍛えて立派な社会人として一生を送って行きたい。(福岡大学 薬 四年 上原平太郎)

からだの中を貫いた感激

からだの中を強烈に貫くものが感じられる。真実なるものを、思いをこめて訴えられる先生方の御言葉は実にはすがすがしく、心がひろびろと自由になってゆく思いがする。我々は師を求めているし、日本の国の生命の中心なるものを知りたい。今まではほとんどなかった師や友達との語らいの場を得ることが出来たことにより、これからは受身ではなく、このような機会を自ら持つよう努力したい。(関西大学 法 四年 浜野 茂)

第二十一班—男子学生—

澄んだ心で人生を送りたい

講師の先生方の御講義や実社会に出ておられる国民文化研究会の方々の真摯な学問態度・人生態度に心を打たれまし

た。今後ますますこの思いを大切にして澄んだ心で人生を送って行きたい。

合宿では班長をさせていただいたが、自分の心の姿勢がそのまま班員の行動や態度に現われ、いかに自分自身の心の姿勢が大切であるかを知った。またこの合宿教室が如何に多くの人達の心づかいによって成り立っているかを改めて痛感した。

(関西大学 法 四年 柴田義治)

忘れ難い思い出

二日目まで何か奥歯にものがはさまったような講義に感じられた。素晴らしい話をされるのであるが、現代青年はどうすべきだと、なぜ断言されないのか、何かいらだたしい感じがした。

三日、四日と日を追うにしたがい、先生方の口から強い言葉が出て来て、何をなすべきかが明らかにされてきたような気がする。ただ自分は大学生とはいふものの、まだ物事を正當に評価する能力を十分に備えているとは思えないし、考えた後で活動するなどということは、青年にあるまじき態度だと思った。何はともあれ素晴らしい話や、班での良き友人達は、霧島の緑の山々とともに、一生忘れ得ない思い出となることだろう。

(明治大学 経 四年 山口邦明)

学問に対する姿勢をつかんだ

物の見方や考え方ということは、素地になっているものを如何なる形で、心に感じていくか、ということに外ならない。

私達が住んでいるこの大地、日本には太く、広やかな、変わることはない。「何か」が脈うっているのだ。この「何か」が素地だと思ふのだが、この「何か」を見ようとしなかったり、感じられないということ、物を見たり、考えたりすることが出来ないことになるのではなからうか。自分が生きていくことは、日本の歴史と無関係ではないことを実感することにより、民族の魂をよびおこすことが出来るのだ、と各講師の御講義や班別討論を通じて感じました。学問に対する姿勢を大きな感激のうちにつかんだことが、この合宿のすべてであったように思います。(東京理科大学 理 四年 川上信一郎)

生きていた「生」と「言葉」

合宿を通じて人の真情が感じられた。真剣に生きぬいている人達の心にふれて、今まで自分自身を如何に粗末に扱っていたかを痛切に感じた。今まで自分に甘えていたのだ。一つの行為が生きていなかった。言葉を単なる記号としか考えていなかった。

私は和歌を通して、「人の心」と「言葉」の意味ががすかにわかったように思う。生を大切に扱いながら生きた人の心が感じられた。いたわりともいえる心が実にしみじみと感じられた。私はこれから自分を大切に、生きた言葉をはき、他人と真のつきあいをしたいと思う。「人間として本物になろうとする心を持って」との小田村先生の言葉を銘記して、いたらない自分を少しでもよくしたいと思う。

(中央大学 法 四年 石井茂雄)

真剣さに打たれた

友達の一言を機縁として合宿に参加したが、まだはつきりした確信や信念を持っているわけではない。ただこの合宿教室が真面目で真剣であることに心を打たれました。

(熊本大学 教 四年 奥村龍明)

内心よりにじみ出た感激

昨年の初参加で得た大きな感激が、本物であったのかどうかを確かめるために今年も参加しました。感激は本物でした。内心よりにじみ出た本当の喜びでした。今後この感激を大切に「学問・人生・祖国」という課題に正面から取りくんで努力し、向上したいと思います。

勉強不足であった

(福岡大学 工 四年 川浪登美夫)

勉強不足であったことに恥じらいを感じております。政治的活動に入るには少々早すぎると考えますし、今後各方面の勉強をして、活動ができる様に努力したい。

(東京工業大学 理工 四年 早川徹男)

体験に裏づけられた言葉に感動

今度の合宿で最も印象に残ったのは、高谷覚蔵先生が御講義で、貴重な体験に基き、将来の日本を絶対に共産化させたくない、という強い願望を述べられたことでした。私達はやもすると、共産主義者の説く共産社会というユートピアが、実現可能であるかのような錯覚に陥りがちですが、高谷先生のお話によって実証的にも、理論的にも、実現不可能であることを確信するに到りました。そして日本を共産革命から守るということが、私共青年に課せられた非常に重大な使命であると感じました。学園正常化の問題をはじめとして、多くの問題が、私のまわりに山積していますが、決意をあらたにしてこれらの問題に取り組みたい。

(早稲田大学 商 四年 阿部孝郎)

胸内をつきあげる思い

諸講師のご講義に一貫して流れていた「日本人としての自覚」が、脈々として私の胸内に波打ってくるのを感じる。戦後私達が失っていた、いや失わされていた日本人としての誇りを、今こそ堂々と語ることのできる喜びで一杯である。そして、日本の良き伝統の継承者になり、またそれを次の世代に伝えてゆこうという決意が湧き起ってきた。教職についている喜びと責任を、今ひしひしと感じている。

(熊本市立花陵中学校 渡辺清隆)

松下村塾の精神にふれた

いま切実に感じるのは、この合宿を吉田松陰先生の松下村塾たらしめたいということである。松下村塾の規模はこの合宿の二班程度のものであるが、そこで学んだ者の力が明治維新の原動力になった。この合宿は決して小数であるとはいえない。もし各自が自覚して事に当れば何事もできぬ筈がない。自分こそ現在の乱れた日本を救うために生れてきたのだと自覚して、進んでいくように心がけたい。

(福岡県立八幡西高校 村田英雄)

日本民族の真の姿に接したい

日本の将来を憂える人々の真剣なまなざしに心をうたれた。七十年の安保改定を前にして、日本は政治的にも思想的にも混乱の一途にある。それを正す心には、なによりもまず日本の姿を歴史的民族的伝統の中に求め、今後の日本を切り開いてゆかなければならない。表面的、形式的な学問ではなく、その裏にある精神を掘り下げ、ときほぐし自分のものにしてゆきたい。そのためにも天皇の御歌を中心に、幕末の志士の和歌や遺稿等にふれ、日本民族の真の姿に接するよう努力したい。

(熊本市立慶徳小学校 柴垣章一)

古典にふれた喜び

この合宿で「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」「講孟余話」、和歌を学ぶことができたことは、今まで古典に接する機会のなかった私にとって大きな収穫でした。これからは、「心を定める」という先生の一言を胸に秘め、合宿で得たことをよくかみしめて、教育の仕事に前進してゆきたいと思えます。

(熊本市立江南中学校 上土井善巳)

有意義だった

物質文化の進歩とはうらはらに精神文化が混乱している時代に、祖国日本のあるべき姿を究明しようとするこの合宿に参加して、有意義であった。同胞と真摯な態度で生活したこの合宿を通じて、真剣に日本のあるべき姿を追究しなければならぬと思った。

(熊本県高森町立野尻中学校 岩下信敦)

日本人の心情がわかった

学ぶ喜びで時間のたつのも判らない程であった。今までは不明確であった、祖国についての考え方も明確になり、また日本人が持っている伝統的な心情についても、その良さがわかった。今後は和歌の創作や古典にふれることなどにより、この心情を深めなければならないと思った。人生に対する基本的な態度が方向づけられたように思う。

(熊本市立江南中学校 竹下博美)

天皇に対する偏見が正された

戦中から戦後のマルクシズム的思想に基づく教育を受けてきた結果、今までは伝統ある日本文化に対する取り組み方が不十分であったことを痛感する。天皇に対する考え方にも偏見があったことを反省している。

諸講師の御講義を聞いて、本物の人間になろうと努力することが、正しい人生であることを確信した。

(八代市立第三中学校 松田吉徳)

教師としての指針を与えられた

合宿は初参加だが、一つの課題をもって参加した。今まで、教師として生徒をどのように導いてゆけば良いのか、ということまで苦しんでいたが、その指針を与えられたような気がする。また慰霊祭に参加して、祖先との一体感を深く味わうことができたことは、すばらしい感激であった。

(鹿児島高校 岩下方成)

第二十三班―教員―

真の教育者の姿を見た

第五日目の夜の集いの時に、鹿児島大学の川井先生が、学生とともに校歌を歌われるのを見て、胸のあつくなるのを覚

え、真の教育者の姿を見た感じがした。この姿に接して初めて、第一日目に先生がいわれた「発憤」という言葉が、心にひびいてきた。今までたえず口にした教育の正常化、教師としての使命感ということは、まず自分自身が「日本人としての心」をもつことであると感じた。

(熊本県山鹿市立山鹿中学校 早田治雄)

天皇を遠避けていては日本は判らない

日本人でありながら、日本の歴史の中に展開してきた美しい伝統を忘れ、天皇を中心とする国体について考察する機会もなかったことを、大変恥じる気持である。この合宿を通じて、天皇を遠避けては日本を知ることができないことがはっきり判った。天皇を中心として、日本の文化は連綿として続いてきたのであり、そこには世界に誇示できる文化があるのだと思う。今後この日本の文化を護持することが、我々に課せられた責務だと思った。

(熊本県波野村立小池野小学校 田中益雄)

日本の伝統を子孫に伝えたい

我々は、日本人としての誇りを持ち、祖先が何千年にもわ

たって、営々として培ってきえてくれた伝統を、大切に受け継ぎ、更にそれを深く研究し、発展させて子孫に伝えて、ゆくことが使命だと思う。我々が真に目覚めたならば、マルキシズムがこれ以上侵透することもなからうし、日本人同士が血を流し合うこともないということを、この合宿を通じて学んだ。

(熊本県阿蘇町立役大原小学校 松永昭典)

力のかぎり実行したい

この合宿に臨むに当って、先輩から「研究会でたくさん知識を学んでくる必要はないから、合宿の精神を肌で感じとっていただきたい」という御助言がありました。この合宿にきて祖国の文化を大切にしなければならぬということ、がわかり、日本人としての本當の生き方をはっきりととらえることができました。そして、ただ知的満足に終わるだけではなく、自分の力を出し切って、「千万人といえどもわれ行かん」の気概をもって実践しなければならぬことを肌で感じ取りました。川井先生の「発憤せよ、勉強せよ、行動せよ」のお言葉、そして小柳先生の「正しいことはやらなければ仕様がなない。小乗の凝滞に陥ってはいけない」というお言葉を、肝に銘じて生きたい。

(熊本県人吉市立人吉西中学校 氏川昭二)

人の心を真に理解する努力を惜しまない

諸先生の講義や班別討論を通じて、本当の日本人とはどのようなものかを学び、今後どのように生活したら良いかということが判った。すなわち、日本の伝統、心情は外国にない特有のものであり、そしてそれらを我々の生活の中に生かしていかなければならないと思った。そのためには、人間としての真の道を学び、他人と接する場合はその人の心を真に理解する努力を惜しまないことであると考える。

学校で教育するとき、自分の真心が生徒に通じるように、日常の教育の実践を真剣に考えてゆきたい。

(熊本市立竜南中学校 岩本 巖)

祖先の御魂を憶念することを学んだ

日本民族の精神は、戦後二十年とか、明治百年とかいうふうに断絶しているのではなく、遠い神代の昔から、逞しく受け継がれて現代にいたっていて、その特質を護り続けてきたものは、祖先の御魂を祭るといふ民族の心であると思った。この精神は諸講義の中に溢れていて、私は日本人としての心情を深く汲み取ることができた。

(熊本市立池田小学校 宮田正直)

日本の伝統を守りたい

今日の日本は思想的にも、精神的にも混迷の状態にあると痛感させられました。それにもかかわらず、多くの人々が、日本の運命について無関心な日々を送っていることを思うと、淋しい気がします。今後は、日常生活の中に豊かな情意を通わせて、日本の良い伝統を守るように努めたい。

(熊本県立松橋中学校 松村静五)

第二十四班—教員—

祖先にじかに会える思いだった

この合宿で、実に立派な講師の方々にお会いできたことを非常にうれしく思う。今後の生活の中でも、師と会う喜びを求め続けて行きたい。また、慰霊祭を通じて、すでに亡くなられた諸先輩や祖先の御霊に、じかにお会いすることができた気がする。

私も教師だから、生徒達にもこの国のすばらしい姿を伝えてゆきたいと思っている。そのことが、子供達に正しい学問を、あるいは正しい人生を、知らせることの基礎になると信

じています。

(熊本市立竜南中学校 松浦良雄)

亡くなった戦友が偲ばれた

日教組の闘争により生じた教育の混乱を、正常にもどすことが我々の願望である。教育の正常化も、現在の混乱した祖国を救う道も、一人一人がただちに立ち上がることでであると私は信じている。世を憂うる学生、社会人がこうして一堂に集って真剣に学習している姿をみて、本当に美しいと思っ

た。
また私は慰霊祭が終わった時、二十年前、生死を共にして、はかなく散った戦友の面影が偲ばれて思わず目がしらがうるんできた。私は「日本人である」という意識を、この合宿で再び強く呼びもどされたことに、深く感謝を捧げるとともに、今後この気持を大切にして活動してゆきたい。

(熊本県嘉島東部小学校 山本忠義)

教育の精神を感得できた

教育の根本になければならないものが判らないまま、自信のない教育が続けてきた。そして自分自身をむち打ち続けてきたが、ただ単に技術とか方法とかにすぎなかったのだと気付いた。

日本人の一員として、日本民族の伝統を見失っていたのではないかと強く反省する。私はこの合宿でこれらのことから学ぶことができ、本当にうれしい。とくに教育の根本は何かということが感得できたことを何よりもうれしく思う。

(八代市立八代小学校 加世田和馬)

若者の姿に力強さを感じた

現在の日本は、本来の民族の精神が見失なわれ、ともすれば諸外国の侵略を許す可能性さえも見受けられます。このような事態に対して、我々日本人はいかに対処していくか、ということが大変重要なこととなって参ります。

この合宿において、次代を背負う若者達が熱心に学ぶ姿を見て、実に心強い感じがいたしました。

(山口県私立桜ヶ丘高校 宇賀幹郎)

使命感を確立したい

今まで浅い体験と狭い視野の中でしか教育をして来なかったことに断腸の思いがします。この合宿を機縁に教育者としての使命感を確立して、真の教育に精進して行きたいと思えます。

(熊本県五木村立三浦小学校 荒川愛二)

天皇についての再認識が必要だ

日本をとりまく世界情勢はただならぬ危機に満ちている。その中であって、日本の国土、民族を護り通すためには、国民の意識の統一と、天皇についてあらためて考えなおす必要があると感じた。我々一人一人の使命感は、国土愛、民族愛がなくなると感じられるのだ。合宿で学んだものを、一人一人が星のごとくに散らばっていても、実行に移すべき時が眼前に迫っている。

(熊本市立託麻原小学校 吉川 太)

日本の生命を学びたい

日本民族の魂を真に受け継ぐためには、先ず自分から悩み、求め、そして行動しなければならぬ。いたずらに言葉のみに終始しがちであった今迄の自分を恥ずかしく思った。熱気あふれるご講義をお聞きし、また悩み苦しみながらも、ひたすらに道を求めようとする同輩のまなざしに接して、自分も学ばなければならぬという思いにかられた。次代の日本を背負う子供を教育する者として、真の日本の生命を共に学び得る教師でありたい。

(熊本市立春竹小学校 小崎圭洋)

教育の根底に日本の心

先ず、自分が狭い視野でしか物事を見ることができず、単に知識を教えるだけの教育しかしていなかったということに痛感しました。私たち教師は、教育の根底となる日本文化を理解し、真の日本人であるという観点から使命感を確立して教育をしなければならぬ。と同時に、人間は常に学問を怠ってはならないということをつくづく感じました。

(熊本県阿蘇町立阿蘇中学校 渡辺憲昭)

第二十五班—教員—

国武先生に心うたれた

若い講師、国武忠彦先生の学問に対する情熱、謙虚さに、まず心をうたれました。歴史の先生があれだけ広く文学にまで目を通し、良く理解し、古人の心を正確にとらえようと努力されているのです。私は学校で、人物を中心として歴史を教えることにしていますが、一体自分はどれほど古人の心を体得しているのかを思うと、はなはだ恥ずかしくなります。先生の御講義を聞いて、今後の研究の進め方に大きな示唆を得ることができました。(熊本市立城東小学校 貴島武之)

日本人であることを自覚した

この合宿において、私は「日本人である」ことをはつきり自覚でき、大きな喜びを感じています。日本の現状は日本のなものに対し正当な評価をしておらず、その良さは顧みられなくなっているように思われます。このことに不安を抱きながらも、自分の信念のなさから見過してきました。これからは日本の良さを取り入れることを自信をもってやっていきたいと思えます。

(熊本市九州女学院高校 田端 稔)

日本に生まれたのが幸せだ

この合宿で、世界に誇れる文化、伝統とそれをささえる日本の情緒をもつ国に生れたことが幸せであり、この伝統と情緒に立って祖国の発展を図らなければならない。そのためには正しい国民同胞感を把握することが大切である。このためにも、古典に接することがいかに大切であるか、ということが判りました。

(八代市立八千把小学校 徳永 通)

明治憲法を再検討したい

この合宿に参加して、もっともっと勉強しなければならぬと思います。私は社会科を担当していますが、大きな間違い、極端に言うところ「うそ」を教えていたということに気がきました。たとえば明治憲法と日本国憲法の教育において、日本国憲法がより民主的で、世界においても立派な憲法だと教えていました。しかし、諸講師のお話を拝聴し、大きな誤りをしていったことに気付き、更に研究に励もうと思えます。

(熊本市立京陵中学校 成松 彬)

堂々と帰れる

すばらしい合宿だった。胸をはって堂々と帰れる。そして、何かほのぼのとした感動を覚える。今までは「小乗の凝滞」に陥っていたことを恥かしく思う。しかし今は、教育者としての使命感の確立に自信を持ってすすめるような気持ちで一杯だ。全学連等の一連の動きもみな教育者の責任であるとき、今からどう子供たちに教えてゆかねばならぬのかとつくづく考える。明治維新や神話等の中に、日本人の総明さを発見し、日本人であることの感動にひたれる人間の育成に努めてゆきたい。(熊本県人吉市立人吉東小学校 早川 亘)

心のやすらぎを覚えた

心の安らぎと感動を覚えました。特に熱意と気迫にみちた講義により、多くの先生方にめぐりあうことができたよるこびで一杯である。今後は教育者として、この合宿で得た豊かな喜びをもとに、日本人の魂にふれた教育の実践に努力したいと思う。

(熊本市立東野中学校 出田 正)

日本はすばらしい

この合宿で「日本を知る」ということが、非常にすばらしいことと知り、日本人として、また教育者として祖先から受け継がれた尊いものを見究めなければならないと思えました。

(熊本市立藤園中学校 吉川 博)

国を憂える熱情にうたれた

なによりも先ず、諸講師の国を憂える熱意、情熱のあふれる講義に心打たれました。また班別討論で、問題点を掘り下げて検討することにより、講義で判らなかつた点をより深く

理解することができました。小柳先生は、ご講義で「合宿は心の定め方の勉強である」と言われた。教育者となるための心の定め方とは何であるかを常に肝に銘じ、この合宿で体得したものが血となり、肉となって教え子達に滲透するよう努力して行きたい。

(熊本県小国町立小国中学校 佐藤 直)

第二十六班 | 教員 |

留魂と慰霊の心

二回目の合宿ですが、私は留魂と慰霊とによって營々として築き上げられた「日本人の情緒のよさ」を、更に深く体得し、同時に私もその日本人のひとりであることに、喜びと強い誇りを感じました。目下、正しい国語や歴史の流れを断絶しようとしている人々が多々あることを悲しく思う。この人々たちも、私と同じ日本人に他ならないのだ。その人たちの姿勢を正し、真心をもったつき合いをすることこそ、真の教育の正常化だと強く思います。

(熊本県人吉市立人吉東小学校 西山喜雄)

聖徳太子に学びたい

諸先生方の御講義はテーマこそ違いますが、日本人としての進むべき道を求めることでは一貫しており、きびしい中にも温い御指導には、迫力がみなぎり、じりっじりっと引き付けられました。先生方の御精神がどこより生まれたのが、聖徳太子の御本にふれた時に、少し判ったような気がする。その気持をもちつづけるためにも、今後聖徳太子を学んでゆきたい。

(熊本市立三和中学校 中川信泰)

日本古来の心を受け継ごう

この合宿に参加して、今まで関心のなかった思想とか文化についての認識を深めることができ、うれしく思う。現在の日本は、思想や文化の面で混乱しているが、日本古来の美しい心を温存し、発展させることが、最も大切なことであると思う。

(熊本県立宇土高校 緒方定見)

革命を起こしてはならない

高谷先生の「日本は共産化するか」の御講義を聞き、実際に身をもって体験された共産政権下における権力闘争の悲惨

さが判り、我が国では決して革命を起こしてはならないと決意した。竹山先生のお話を聞き、あらためて日本の文化、芸術に対する理解が深まった。我々は日本人の心を知らなければならぬと痛感した。(熊本市立江南中学校 園村 健)

学問の姿勢を示唆された

この合宿に参加して得た最大の収穫は、学問に対する姿勢についての示唆を与えてもらったことです。小田村先生は「本物になるための努力」と表現されましたが、本当に悔いのない生き方を追究しなければならぬと思いました。

(熊本市立春日小学校 森脇孝男)

鉄槌をあげせられた思い

泰平ムードの中で、思想的に混乱した現代において、真剣に祖国日本を憂える若者が集まって、共に語り合う姿を見て、力強く思った。とかく概念的に物事をとらえがちな自分にとって、やむにやまれぬ心情に基づく深い御講義を聞いて、自分の不勉強に鉄槌をあげせられたような感じがした。

(熊本県蘇陽町立馬見原小学校 田中行雄)

歴史を通して日本を見直す

先生方が話された、共産主義の問題や明治憲法、昭和憲法の問題については、まだ良く理解できないが、日本の歴史をとうして祖国を知ることがいかに大切であるかは十分に理解できた。愛国心は人に負けないつもりではいたが、いかに無責任な愛国心であったかを思い知らされた。この合宿を契機として今後努力する覚悟である。

(鹿児島県教育委員会 伊地知正明)

先生方の熱情に感激した

先ず、諸講師の熱情に感激しました。中には六十余歳といわれるような先生方が、なんと新鮮な生き生きとした情熱を示されたことか。学問に対する真摯な御態度に敬服いたしました。

私も現場指導において、良いものを良い、正しいものを正しいと教えることの出来る、教師としての信念をたかめ、勇気をもって教育の正常化にあたりたいと思います。そのためには、お教え戴いた歴史のよって来る背景や、日本人としての自覚の追究に努力していきたいと思えます。

(熊本県山鹿市立大道中学校 池上和男)

第二十七班―教員―

この感激を全学生に伝えたい

合宿に参加して得られた血の湧き躍るこの感激を、私の勤務する明星大学の学生達に伝えるため、機をみて合宿の報告会を開く決心をしました。

そして、祖先より受け継がれた日本の伝統を理解するためできるかぎり古典を読み、和歌を創作したいと思えます。

(明星大学助手 塩崎恵一)

教育を考え直したい

この合宿教室に初めて参加して、一番感銘を受けたことは、講師の先生方、国文研の先生方の人柄と、教育をなされるお姿です。国を憂えて若い後輩に少しでもわかってもらおうと導かれるその熱情は、話される一語一句に血となり力となつて、私の胸に伝わってきました。休み時間にもわれわれと共に語り合われようとして、自分から私達の部屋を訪ねられるお姿に頭の下がる思いがしました。

私も教師の一人として、この合宿で諸先生方が体で示された、教えることのほんとうの姿、真の教育の姿というものを

を、もう一度、考え直したいと思えます。

(熊本県人吉市立第一中学校 源島駒男)

教師の重責を痛感した

教師である私は、御講義の中で「現在そして将来の祖国を思うと日本の教育を憂えざるを得ない」というお言葉を聞いて、強く心をうたれるものを感じ、私が果たさなければならぬ重責を痛感した。

また、吉田松陰先生が命がけて国を思い、遂には従容と死につかれたことに心をうたれた。次の時代の日本を背負って立つ子供達に真の教育をしたいと念じている。

(熊本県八代市立第二中学校 西村忠昭)

同信生活に感動した

参加してよかった。とにかくあつというまに五日間が過ぎ去ってしまった。でも四泊五日を共にした同室の人々の暖い人柄で安心して生活できたし、指導される方々が、食事も講義の時も、学生とまったく一様に行動された、同信生活における謙虚さに、感動しました。

生活体験をふまえ、きびしく築きあげられた思想を伝えずにはおれないという、熱誠あふれた講師の方々の盤石の言動

に教えられ、触発されて考え方の基礎が固められた。また若い後輩を愛情深く育てあげようとされている国民文化研究会の方々のお姿の中に、教職にある者として、若い人々への接し方を学んだ。今後更に言葉を修練し、心を磨き、日本人のすばらしさを把握してゆきたい。

(熊本県人吉市立第一中学校教諭 松田俊彦)

祖先の心にふれることができた

和歌や古典に関する御講話を通じて、祖先の心に触れることができました。物を観る目、物を観る心が生まれてきたような感じでした。古人の心をこんなに気持よく、自然に受け入れることができたのは不思議なほどです。これからは和歌や古典を積極的に読み直したいと思えます。

(熊本市立西原小学校 松尾和利)

日本人の誇りを持てる生徒を育てたい

諸講義で一貫して、正しい学問の方向や、憂うべき国の姿を説かれる諸先生の情熱に、強く心をうたれました。私はこの合宿で学びえた数々のことを教育の場に生かし、単なる幸福追求のみを教えるのではなく、日本の美しい伝統を生かし、日本人としての誇りと自覚を持って、強く生きる生徒を

育てたいと思っています。

(熊本市立花陵中学校 坂崎健二郎)

子供達に日本のすばらしさを知らせたい

先生方の熱情を傾けられての御講義すべてが心にせまってくる、そのみ教えの中にうかがわれる先生方の篤く、しかも温い御人格に心から引かれ、私は生きる勇気を与えていただいた。

この合宿での成果をもとに、日本人としての誇りと自覚を持って、子供達に日本の国がどんなにすばらしく、広遠なものかを知らせ、自信と誇りをもって国を心から愛し、奉仕し、貢献するような愛国心を育成していきたい。

(熊本市立藤園中学校 古場昭輝)

第二十八班―教員―

日頃のもの足りなさが解消した

日頃教壇では情熱を燃やしているが、子供たちが帰った後では、ふと何かもの足りなさを感じていた日々が多かった。

その原因が何であったかを合宿に参加してつかむことができ、それが日本人のみが持っている心を大切にす

る心情だと思ふ。このことを体得できたことが何よりも嬉しい。

(熊本県小国町立北里小学校 市原輝夫)

国歌「君が代」を教科書で教えたい

私は音楽の教師ですが、日頃、大変残念に思うことがあります。それは、国歌「君が代」が、教科書の一番最後のページに国歌としてではなく、日本古歌として示されているということです。我が国の崇高な美しさをもつ「君が代」が、教科書の第一ページをかざっていないとは何という悲しみだらうかと思っているわけです。しかし、私は、国歌としての「君が代」を指導したい。この合宿で更に深くこのことを痛感いたしました。

(熊本市立託麻原小学校 北原孝)

人間としての姿勢の確立を

教育で大切なことは、「共に学び、共に語ろう。学問と人生と祖国を」ということにつぎると思えます。教育指導の方法、技術の研究はもとより大切ですが、それらを支える人間の基本的態度が間違っていれば、空虚なものになってしまうと思えます。学問の基礎となるべき、人間の姿勢の確立こそ重要な事であると痛感しました。その意味で、多くの友と国

家の運命を語ることができた事は、これまでにない尊い体験でした。

(熊本市立高平台小学校 内田末春)

学問と実践が分離してはならない

この合宿で国民文化研究会の先生方が同志同行の道を、身をもって実行して居られる姿をみて心うたれました。ある時は師となり、また弟子となつて自分を謙虚にしておられる心は、大いに学ばなければならぬと思ひました。また幾多の問題の山積している現代において、学問と実践が分離することは許されない。学園内のことはもちろんですが、特に目教組問題には、私達教師の一人一人が真剣にとり組んで行かなければならないと思ひます。

(熊本県砥用町立砥用東中学校 北島道治)

日本文化の真髄

この合宿で、体験からにじみでた胸をうつような講義、広い考え方から現時点を分析され、将来の構想におよばれた講義をお聞きして、日本文化の独自性、和歌のもつ意味、古典の世界が判り、感動をおぼえました。また、班別討論などでの、班員同志の心の交流も、今後の生活に大いにプラスすると思ひます。

(熊本県一の宮町立古城小学校 家入輝男)

気持が変つた

今までは、平和で太平の世がつづいているなあと思ひながら、慢然と生活し、日本が思想的危機に立っていることを感じ得なかつたし、また、現象面だけを見て物事を判断していた。また、天皇はどうでも良いと錯覚し、日本人はだめだと思つていた。この合宿を機会に、日本の良さを求め、日本人としてまた教育者としての道を進んでゆきたい。

(熊本県玉名市立八嘉小学校 上原浩史)

第二十九班―社会人―

日本の伝統の素晴しさ

合宿に参加し生れ変つた気持です。今までの人生がなんと心貧しかつたかと悔まれてなりません。小田村先生の「本物の人生を送ろうではないか」という言葉に感動を覚えられました。日本人は、日本の伝統の中で素晴らしい感覚を受けついでいると信じます。私はこの素晴らしい国に生まれた者としてもっともつと日本を知り、その中から得たものを大切に守り育てたいと思ひます。

(新日本勸業塾 下田時生)

生命の息吹きを感じた

(鹿兒島興業信用金庫 野村隆一)

祖国日本の国民感情が、そして熱い祖先達の心が蘇り、私の心中に脈々と波打つのを覚えました。歴史を通じての生命の息吹きを感じることができ、素直な雄々しさを感じています。

「他と共なる人生」、「過去と未来につながる生命」を中心とした、人生、学問に対する基本的態度および価値判断の基準を教えていただき、今後は、我々一人一人が、課せられた課題に具体的に行動していかねばならないと思います。

(高千穂相互銀行 松田夏哉)

日本の発展に寄与したい

祖国を愛することのできる、豊かな、広い心が芽生えて来たような気がします。今後は、この気持を基礎にして、日本の前進、発展に寄与し、革命を受け入れることのない社会を築きたいと思います。今まで共産主義に対しては間違っていると感じていましたが、高谷先生の体験を通じての御話を聞き、具体的にわかってきたような気がします。

これからも和歌を作る気持で人に接し、社内においても人間関係をよくしてゆこうと思います。

厳しい生活態度が必要

初参加のためか、最初はとまどいを感じましたが、日が経つにつれ合宿の良さが判かり、自分の学問の浅さを痛感しました。日常生活を反省し、きびしい態度でのぞまなければならぬと思っております。今後は、一人でも多くの社会人に良心をよみがえらせるような発憤、努力を続けて、住みよい祖国を作り上げたいと思います。

(高千穂相互銀行 井上三喜男)

貴重な体験をした

川井先生の「発憤」を促す講義に始まり、夜久先生の天皇の御歌についての講義で終ったこの合宿で、日本民族の雄大な心、相互信頼の心を知ることができ、私達の今後の進むべき道がわかったように思います。また合宿で知りあった友との心と心とのふれあいも、めったに味わうことのできない貴重な体験でした。

(長崎放送 丸林富久)

まず実践することだ

国を思い、人を思うという真心が今迄の自分になかったことを反省します。規律正しい合宿生活は、苦しい感じもしましたが、まず行うことだという気持になって来ました。今後は、真の勉強に取り組み、力強い人生をおくりたいと思いません。

(下関林兼造船船 田中正俊)

正しいと思ったことは勇気を出して行いたい

今まで正しいと思っても、いろいろな雑念や利害打算が、頭をもたげて実行できないことがありました。この合宿で「発憤せよ」「疑う勿れ」等の強い御言葉を聞きました。正しい道と思ったら、まず勇気を出して行動することだと思えます。今後の生活に合宿で学んだこの貴重な体験を生かしてゆきたい。

(日商榷 折本 求)

勉強不足を痛感した

今迄、政治問題に余り関心を持っていませんでしたが、高谷先生の「日本は共産化するか」の力強い御講義に感銘を受け、自分の勉強不足を痛感しました。これからの生活に、こ

の合宿で得た感激を生かしたいと思えます。

(鹿児島山形屋 西 義広)

第三十班「社会人」

祖国日本を考えていきたい

諸先生の御講義や、友達との語らいの中で、これまでの自分が「日本人である」という意識のなかったこと、また薄っぺらな人生観しかもっていなかったことを痛感しました。この合宿を機会に、和歌や古典を通じて、祖国日本、天皇について真剣に考えて行きたいと思えます。

(長崎林兼造船船 西尾守弘)

せめて学生時代に参加したかった

私はこの合宿に、ただ数日でも物事を深く考えてみたいという気持で参加致しました。開会式に始まり、第一日目は川井先生の御講義でしたが実に感動致しました。「発憤」という言葉が今も耳に残っています。実をいえば私自身がしかられているような気持が致しました。というのは私は昭和四十二年明大紛争の時にじっと時局を傍観して発憤しなかった一人だからです。せめて学生時代に国民文化研究会の合宿に参

加したかったと第一日目から思いました。

(株)高田工業所 阿部勝己

自分を反省することができた

友との交流の中で、私達同じ世代の友の生き方を知ることができ、そして自分の生き方、考え方を反省する機会をもてたことに感謝しています。

先生方の御講義の中で、理解し難い面もありますが、解らなかった面をつつくよりも、少しでも解った部分を友と語り合っていくことが、大切であると感じました。どんな問題であらうとも、心静かにみつめて、深く考え行動していくことが必要だと思えます。(鹿児島興業信用組合 本村健三)

日本文化を再認識できた

この合宿の目的は、現在の日本に欠けている日本人の民族的価値を、再び我々の心に呼びもどそうとすることにあり、感じました。私はこの合宿で、外国にない日本独特の芸術、学問の大切さを再認識できました。そしてそれを自分のものとして、これからの日本を見つめ、実践していかねければならないと思いました。(鹿児島興業信用組合 中村俊夫)

何故もっと早く参加しなかったのか

この合宿を通じて、今迄の生き方が間違っていたことを反省しました。高谷先生の御講義を聞いて、組合運動の激しい今日において、真の組合作りというものが、自分なりにつかめたような気がします。目先の勉強しきれないで、組合活動の真髓を知らぬまま発言していた自分が恥ずかしい。また考へてもみなかった明治憲法、天皇制の真髓、歴史的な日本民族の誇るべき心をあらためて感じさせられました。何故もっと早く参加しなかったのか残念でなりません。学生生活をなんとなく平凡に過していた自分に、一本芯が入ったような気がします。(高千穂相互銀行 押川勝志)

第三十一班—社会人—

夢中ですごした五日間

合宿がはじまり、友ができて、諸先生方の御講義を聞いているうちに、それまでの何かもやもやした不安な気持は消え、自分の力のなさを痛感するようになりました。そして、講義の中に自分をうちこみ、班別討論に参加して、一つでも

何か得て帰ろうと夢中で五日間を過ごしました。特に高谷先生の「日本は共產化するか」、木内先生、小柳先生の御講義などには深い感銘をうけ、もう一度、お聞きしたいと思っています。

(鹿兒島山形屋 当房 忍)

物事の本質を見出したい

この合宿を通じて物事の本質を見きわめなければならぬと思った。学問は教えられるものではなくて、学び取るものであるという意気込みで、今後多くの先人に会い、物事の本質を見出すことができるように努力したい。

(吉川工業櫛 鷺尾正恭)

大らかな気持になった

この合宿で日本民族の偉大さを知り、友との語らいの中から真心を尽くすことのすばらしさを知り、大らかな気持になりました。私はこの合宿で得た知識を日常生活において実践し、また発憤(行動)して、気力に充ちた、強い自分を確立していきたいと思います。

(鹿兒島興業信用組合 南 忠夫)

勉強不足だった

今まで勉強不足であったことがわかりました。学生運動や社会主義思想に対しては反対していましたが、それも漠然としたものであり、また天皇制についても何の価値も認めていませんでした。しかし、この合宿で得たことは、僕の人生の基礎として、決して無駄にはしないつもりです。明日からの仕事に発憤して頑張りたいと思います。

(高千穂相互銀行 石山礼三)

国家のことに無関心だった

仕事仕事で、国のことや政治、経済のことに、あまりにも無関心になってしまっている自分をまざまざと見せつけられ、反省させられました。しかし、この合宿の講義などにすぐ感動してしまったことにも多少不安がないわけではありません。とにかく、参加して良かったと思っています。

(長崎林兼造船櫛 本田久和)

行動に移さなければならぬ

混乱する日本や世界を冷静に見つめ、一人一人が自己啓発

に努め、勇氣と努力をもって発憤し、古典、歴史、天皇制、憲法問題等、あらゆる方面について勉強し、それを行動に移すことが、今日の我々青年に与えられた使命であるということとをひしひしと感じました。

(鹿児島興業信用組合 横道良民)

第三十二班—女子学生—

涙がこぼれました

始めは、天皇制の問題等にずいぶん抵抗を感じましたが、覚悟をきめて、一心に講師の話しを聞こうと心がけました。自分がうしなわれるような不安な気持ちになりましたが、講師の語られる言葉のおくにある真剣な心情にふれえた時、今まで自分がいかに一人よがりであり、ごうまんであったかを感じ知らされ、涙がこぼれました。

和歌創作においても、すなおに自分の心をあらわし、いつわらないところをはじめて道が開けることを実感しましたし、歌を通しての真心と真心のふれあいには本当にすばらしいと思いました。

再びあの騒々しい学園に帰りますが、これからやることがたくさんあるような気がします。

(長崎大学 教 二年 川本琴絵)

子供達に伝えたい

二度目の合宿生活の終わりをむかえ、ただ胸がいっぱいです。今回の合宿ではすべてのものがぐいぐいと迫ってくる思いがしました。班長という大役を引き受け、つくづく人と人との結びつきのむずかしさを痛感すると同時に、それ故に自分が思っていたより、もっと人との結びつきが尊いことを知りました。友と心が通い合った時の喜びの大きさを知りました。

私は小学校の教師になろうと思っておりますが、合宿で感じ得たものを消化して、子供達に伝えることのできる人間になりたいと思っています。そういう形で合宿で得たものを実生活に生かしたいと思います。

(岡山大学 教 四年 三宅教子)

勉強しなおしたい

初めての合宿参加で、いろいろなとまどう面がありました。特に、私の大学生活では、友と真剣に語り合おうという態度の少いことが、今まで以上に考えさせられました。ただ頭から批判するのではなく、真心をもって考えることの重要性にあらためて気づきました。

まだ納得のいかないものが、心の中に残ってはいませんが、もう一度はじめから、合宿生活をふりかえり、勉強しなおして、何かが得られるように努力したいと思います。

(玉川大学 文 二年 植村真理子)

一生の課題がみつかった

私を得た最も大きいものは、今までわからなかった私自身の進むべき道がはっきりしたということです。小田村先生の言われた「人間として本物になろう」という言葉こそ、私は一生を決める言葉であると思われました。人の真の心がわかることができるかどうかということが一番大切なのだと思いい、真心をもって人に接してゆくことこそ人の道であると痛切に感じました。

これからの私は、「本物になる」ということを一生の課題として努力してゆきたいと思えます。

(九州女子大学 文 三年 辻 節子)

和歌の心がわかった

学生運動に走った友達に対して、常々自分なりに考えていたことが、間違っただけではいなかったことがはっきりとわかるとともに、日頃御製を拝誦する友達に反感をもっていた自分が

恥ずかしくなりました。山田先生がよまれる歌を真剣な思いで耳を傾けていた時、日本人に流れている精神がうっすらながらも初めて解ってきたようです。これから先、多くの先生方がおっしゃられた日本人の中に流れている精神をつかむために、私なりに本当の学問を追求してゆきたいと思っています。

(福岡女子短期大学 家政 二年 久富啓子)

苦しみを求めてゆきたい

今、自分のやっている活動のいきづまりを打開する手がかりを得たいという気持で参加しましたが、この合宿で抽象的な正義感、使命感だけでは前に進めないことを感じました。死しても戦わんの勇氣は、この日本を、我が生命として愛する心情から生まれると思えます。この日本を守り、そのために死をかけて戦った先人の思いを受けつぐことこそ、これからの日本を背負ってたつ青年の責任であると思えます。語られる諸先生方の、日本を愛されておられる深い心情に触れ、日本人としての血がふつふつとたぎってくるようです。

御講義で私を感じ得たことはほんの導入であって、これから何をすればよいかはわかりませんが、自ら常に苦しみながら求めて行かなければならないと思えます。その点において苦しむことを避けてはならないと思えます。

(九州大学 理 二年 増田峰子)

いつわりのない心で人と接してゆきたい

合宿に参加して、ただ一言「来て良かった」ということを述べたい。はじめは先生の御講義に表面的な所で反撥していましたが、一日二日と過ぎてゆくうちに、先生方が本当におっしゃりたいことを心から受けとめねばならないと思いました。そのためには、もっと自分の心を開いて、友達に、先生にぶつかって行くことだと感じました。まったく未知であった方々と五日間の寝食をともにして、痛切にそのことを感じました。これからは偽りのない裸のままの心で、人に接してゆきたいと思います。先生方をはじめ班員の皆さま、どうもありがとうございました。

（長崎大学 教 二年 関 光子）

心のこもった言葉をほきたい

心からこみあげてきた言葉でないと死んだ言葉であるということを、去年よりもずっと強く感じた。たとえ素晴らしい話であっても、それが理論にすぎないならば、私の心には響いてこないであろう。心と心を通わすことのできる、真の言葉をほきたい。

（鹿児島大学 教 二年 厚地順子）

まごころを伝える歌を作りたい

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の中に、「生死無常の人生ははかなきものであるけれども、人のまごころのまことは、言葉に残されてとこしへに伝はるのである」という一節がありますが、歴代天皇の御製を読んでいくうちにこの言葉を思い出しました。私もこれからまごころのこもった、たくさんの歌をよんでいきたいと思います。

（実践女子大学 文 二年 青砥道子）

第三十三班—女子学生—

素直な心が大切なのだ

努力したにもかかわらず和歌創作は完全な失敗に終わりました。思ったことも表せないために、作っても友達に理解されず残念でした。なぜ友達のように作れないのかと苦しみました。しかし友達が素直に詠んだ歌を聞いて、初めて自分はまだがっていたと思えました。自分の気持を表現する前に、ものを見、聞き、感じとる素直な心が欠けていたのに気がついたのです。その心なくして、どんなに私の心の動きを詠もうとしても、人には理解してもらえなかったのだと思いま

す。

先生方の御講義では、御人格に圧倒され、感じることの多い毎日でしたが、私が一番心を動かされたのは友人のひたむきな素直な姿でした。その姿に感動し素直な心に気が付いて初めて、御講義の奥にあるものを自分の心実感として受けとめることができました。この態度をいつまでも忘れずに、努力したいと思っています。

(岡山大学 医 二年 小田幾世)

やまとことばは素晴らしい

山田先生の御講義で、幕末の志士の遺歌を読まれたときは、何と行ってよいかわかりませんが、心の中がすつと洗われてゆくような気がしました。何回となく目にしてきた歌ですが、あのような気持になったのは初めてでした。自分の気持を素直に詠めることの素晴らしさを、それも日本語を用いてのみ自分の気持が表現できるのだと気付いたとき、とても嬉しかったです。日本語を使えるのは日本人なのだ。自分は日本に生まれて本当に良かったと、何回も自分に言い聞かせていました。

先祖代々伝えられてきたやまとことばを大切にしてくくのが、私たちに課せられた使命だと思いました。このやまとことばで、素直に自分の気持が表わされるように勉強してゆきた

いと思っています。(学習院大学 経 四年 小田村静代)

人生に於ける基本的姿勢を学んだ

私がこの合宿に参加した一番の課題は、学んだことを日々の生活に実践できるようにしたいということでした。木内先生の御言葉をお借りしますと、「自分なりの宗教をもって日々の実践をなす」ことです。

私はカトリック信徒ですが、先生のお言葉を聞いていると、今までは気持の上では非常に精神的なことを考えていたが、私の信仰は実践のない偽物であったと思いました。「本物の人間になれ」との厳しい御言葉を言われる先生方が、熱意をもって私達を教え、自らも共に学んで実践されている御姿を見るにつけ、その感を強くしました。と同時に、実践実践という言葉だけでなく、もっと自分をぶっつけてみるという基本的な姿勢こそ大切だと感じました。

(法政大学 文 二年 白鳥佐千子)

女性らしく生きたい

私は男女同権ということについて大変な思い違いをしてきたようです。女性であることを意識しすぎる必要はないし、男性が行動するのと同じように行動してよいのだと、かたく

なに考えていたのです。諸先生の御講義をお聞きして、私は日本の為に働くということに胸打たれるものがありました。女性が、女性である以上、女性にしかできない事があるし、その事に心を傾けることが、国のために働くことにつながるのではないかと感じました。(皇学館大学 文 一年 幡掛節子)

奥行の深い女性になりたい

合宿生活での班別討論で、私達女性の問題、つまり日本の女性としてどう生きたらよいのかということが出なかったのは残念です。もっと、そのことについて討論したかったと思います。

御講義では、よく呑み込めなかったところが多かったのですが、和歌創作を通じて人の心というものに触れることができました。また天皇の御製を読んで、その御心を知った時は非常に感激しました。

いよいよ社会に出るわけですが、心をふれあった友達を大切にして、人の心がよくわかるような奥行の深い女性になりたいと思っています。

(熊本女子大学 文 四年 加藤恭子)

聖徳太子を勉強したい

今の学生の多くは、私をふくめて、自分の姿勢をありのままにみつめる態度が欠けているように思います。そこから初めて正しい判断、行動ができると思います。そのためには常に、本物になろうとする心を忘れずに歩まねばならないと思います。

先生方や諸先輩が国の問題を、具体的に自分の問題として深く考えておられる姿に触れ、それが深い所から「人間」をみつめた姿勢から発するものであると感じました。

聖徳太子の「国家の事業を煩となす。但大悲息むことなく志益物に存す」という御言葉が実に印象的でした。どこからそういう御心が生まれてくるのか、自分はもしたらその御心を受け継ぐことができるのかを勉強してみたいと思います。(九州大学 薬 二年 浜田博子)

段々とわかってきた先生方の御講義

合宿生活は二度目ですが、終わりに近づくにつれて、去年の合宿ではあまりよくわかっていなかったことが、多くの先生方の御講義をお聞きするうちに、段々とわかって来るような気がしました。

特に、小田村先生の「本物の人間になれ」との御言葉には、深く感ずる所がありました。

(鹿児島大学 法 二年 高山由姫子)

友達との語らいで目がさめるような気がした

四泊五日の合宿は、私にはまったく初めての経験であっただけに、ここで受けた感動は今なお私の胸に強く残っています。

正直に言って、私には講師の方々の御講義で理解できぬ所が数多くありました。しかし、この合宿で学ぶことができたのは、心と心の交流の素晴らしさであった。今までの私には、人の心を思いやるという態度が、あまりにもなさすぎたと思う。大学は学問の場であるが、また人間として本物になろうとする場でもあるのだ。大学に身を置いていながら、今まで理屈では知っていても心の底から感じる事ができなかったが、今初めてこのことに気づき、目がさめたような気がします。

(鹿児島大学 法文 一年 春口 涼)

おぼろげながらわかった日本人としての生き方

自分なりに考えて合宿に参加したが、まだ真剣さが足りなかったためか、班別討論でも受け身になりがちであったと思う。そしてまだイデオロギー的な面や、人と人とが本当に信じ合えるかどうかという点など、理解できないところはあるが、祖国としての日本の良さをみなおし、世界の中で、日

本人”として生きていくことがどういふことであるか、おぼろげながらわかったような気がする。

(実践女子大学 家政 二年 坂井文子)

両親につたえたい

和歌のすばらしさというものをじかに肌で感ずることができました。今後は文通の時などに和歌を書き添えたいと思っています。また友達にも和歌創作をすすめたいと思います。諸先生の御講義のすばらしさにはとても感激いたしました。私が今まで大学で受けてきた講義と比較にならぬほど広い観点からの御講義で、本来に来てよかったと感じています。帰って、まず両親に、この合宿で学んだことを話そうとはそのことばかり考えています。

(佐賀大学 教 二年 徳久やよひ)

素直な気持をそのまま表現するのは難しい

今までの自分は言葉を知識として理解するだけにとどまり、わずかの知識をひけらかしていたのではないかと、次々に疑問がわき起って、今までの生活をよくふりかえって反省してみなくてはと痛感しているところです。和歌創作においてはさらにそれが感じられ、自分の素直な気持をそのまま

表現することが、何とむずかしいことかと身にしてみても感じました。ここで学んだ事を今後の自分の精神生活に、また行動に、いかに生かしていくかが大きな課題です

(長崎大学 経 一年 江口篤子)

閉ざされていた私の心が開けた

合宿の五日間、私は色々と迷っていました。最初、天皇という言葉に反撥して、先生方の御講義で素晴らしい言葉を聞いても、ついてゆけず、何か心が閉ざされていました。

しかし小柳先生の厳しい御言葉を聞いたとき、自分の心の中に一つの変化が起こるのを感じました。それは「部分的なものにとらわれてはいけない。確かにまだ私はすべてを受け入れることはできない。けれどもそのため、本当に素晴らしいことや心に訴えるものまで受けつけないのはよくない」ということでした。

こんなことを今まで気づかなかったことは残念ですが、このことによって、私は人の心の姿勢のあり方というものを知りました。人のまことの心を素直に受け入れることを知っただけでも、この合宿にきて本当によかったと思います。

(長崎大学 医 二年 藤野美和子)

指揮班

貴重な体験だった

過去三回と同じように、この合宿でも感激しました。そして今はまったく疲れはてました。

国民文化研究会の先生方や班長諸兄が、参加者一人一人のことに心をつかっている姿に、はじめて接してみても、過去の自分の合宿態度が非常に反省させられることが多かった。この貴重な体験を通して得たものを今後の生活に生かしてゆきたい。

(鹿児島経済大学 経 四年 横手満男)

表面だけをつくろうのでは駄目だ

まず第一に国民文化研究会の方々、合宿参加者の皆様および事務局の方々に厚くお礼を申し述べたい。

指揮班に携さわってみて、さまざまなことを学びました。特に合宿の進行に当たるといことは表面だけをとりつくろうことではなく、さまざまに心をつくすことであり、一人一人が心をよせあってはじめて合宿が進行されるのだというところが実感できました。

(九州大学 工 二年 志賀健一郎)

参加者の皆様に感謝したい

私は今回で三回目の参加です。今回は指揮班をやらせていただきましたが、参加者の皆さんと一緒に語り合えなかったことが心残りです。心をまじえて話す時間が少なかつたし、ちょっとした合い間を見つけて、班別討論にオブザーバー参加をしてみても、班員と心を本当に開いて話すことができなかった。また、指揮班の仕事を精一杯やっただけですが、参加者が満足な雰囲気を受講できるまでには不十分なところが多かったことや、スケジュール通りに時間を厳守できなかったこと等、皆様には申し訳なく思っています。ただ指揮班の仕事は縁の下の力もちのような仕事で、自分たちがいなければ運営ができないのだということを、仕事をしているうちに感じた時は嬉しかったです。

合宿半ばで多少疲れてきましたが、誰でも疲れているのだという気持ちで、疲れをふきとばした自分を、合宿教室を終えた今ほこらしく思います。最後にかような自分を力づけはげまして下さった国民文化研究会の方々を始め、班長、参加者の皆様に感謝したい気持ちでいっぱいです。この気持ちを忘れずに明日からの生活を送りたい。

(鹿児島経済大学 経 四年 東条 久)

合宿中に創作された「短歌詠草」

—しきしまのみち—

短歌詠草について

この合宿教室の案内書には、合宿中に「和歌を創作すること、および各自の創作作品を参加者同士で相互に批評すること（思想および表現の正確さを修練するために）」と明記されてある。すなわち、和歌を作ることが、必須の条件としてあらかじめ予告されてあった。三百五十名を越える大合宿で、全くの初心者をもふくめて作歌を強制する理由は何か。われわれはこの数年間の合宿運営の経験によって、大ぜいの人々が一緒に和歌を作るという「経験」が、思想生活の上で、どんなに重大な意義を持つかを、身にしみて痛感してきた。

現代の青年学生層の動向は、国家の将来にとって寒心に耐えないものがあるが、彼らと旧い世代との断絶は、決して、いわゆる「思想」の面だけではないのである。否、重大なことは、むしろ思想以前の問題であって、「情意の面における共通の基盤が、日本国民の間に消滅しつつある」という現状、それこそは、きびしく注目されねばならぬ問題であろう。ラディカルな革命理論を横行せしめている母胎は、実に、情意の涸渇、感情の荒廃にあると断定しても過言ではない。従って、われわれが合宿参加者に作歌を課するのは、このような現実を打開して、真に生命的な思想の地平を開くための、不可欠の試みでもあったのである。

合宿第二日、山田輝彦会員によって、それについての導入講義が行なわれた。全くの初心者を対象として、作歌の基礎的な技術指導が行なわれた。翌日の韓国岳登山の後に、第一回目の詠草が提出されたが、一人平均三首として、約一二〇首に上る歴大な歌稿であった。これらの歌稿を国民文化研究会の会員が十人ほどで選別した。一人一首は必ずとるという原則であったため、未熟な作品が多いのもやむを得ない。漢字や明瞭な語法の誤

りは別として、できるだけ「原型」を残すようにつとめた。このようにしてえらばれた作品は、約六五〇首に上った。国民文化研究会の若い人たちが、それをてきばきとプリントに切ってゆく。徹宵の作業である。翌日は朝早くから印刷が始った。事務局の人はその様子を次のように詠（よ）んでいる。

あい色に指をよごして少女らはプリント作りにいそしみてをり

こうして出来上った三十一枚のずしりとしたプリント綴りが参加者の手に渡ったのは、第四日目の夜の全体批評の始まる直前であつた。参加者は自分の歌が印刷されたプリントを手にして、歌の相互批評とは、合宿においてどんな意味を持つのかということ、具体的に、真剣に学んだのである。

われわれが批評という場合、それは決して欠点の指摘のみを意味しない。相手の気持になり、その心情を「憶念」するということをぬきにしては、批評の意味はない。相手の立場になってみたり、相手の心の動きに自分を合わせてゆくという体験は、現在どの社会でも最も欠けている点である。歌はまた、一つの独立した客観的世界でもある。自分の心を正確に相手に伝えることは意外にむずかしい。言葉が概念化し、スローガンが横行している今の時代に、作歌の体験は、一つ一つの言葉の大切さを、身をもって知る機縁を提供してくれるのである。そうして、相互批評の場において、われわれは「心が通い合う」というよろこびを、実感し得たのである。次の歌は初めて歌を作った女子大生の作品である。

初めての自分の歌に何となくうれしくなりてくりかへしよみぬ

たのもしき若き人らとあけくれをすぐすがうれし年老いしわれも

次はベテランの大学教授の作品である。

ここには年令や地位や性別を越えた「内的平等」の世界がある。巧拙は別として、こういうにぎわしい世界が、和歌の創作によって実現されるといふ事実、どうかご注目していただきたいと思う。

短歌詠草 (しきしまの道)

第一班 (男子学生班、以下二班まで同じ)

鹿児島経済大 石野良孝

かすみたる韓国岳の頂をふりかへりつつ山を
おりきぬ

鹿児島大 瀬上一 誠

神々の天降りたるいにしへを思へば山も新し
く見ゆ

福岡大安 西健二郎

霧島の雲がたなびく山並にいつの間にか心引
かれし

中央大杉 盛全

遠山は母の姿かつづきたる青山なみも心ある
らし

鹿児島大 東中野 修

本物の誠をもとめよとのべらるる師の言の葉
に心うたれけり

岡山大山地 彰

荒き道友のはく息近く聞き議論も忘れ足を連
びぬ

亜細亜大 小沢弘幸

学園の乱れ憂ふる友人の奮起の姿いさましき
かな

東京工大 内田敏彦

老齢の身にしあれども師の君はかくも国事を
憂ひたまふか

長崎大為 西昭勇

火の山の岩のはざまに生ひ出でしミヤマキリ
シマ美しきかな

第二班

九州大富 吉聡伍

維新の志士の歌をおそはりて感ず
憂国のまごころこもりし歌なれば我が心にも
強く響けり

鹿児島大 西島 信

雲にかくるる高千穂を今我は見きいにしへび
とのこころしのばゆ

明星大 菊井健夫

ひとときの雨に打たれて青々と心さわやかな
霧島の山

皇学館大 中西和之

高千穂は雲にかかりて見えざれど我が心には
曇りなかりき

拓殖大 西田 亨

夏雲にかすむ高千穂ながめつついにしへびと
をしのびけるかな

東洋大 藤田 忠

韓国にたちて見たればはるばると山なみつづ
きなつかしきかな

長崎大 山本 学

遠方のかすみに浮ぶ桜島の雄々しき姿何にた
とへむ

明治大 繁永 正博

あえぎつつ登る韓国の時をりにふきぬけてゆ
く風の涼しき

第三班

西南大 芳賀健児

学友に燃える思ひを秘めながら静かに語る班
別の会

山口大 佐々木 和男

汗かきて韓国岳をきわむれば霧たちこめて肌
寒きかな

東京大 鴨川 盛秀

眼下には水なみ／＼とたたへたる大浪の池の
美しきかな

亜細亜大 片柳 隆

霧島の別れを惜しむかの如く宿舍の外を雨は
降りゆく

長崎大 里 忠時

ゆがみたる我がころねをたださんと思ひを
抱き霧島を去る

久留米大付設高卒 大野 寛

霧島の青く静かな火口湖の遠き昔のしのばる
るかな

九州大 上原 康次郎

雲去れば水をたたへしすりばちのごとくに見
ゆる大浪の池

長崎大 白石 肇

合宿もおわって

友は今恩師の前にこころこめ感謝のことばを
語りけるかな

慶応大 大浦 芳博

からくにの山のいただきよりのぞみたる池の
おもてはすみわたりたり

第四班

鹿児島大 金津 洋雄

班員がまだ一人来ぬと入口へ見に行く友の後
姿うれし

九州大 小柳 左門

とざしたる雲晴れそめて南に桜島山そびえた
る見ゆ

屋根を打つげしき雨音に思ひ述ぶる友らの
声はとぎれきこゆる

西南大 久保山 俊郎

霧島につどひし友よたちあがれいまだ祖国を
救ふ時なり

鹿児島経済大 木佐貫 国孝

霧島に登りて思ふ祖国あり国に殉ぜし若者の
あり

東京大 石井 英一

慰霊祭にて
国のため尊き命を盾にして倒れし御魂よ安ら
かに眠れ

鹿児島大 河内 信行

天皇について初めて語りし折
かたり合ふ吾が同胞の真心に心動かぬ我は悲
しき

早稲田大 原川 猛雄

今上天皇の御製を拝唱して

御歌をば読みつつ思ふ大君の国民思ふ御心深
きを

大分大 藤原 慶一

同胞が心をこめて語りたる思ひに我が身もふ
るひたつなり

第五班

早稲田大 古橋 一誠

夏草の生ひ繁げの中を我行けば真近に見ゆる
白雲の峰

鹿児島大 中西 達夫

講義中熱心に聴く人々を驚かす如く雨のふり
けり

岡山大 田中 輝和

友どちの登りし山の頂を灰色の雲は隠して過
ぎぬ

土智大 近藤 繁明

からくにに登りても心とけぬかなわが進む道
思ひつつ行けば

独協大 中沢 周一

日の丸をあほぎて君が代歌ふとき胸にこみあ
ぐる不可思議なるもの

明星大 松岡 達雄

師と共に頂目指し休みてはまた登り行く韓国

岳を

鹿児島大 松木 昭

こぞの夏共に学びし友みつけ思はず友に呼ぶ
かけぬるかな

長崎大 芳田 真一

登山から帰りに浴びる温泉の肌にしみ入りて
心地よきかな

第六班

熊本大 永井 幸男

ふりかへり色あざやかな火口湖にしぼし我が
足とどまりにけり

立命館大 池之上 晃 敏

知らざりし友と心こめ語らふも今日限りかと
思へば淋し

富山大 望月 保宏

山を背に大和心を示すごとひるがへりたる日
の丸の旗

鹿児島経済大 緒垣 正友

韓国に登りてはるかながめけりわが父の病ひ
いかになりけむ

東京工大 天川 東作

九州にはるばる来て会ふ友と師とめぐりあひ
し人のありがたきかな

亜細亜大 前田 終止

霧島のふかきみどりに疲れたる己が心もよみ
がへりけり

一橋大 北川 文雄

村田英雄先生の全体意見発表表を聞いて
声ふるはせ心をこめて話さるるその御姿の胸
を熱くす

長崎大 田中 日出治

万緑に白銀の雲湧き上がる夏空の如き今の心
なり

九州大 桑野 正紀

生きる意味解らぬと悩む我が胸に友の言の葉
深くしみいる

第七班

鹿児島大 高木 道弘

友どちと夜も忘れて語らひしこの貴重なる体
験忘れじ

皇学館大 白江 恒夫

口だけで物足らずし身ぶり手ぶり加へて語
る友たくまשיき

上智大 米津 茂

信念を貫き死にしものふの作りし歌に涙は
落つる

早稲田大 広瀬 清治

言の葉を語らむとして友どちの思ひ高まり絶

句するらし

言の葉はよし語らずも君の思ひ我が胸内にひ
たに迫り来

亜細亜大 鈴木 雅教

さわやかな風をうけつつあがりける日の丸あ
おきてわが身引きしまる

国立音楽大 大越 静

我が胸につかへし迷ひ先輩のことばに消ゆる
このうれしさよ

日本大 加藤 邦泰

友どちと語りつくしたる言の葉を深く心にと
どめゆかなん

東京大 伊藤 哲朗

今上天皇の御製を讀みて
ひたすらに国民思はるるみ言葉に我が目頭に
涙こみあぐ

九州大 千田 博

友どちの語ることをききおればなにとはな
しに心やはらぐ

第八班

拓殖大 高浜 史朗

青々と澄みわたたりたるカルデラ湖のどの渴き
のますますつのる

西南大 小野 吉宣

川久保君の死を聴きて

講義中思ふまじとは思へども生前の君の姿消えざり

合宿で会はむと言ひし君の顔たえず浮べど今は会へざるか

亜細亜大 江ヶ崎 信夫

前方に薄黒きガス迫り来て麓の白き湯煙も見えず

上智大 土岐 直人

ひとしきり幽かなる風吹きわたり大浪の池に寄するさざ波

東京工大 村尾 正昭

親元を離れて遠く霧島に見知らぬ友と共に語りき

東北学院大 星野 彦治郎

登りつき高なる心おさへつつ眼下を見ればすがすがしかり

鹿児島工短大 樋口 義一

友どちと韓国岳に登りつきすいこむ空気いはむ方なし

鹿児島大 甲斐 俊朗

こみあげるこの感激を力としいざや進まん新しき道

長崎大 江頭 弘道

赤松の深き緑の目にしみてはらからどもの声

ぞ楽しき

第九班

東京大 石村 善悟

山石に足とられつつも元氣良く小学生の走り登り来

子供らは汗をふく我のかたはらを声はりあげて走り過ぎゆく

西南大 日高 久

頂上に登りし子ども母親に水を水をとせがみぬしかな

明治大 山内 公治

霧こむる韓国岳に登り立ちわが胸中も晴るる思ひす

福岡大 磯野 俊雄

最終日心を洗ふ強き雨晴れたる後のすがすがしさよ

長崎大 田中 洋

全国の若者乗せてエンジン音高らかにバス登りゆく

九州大 水永 正憲

己をば偽はりて生くるなとさされし師のみことばを生かさんと思ふ

福岡教大 北山 孝

降るる人は登れるわれに声かけてごころうさ

んと励ましにけり

中央大 田所 健

合宿の集ひ終りしその後もここに学びしを忘れじと思ふ

第十班

鹿児島大 定栄 安治

霧島に見知らぬ友と語り合ひ共に求めむ大和心を

日本大 松田 元

美しき山並ぬひてつらなれる高速道路の帯ぞ眼にしむ

東北大 河合 忠雄

もくもくと白煙あぐる山はだは山なみを背にあざやかに見ゆ

大分大 江畑 守勇

合宿教室に諸先生・先輩・学友と交はり友どちのふかき理想とことのはにただかへりみるおのがつたなさ

鹿児島大 福寿 一男

合宿でまことの道をつかみたる友どちの声胸に迫まりく

玉川大 原 義人

我が友の情熱こもることのはにただだと思ふ明日の我が国

中央大 中川 雅行

あひ集ひかたりしときもはや過ぎて別れゆく
とも心は一つ

上智大 酒井 唯之

一目だけ姿を見せよ桜島この霧島で待ち望む
われに

第十一班

鹿児島大 坪井 信博

同胞と語り合ひたる喜びは我が人生の転機と
ぞ思ふ

上智大 田上 桂作

夜久先生の御講義で今上天皇の御歌にふ
れて

国民を思ひたまへる大君の御心にふれ心うた
るる

早稲田大 日馬 謙

合宿の終りしいまは雨あがり涼しき風に身も
引きしまる

富山大 山田 滋

韓国の山の頂に立ちおればま白き霧の登り来
る見ゆ

東京大 西 晶 正

一言に心通ひしこと知りぬ先達の声のうれし
く響く

鹿児島経済大 有馬 健二

“海ゆかば”の歌を歌ひて

国のため野辺にたおれしくさ人の御魂安か
れと静かに祈らむ

西南学院大 毛利 亨

雨降りしあとの緑のこちよし霧島高原の合
宿の地に

第十二班

亜細亜大 大場 一知

韓国の頂に立ちてながむれば遠き山々かすみ
てみゆる

明治大 井手 一雄

汗かきていまいただきにわたれば遠きわが
家の目にかびけり

鹿児島経済大 相徳 和義

全体意見発表表にて
感激のほとばしるままに言の葉を述ぶる友ら
の力強さよ

東京大 青山 直幸

名もしらぬ友の突然の死の知らせを聞き
て

滝つぼに落ちて死にきといふ友の命思ひて胸
のつまりぬ

ほんものの人間になれといふ先生のはげしき

言葉胸にせまり来

鹿児島大 柳田 芳光

いにしへの尊き教へ学びつつまことの道を求
めてゆかむ

明治大 豊島 典雄

国を憂ふる先生の声の激しさは我が胸内を強
くゆさぶる

西南大 石川 正俊

風雪に耐へて小松の丘にたつ白き枯れ松のさ
びしき姿よ

鹿児島大 岡本 幸信

小柳先生の御講義にて
感動を大事にせよといふ師の君のことばは強
く胸にひびきぬ

恐山の千畳河原思ひつゝ煙ふくそはの石を見
てをり

拓殖大 沼田 稔

第十三班

亜細亜大 大塚 達朗

短かかる時にはあれど語りひし友の情の我身
にしみる

長崎大 松岡 英二

霧こむる火口壁の大岩は山の怒りを語るがこ
とし

熊本大 松田 信一郎

壇上で語れる友のその顔は熱き血潮のほとばしることし

長崎大 橋本 晃一

来年もあはんといひてみ友らと手をとりあへば胸あつくなる

土智大 深谷 昭広

わきいづる温泉の蒸気がめつつ自然の不思議をしみじみと思ふ

明星大 平井 隆洋

つづらおり行くて見えねど踏みしめてあえぎつつ登るこの石の道

防衛大 太田 文雄

慰霊祭にて

国のため倒れしあまたの英霊がまぶた閉ぢたる我れに迫りく

命捨て御国守りし防人のあとをつがむとかたく誓ひぬ

時移りいかにこの世はすさぶとも何ぞ絶やさむ武士の道

九州英数学館 石橋 竹敏

韓国の山のいただきより見渡せるながめ見せたりや我父母に

東京大 渋谷 典章

襲ひ来る重き言葉の激しさに苦しみのまたい

よよまさるも

上智大 津下 有道

胸内の思ひを語り尽さむと心に定めて友と語れり

いくたびか同じ思ひをくり返し述べれば友のうなづきてをり

吾が思ひを語り尽せばわが友は声はづませて言葉返せり

九州大 遠藤 政幸

大浪の池にさざなみおこりきていつしか暗き雲の迫り来

第十四班

東京工大 大岡 弘

もくもくとただひたすらに歩くととき突然に見ゆ青き湖

早稲田大 斎藤 実

天皇の母君慕はるる御心知り熱き涙のこみあぐるをおほゆ

県立松江南高校 青砥 誠一

日本を憂ふるみことは聞きし時我うれしくて涙あふれぬ

鹿児島大 藤田 初

先輩の強き言葉はふりしきる雨の音にも勝さりてひびく

東北大 出川 通

高谷先生の御講義をお聞きして

からだふるはし語りたまへる御姿にやらねばならぬと心うたれたり

東京大 西村 隆夫

学園の騒ぎを憂ふる友どちは胸の思ひをせつせつと訴ふ

神戸大 足立 哲朗

世の中に二つとはなきこのいのち大切にして生ぎんと思ふ

日本大 坂田 敬治

汗流し登りし山の頂上で友と語るはうれしかりけり

上智大 北崎 伸一

小田村先生の御講義を拝聴して

かくまでに憂へたまふか先生の御心思へば涙あふれぬ

長崎大 赤繁 明法

からくにの霧につままるごとく閉じたる我的心を開かんと思ふ

第十五班

亜細亜大 黒川 邦久

韓国のいただきに立てば霧流れ高千穂の峯の姿消えゆく

玉川大細田邦泰

合宿を終りて

五日間共にすごせし友どちはバスの窓よりわが手をにぎる

思はずも握りかへしつ明日よりの決意をひめて友の顔見る

韓国岳登山にて

亜細亜大 鴨下正克

岩の上を響きわたれる蟬の声ききつゝ山頂に歩を進めけり

早稲田大 戸辺武

友どちの一つ一つの言の葉に耳傾けぬこころ汲まむと

鹿児島大 安元進

いにしへに天降りたまへる神々はみ国のすがたいかが見給ふ

東京大 小田村初男

真実の心をもとめ集ひ来し友らと語る真心こめて

金沢大 岩崎哲夫

からくにの姿のごとく我もまた雄々しく生きむ明日を願ひて

岡山大 井上雅茂

御製にて知りし大君の御心よ幸せなるかな我ら国民

福岡教育大 土佐野実

きつき坂弱き心とたゝかひてのぼりゆくなり力ふるひて

第十六班

皇学館大 吉田真一

身を賭してみ祖の教へ守らむと語る友等の決意かたしも

法政大 小川洋司

高千穂の峯かくしたるこの霧をくまなく晴らせ天照らす陽よ

富山大 浜岸悦生

長内先生に接して

師の君の雄々しきみ姿前にしてこれぞまことのますらをと思ふ

長崎大 安東巖

出迎えの人波の中に昨年の大合宿の友を走出して

走りよりてしっかりと握れる友の手に過ぎし一年の思ひこもれる

ともすれば眠くなる眼こすりつつ師の御言葉に耳傾けぬ

語りつつ胸あつくなる日頃よりつみかさねきし思ひ述べれば

学園を正しくなさむと説く友と語りて尽きず

夜の更くるまで

長崎大 岸川守

雨降りて色あざやかなる夏木立にただせみの鳴く音ぞ聞こえくる

慶応大 河合一寛

老体にむち打つごとく話さるる師の君の声に涙わきいづ

神戸大 安藤幹雄

最後の夜一人草原を眺めつつ合宿参加の喜びを思ふ

福岡大 山本雅史

せんせいのまごころこもるおことばにわれらいまこそたつべしとおもふ

第十七班

金沢大 羽喰守秀

いただきのいわおに坐りて語り合ふ友の姿の楽しげなるかな

秋田大 渡辺晃

からくにの霧につつまるる山頂で友と語れり国の行くへを

九州大 河野勤

山下の人呼びかけて励ませど上り路苦しく答へざりけり

長崎大浜 田敏和

ただだきに見る噴煙のそこしへにもゆるがごとくもえよ同胞（はらわら）

鹿児島大 古賀 保

火口壁の高きただだきより見降ろせば昔の激しさ迫るおもひす

玉川大 姫野 道夫

天皇の御歌にあふるる真心のありがたきかな涙こぼるる

明星大 藤沢 史人

国旗掲揚にて

朝もやの中にのぼりゆく日の丸の旗ながむれば思ひ新たなり

長崎大 佐藤 健治

師と共に山を下ればさまざまにはげましたまふ言葉うれしき

第十八班

鹿児島大 寿美 博太郎

ますぐなる心をもちて生きてこし祖先の道を我も学ばむ

亜細亜大 吉田 悦郎

わがうへを我身になつて考ふる友のいませがありがたきかな

九州大 太田 黒裕

からくににくるしさをたえてのぼりつき涼しき風に心もなごむ

九州大 小川 清

韓国岳の頂きに立ちてながむれば蒼く静かなる大浪池見ゆ

慶応大 雨宮 夏雄

先輩のあたたかき声聞く毎に小さき己れに涙こぼるる

玉川大 森山 新

大神の肇（はじ）き給ひしわが国をいかで外国（せとくに）にわたすべしやは

東海大 松本 洋治

きりしまを今日は去るかと思ひをれば師友のわかれをしさ深まる

鹿児島大 納山 栄樹

桜島みなみにかすみむがしにいま太陽のかがやきいづる

長崎大 松岡 淳

ひたすらに国を思ひて妻子捨てしみ祖のおもひを切に偲（しの）びぬ

第十九班

長崎大 熊谷 幸雄

友どちと汗にまみれつつ登り来し韓国岳の風

心地よし

鹿児島大 戸沢 正志

常日頃抱きし思ひことごとく語り尽さむ短きつどひに

同志社大 中村 誠

真剣な友のことはききながらかたくなな心しだいになごみぬ

千葉大 出口 不二夫

登りきて碧き山々眺むれば美しき国ぞ大和の国は

中央大 野口 明宏

思ふことすなほに述ぶる言の葉に我も思はずうなづきてをり

合宿に出てよかったといふ君の言の葉聞くはうれしかりけり

長崎大 西村 敬一

汗流し友とかたらひ登り来しからくに岳のこちよき風

皇学館大 山脇 敏夫

錦江の海に雄々しき身をうかべ桜島山今静かなり

亜細亜大 宝辺 幸盛

とつとつと思ひを述ぶる友達のみ言葉我の胸内をうつ

うれしかり心の通ふ友どちをつたなき我が持

ちしその時

第二十班

関西大 浜野 茂

いつのまにか風は冷たくさわやかに下より吹き上ぐからくにの岳

鹿児島経済大 三園 敏 則

霧島の青き草木につつまれて友と語らふ我等の行く道

明星大 北 浜 弘 幸

霧島の山々青し山道の木立の間より我見晴らせば

福岡大 上 原 平太郎

霧島の峯より見ゆる桜島錦江湾にかすみてそびゆる

岡山大 斎 藤 利 明

わが胸は静かに燃えぬ幕末の志士の残しし強き言葉に

東京工大 木 暮 英 雄

敷島の和歌の心はけはしけれその深きをぞ究めんと思ふ

長崎大 椛 島 有 三

新燃の白煙の後にそびえたつたかちほの峰に霧のかかれる

中央大 三 輪 隆 彦

けはしかる山道なれど登らむと踏み出す足に力こもるも

第二十一班

早稲田大 阿 部 孝 郎

師の君の御言葉われらかみしめてくにのいのちをとほに守らむ

関西大 柴 田 義 治

小田村先生の御講義をききて日本のこころを説きし御言葉に我れの心の正さるる思ひす

明治大 山 口 邦 明

理屈ではいかで知り得む国思ひ命すてたる志士の心を

中央大 石 井 茂 雄

大君の深き心を知りたればただかりそめの身をばいとはじ

東京理科大 川 上 信 一 郎

すず風に愁ひて浮かぶ韓国岳藍を止めし不動池見ゆ

福岡大 川 浪 登 美 夫

友どちの寝息聞ゆる枕べに熱き空気のいまだ残り

東京工大 早 川 徹 男

嵐来し後の青空祈りつつ共に我等の理想へ進まむ

熊本大 奥 村 龍 明

霧島に見知らぬ友とめぐりあひ睦びあひたる我はうれしき

第二十二班

(教員班、以下二十八班まで同じ)

熊本市立江南中学校 上 土 井 善 巳

身をとほして国を築きし先人を偲べば心あつき思ひす

福岡県立八幡西高校 村 田 英 雄

音をたてて登るバスより眺むればさつまの山は遠くほの見ゆ

敷島の道をとかるゝ御講義に張りし心もいつしか和む

熊本市立花陵中学校 渡 辺 清 隆

まごころを傾け説かず師の君のことははげしく身をゆすりたり

心かよひ染しき時を経し今はひろびろとして道展けたり

熊本市立豊徳小学校 紫 垣 章 一

赤松の林をわたるひぐらしの声まですすしえびの高原

鹿兒島高校 岩 下方 成

若き友死すの知らせにざわめきの声静まりて
顔こわばりぬ

熊本市立野尻中学校 岩 下 信 敦

湖の澄めるがごとく我が心あらましものと一
人憂ふる

八代市立第三中学校 松 田 吉 徳

我が友と車座になり日の本のゆく末語ること
ばも強し

第二十三班

山鹿市立山鹿小学校 早 田 治 雄

汗をふき語る老師のことのはをききのがすま
じと足をはやむる

熊本市立池田小学校 宮 田 正 直

溶岩の一きは赤きかたまりに友と立ちたり韓
国山頂

熊本市阿蘇町立役大原小学校 松 永 昭 典

えびの高原にて
青き湖緑の高原を眺めつつ日の本の幸静かに
思ふ

熊本市立松橋高校 松 村 静 五

古の国の歩みを学びつつ忘れし志奮ひ起こさ
ん

熊本市立竜南中学校 岩 本 巖

高原に集ふ友らに日本の輝く姿吾はみるなり
熊本市阿蘇郡波野村立小野池小学校

田 中 益 雄

火口湖の青々と樹々を映しをり我れふちに立
ちてしばし休みぬ

人吉市立人吉西小学校 氏 川 昭 二

若き日の苦難の道を語るる師のみ言葉に力
こもれり

第二十四班

熊本市阿蘇町立阿蘇中学校 渡 辺 憲 昭

三度きて登りし山は変わらねどわが心今ひた
すりに燃ゆ

熊本市立春竹小学校 小 崎 圭 洋

世の中に死してつくせし先人のこころ語るか
高千穂の峯

熊本市嘉島東部小学校 山 本 忠 義

世を憂ふるまことに年のへだてなし共にはげ
める姿尊し

熊本市五木村立三浦小学校 荒 川 愛 二

幕末の志士の魂受け継がむ拙き力の限りつく
し

熊本市立託麻原小学校 吉 川 太

父祖の霊なぐさめんとて黙禱を捧げあるとき

ひぐらしの鳴く

熊本市立竜南中学校 松 浦 良 雄
合宿を終えて

四泊の合宿終へて省みる己がまことを尽した
るか

徳山市私立桜ヶ丘高校 宇 賀 幹 郎

若者が明日を建てむと熱心に学ぶ姿の心強さ
よ

八代市立八代小学校 加世田 和 馬

靖国の神となりしわが兄もここにきまますか
山のまつりば

第二十五班

熊本市九州女学院高校 田 端 稔

天地の間に湧き起る山霧の中に消えゆく高千
穂の山

人吉市立人吉東小学校 早 川 亘

湧き出づる湯煙のごとわが力奮ひ起して師の
道求めむ

熊本市立東野中学校 出 田 正

集ひたる友としみじみ語りひて時の過ぐるを
忘れたる日々

熊本市立京陵中学校 成 松 彬

霧島へと我が家出て来て早や三日わが子恋し
く我れ思ひをり

熊本市小国中学校 佐藤 直

語りあひし友らと別るるはさびしかり閉会式
まで居られぬ我は

熊本市立城東小学校 貴島 武之

夜久先生の「今上天皇の御歌」の御講義
を拝聴して

久方の雲の上なる御方のまごころにふれ胸せ
まりくる

熊本市立藤園中学校 吉川 博

合宿の終りも迫りともどちは夜のつどひに別
れを惜しむ

熊本市八千把小学校 徳 永 通

朝まだき霧島山をあほぎみて友と語りふ人生
の道

第二十六班

人吉市立人吉東小学校 西山 喜雄

討論の熱きことのはかみしむる暗き窓辺に夜
半の風入る

熊本市阿蘇馬見原小学校 田 中 行 雄

師のはなしききつつ歩く砂利道の木の間に見
ゆる紺碧の水

熊本市立江南中学校 園 村 健

班別討議で

我等みな共に集ひて師を迎へ身をのりだして

語りけるかな

鹿児島県教育委員会 伊地知 正明

学生の雄々しき姿いざや見よやまとのくにの
末たのもしき

熊本市立宇土高校事務 緒 方 定 見

緑なる松の林にひぐらしの鳴きわたるなりえ
びの高原

熊本市山鹿市立大道中学校 池 上 和 男

ふもとより吹き上げきたる山風にあへぎてす
がししばし憩へば

熊本市立三和中学校 中川 信 泰

湯煙のつきざることくきりしまの深き思ひ出
永久に忘れじ

熊本市立春日小学校 森 脇 孝 男

討論会を通して
平等のことばの意味を語りひて日かたむきぬ
合宿のよる

第二十七班

熊本市立西原小学校 松 尾 和 利

松風の音はずし吾胸に千古のいのちささ
やくごと

八代市立第二中学校 西 村 忠 昭

吉田松陰先生の御文をよみて

国思ふただ一筋のみ教へは今に残りてわが胸

を打つ

熊本市立花陵中学校 坂 崎 健 一 郎

慰霊祭にて
祭神にまじりし亡父を仰ぎみてひきしまる身
に強く誓へり

人吉市立第一中学校 源 島 駒 男

夜を徹し友の作りしこの歌稿手にすれば頭の
下る思ひす

熊本市立藤園中学校 古 場 昭 輝

誇り高き民族のいのち探らむと集ひし我的心
ときめく

人吉市立第一中学校 松 田 俊 彦

迫りくる霧をさけんとおりくれば硫黄のには
ひ身を包みけり

明星大学助手 塩 崎 恵 一

雨あがりすみわたりたる霧島のはるか彼方に
桜島見ゆ

第二十八班

熊本市立託麻原小学校 北 原 孝

山肌に若き力はみなぎりて後追ふ我は苦しか
りけり

熊本市砥用東中学校 北 島 道 治

弟子となり又或る時は師となりて陸みあひけ
る霧島の宿

熊本県阿蘇古城小学校 家 入 輝 男
霧島に学びし心伝へなむ道求めある友と友と
に

熊本県玉名市立八喜小学校 上 原 浩 史
率直に意見をのぶる若人に明日の日本の夜明
けをぞ見る

熊本県阿蘇北里小学校 市 原 輝 夫
我執あり混迷ありと語る師の胸奥に見ゆ大和
心は

熊本市立高平台小学校 内 田 末 春
受けをまつ間にホテル眺めやり友のしげく
往くをたのものと思ふ

第二十九班 (社会人班、以下三十一班まで同じ)

広島・日商(株) 折 本 求
稲の葉の彼方に見ゆる山並は朝もやに霞むき
つまの山か

鹿児島・新日本勸業(株) 下 田 時 生
泰平の今こそ偲べ若人よ祖国造りし先達のこ
ころ

下関・林兼造船(株) 田 中 正 俊
霧島に心はずませ来し我も勉学浅きことを知
らさる

鹿児島・(株)山形屋 西 義 弘
山のぼり苦しきことも多けれど頂につきし時

の嬉しき

鹿児島興業信用組合 野 村 隆 一
遠くより集ひし友らに煙あげて姿現はせ桜島
山

宮崎・高千穂相互銀行 井 上 三喜男
夜ふけまで友と語りひるる中に発憤せよと我
を励ます

宮崎・高千穂相互銀行 松 田 夏 哉
幾とせの想ひを馳せし霧島の青き山はだ踏み
しめてをり

長崎放送(株) 丸 林 富 久
今よりもさらに良き国つくるため集ひ語りし
若人の群れ

第三十班

若松・(株)高田工業所 阿 部 勝 己
韓国の上に登りて眺むれば自然の緑我が眼に
しみる

長崎・林兼造船(株) 西 尾 守 弘
昨日まで顔さへ知らぬ我友と祖国の行くへ学
ぶうれしき

鹿児島興業信用組合 中 村 俊 夫
霊峰の霧島山に集ひたる若人の目の輝やける
かな

宮崎・高千穂相互銀行 押 川 勝 志
いにしへの民の真心忘れまじ今日に生きゆく
我が身なれども

鹿児島興業信用組合 本 村 健 三
合宿の意図するものをとらへむと師の御言葉
に耳を傾く

第三十一班

八幡・吉川工業(株) 鷲 尾 正 恭
霧島の夜は静かにふけにけりなぜかきびしき
星の光は

宮崎・高千穂相互銀行 石 山 礼 三
夜ふけまであすの別れをしみじみと語りひを
ればおもひあふるる

長崎・林兼造船(株) 本 田 久 和
すがすがし霧島山の朝むかへあさもやの中に
桜島をみる

鹿児島・(株)山形屋 当 房 忍
はじめての友に我が思ひ述べたしと思へども
言葉にならずもどかし

鹿児島興業信用組合 横 道 良 民
来るまでは心すまざりし合宿も友と語れば
心ほぐれたり

鹿児島興業信用組合 南 忠 夫
感想発表会開きて

感動し声ふるはして訴ふる友等の言葉胸に響きぬ

第三十二班 (女子学生班三十三班も同じ)

長崎大 関 光子

韓国の山頂きを前にして流るる汗は心地よく
覚ゆ

岡山大 三宅 教子

全体意見発表の時

こみあぐる思ひを述ぶるみ友らの尊き姿よ涙
こみあぐ

実践女子大 青砥 道子

全体意見発表を聞きて

友どちの目かがやきて語りゆく力強き言葉
たのもしと思ふ

九州大 増田 峰子

青草に寝ころびて見上ぐる日の丸は紺碧の空
に映えて輝く

九州女子大 辻 節子

新しき友に思ひを語りつつ我を省みる心苦し
き

玉川大 植村 真理子

友がきのつどひたのしもこよひわれ語らふま
まに心なごみぬ

福岡女子短大 久富 啓子
師の君の燃ゆるがごときみ言葉に耳傾くれば
父しのぼるる

長崎大 川本 琴絵

高谷先生の御講義される姿に感動して
死をかけて歩みし過去を語りたまふ御言葉せ
まりて我が胸苦しも

鹿児島大 厚地 順子

素直なる心を常に持ちたしとしみじみ思ふ合
宿の日々

第三十三班

法政大 白鳥 佐千子

歌をもて心通はしし天皇と国民のこころ胸に
迫り来

岡山大 小田 幾世

み教へにひたすらに耳を傾くる友の横顔尊し
と見ゆ

心から素直に詠みし友の歌に幾度となく涙あ
ふるる

皇学館大 幡掛 節子

難聴御迷惑を願みず参加して
聞きとれぬ師の御言葉に耳すましたただひたす
らに口元を見る

合宿に参加しおもひをふかめたこと

ちははが祈りをこめしいのちゆえわが身ひ
とりのものにはあらず

敵しくは叱るを忘れし父母の年令に気づきて
寂しと思ふ

長崎大 藤野 美和子

何はともあれまことの心もちつづけ生きむと
ぞ思ふただひたすらに

長崎大 江口 篤子

民思ふわが大君の大御歌はじめて触れて心ふ
るふも

実践女子大 坂井 文子

八合目を降り来る人に励まされ歯をくいしば
り頂を仰ぐ

学習院大 小田村 静代

幕末志士の遺歌にふれて
幕末の志士の御歌を心してよめば自づと胸の
ときめく

日の本に生まれしことの有難く思ひ得しとき
のありがたきかな

熊本女子大 加藤 恭子

大君のみ心偲びつつ読みゆけば深き心に涙こ
みあぐ

鹿児島大 春口 涼

天皇の御歌はじめて聞きしより国民思ふ御心
せまり来

鹿児島大 高山 由姫子

天皇の国民おもふ御心を御歌にて知れば胸の熱くなる

佐賀大 徳久 やよひ

感激を語る友らのまなざしに明日への力を見るがうれしさ

九州大 浜田 博子

久々に逢ひし友等のまなざしに去年と変らぬ輝きの見ゆ

指揮班

鹿児島経済大 東条 久

静かなる草原の中に我たちて遠くかすめる桜島見ゆる

発憤せよといふ師の言の葉を糧にして明日より強く生きむと思ふ

鹿児島経済大 横手 満男

合宿の終りになりて知りたりし友の苦心に胸あつくなる

九州大 志賀 健一郎

志篤き人等のまごころを吾いかにして受けつぎゆかむか

大学教官有志協議会

明星大学教授 奥田 克己

いましがた青く澄みぬし大浪の池は見るまに霧にかくれぬ

から国の火口の縁に身を伏せて崖下遠き草の色見る

長崎大学学生部文部事務官 植木 九州男

若きらにおくれとらじと登りゆく御山韓国きびしくもたつ

みどり濃き夏草のなか一もの名知らぬ花の咲きてありけり

吾がごとくあれとさとすか韓国の御山は清く夏空にたつ

会友

東海大学講師 岡村 愛一

韓国山登山

若人におくれとらじとのぼりゆけど時ふるまゝにわが足重し

五合目に足をとどめて頂きを空しく望みつゝ汗拭ひけり

霧島の山眺めつゝひとりしてそぞろにしぬぶ神の世の事

国旗掲揚

朝日さすみどりの庭に日の御旗仰ぎみるかな
若人と共に

合宿参加

たのもしき若き人らとあけくれをすぐすがうれし年老いしわれも

ひたすらに御国思ひつゝ勉めはげむ若き人々のもしきかな

亜細亜大学教授 永井 正

空も山も清くさやけき霧島によき若人と集ふうれしさ

順天堂大学助教授 鈴木 満男

霧島の宿より遙か夏の日の白き光に桜島見ゆ

岡山県作陽高校教諭 松岡 一良

南の海に散りにしわが戦友よ今日の集ひを君に手向けむ

国民文化研究会

国民文化研究会理事長 小田村 富一郎

ホテルの窓からの写生(八月五日)

夕まけて雲そき去りしみんなみの眺めひらけぬ絵に見るごとし

たたなはる山それぞれに藍なして色濃きうすき夕べなるかな

風もなく虫の音聞えしつけさのしみ入るなかに湯けむりの立つ

うすがすむ桜島山なつかしく見ゆる夕はも友
らとつどふに

亜細亜大学教授 夜久正雄

西南学院大学生川久保君の急逝を悼む

聞くにただいたまじきかな合宿に来るべき友
の身まかりにきと

なきがらの滝にうかびて自転車と時計と残る
と聞くもかなしき

たらちねのみおやの心いかならむ旅にてみ子
の死せりと聞きて

合宿にむかふ途中に身まかりし君のなげきを
われら忘れし

来るべき君を待ちけむ友らはも心もくれて君
しのぶらむ

韓国岳登山

友どちとあへぎ語りつのぼりゆく山ちに小草
の花うつくしき

あへぎきて韓国岳のいただきのいはほに立て
り風に吹かれて

絶壁の下に火口の草原のはるかに見えてもの
おともなし

しづかなる火口の原にはるかなる山うぐひす
のこゑのなつかし

下り来てふりかへり見ればいただきを霧こむ
る見ゆ韓国の岳

青草の山べに白く点々と山道をのぼる人のか
げ見ゆ

全体意見発表

沛然と雨ふりいでぬ若きらの全体意見発表の
時

壇上に立ちてをしく若きらが語ることばの
涙ぐましも

騒乱の各大学にかへりゆきてなすべきことを
語るををしき

若きらのををしき声はごうごうと降る雨音に
まぎれざりけり

わが友はためらひ多き人の世のさまを語りぬ
別れにのぞみて

若きらが心のゆくへしのびつゝ語る言葉の身
にしみにけり

雨はれて明るくなりぬ別れゆく友らの旅のゆ
くて思ふに

われらいま別れゆけども相おもふ三百の友あ
りとおもはむ

亜細亜大学学生主事 関正 臣

慰霊祭準備作業（登山に参加せず）

注連縄に下げたる紙垂のさやくに鳴りの爽
けさ風のまにまに

雲がくり韓国岳は見えねども群れ登るとち現
しく偲ばゆ

高谷先生

寝ぬる間も惜しからなくに語らむと仰せし言
葉のありがたき哉

今上天皇御製につきて夜久先生の御講義
をさく

今もなほ寄りゆく民の心をばとり続べますと
聞くが嬉しき

みともしを振りし給へる大御姿を偲びまつれ
ば胸迫るなり

年毎に思ひ新たに日本の民と生れし幸をか
みしむ

熊本県林業研究指導所部長 瀬上安正
全体意見発表に際して

松陰先生の心をつぎて生きむとふ言葉に心た
ざりやますも

若き日に松陰先生の言の葉にいのち見出せし
感激を思ふ

吾子も又此の道行けと共に来て学ぶ此の日に
涙あふれつ

正道を踏みて行けかし若きらよ生き行く道は
けはしかるらむ

全体意見発表の折詠める

緊張はふと和らぎぬ窓の外の庭にしのおく雨
のひとつき

はげしくも降りたる雨はしばしにて日はてり
にけり集ひの窓辺に

小雨になりて日はてりそめぬいづくよりかか
そかにひぐらし鳴きいでにけり

福岡県立若松高校教諭 山田 輝彦
小田村さんの講義を聞く

うちつけに雄叫ぶごとき言の葉よこもる思ひ
をしのびつゝ聞く

烈風に真向ひ歩むこちしてきびしき君が言
葉聞きをり

若きらにわが生涯をかけたりとふ言葉まずぐ
に魂たまに響き来

よき人にめぐりあひたるえにしはもはかなか
るべきうつし世にして

福岡県立修猷館高校教諭 小柳 陽太郎
大浪の池はなつかしたゝかひのたけなはの日に友と遊びき

戦ひに出でゆく前のたまゆらのいのちを惜し
み友と訪ねきつ

みんなみの海に果てにしみ友らもありと思へ
ば胸せまりくる

たゝかひの終りしその日に自らの刃に伏せし
友のみましき

くれなるのみぢうつくしとともどもにめで
にし友よいまはいますず

はるかなる太古の色かとしへにしづもれる
水の色の奇うしき

あは／＼と雲ながれ来て海底に沈むがごとし
池の面は

三菱重工(株) 小泉 一也
いだかれてもろふりつゝ我送るわが子も知
るべし合宿の業こと

たまはりしえにしかしこみ集ひゆくきりしま
思へば力わきいづ

(株)アジアビジョン 加部 隆三
病みこやす母の安否をたしかめて旅立ちにけ
りみなみの国へ

八代のプラットホームで霧島へおもむく友ら
と出あひかたりぬ

から国を見はるかす山ここなりといにしへ人
は名づけたるかや

共同通信論説委員 島田 好衛
雲遠く東の方ををろがみてひたこふるなりす
めらみかどを

学園はいかにあるかと大臣らに問ひ給ひしと
聞くにかしこし

黒雲のおほへるみ代を九重の宮居にひとり歎
きますすらむ

鹿児島大学法文学部助教授 川井 修治
若き友らと韓国岳に登りて

若きらのはたり声にはげまされ登り行く
かも岩ふみしめて
ようやくに頂につけば口々にねぎらひの言葉
かけてくるるも
一杯のとほしき湯茶をわけあひて喉うるほせ
ば生き返ることし
我もまた岩辺に坐してともどもにまどみに入
りぬ心たのしく
縁ありてここに集へる若きらと永遠の生命の
かよひ路ひらかむ
小泉会計事務所 小泉 明
あいろに指をよごして少女らはプリント作
りにいそしみてをり
福岡県立宇美商業高校教諭 小林 国男
韓国岳にて
頂上に近づきくれば眼下まなこに大浪の池ひと目に
見えけり
神秘とも思へるほどの緑濃き色をたたへたり
大浪の池
たたかひにいであつ時しますらをの友らとつ
どひ訪ひし大池
電源開発(株) 長内 俊平
合宿地につきし夜に
いそいそと出で立つ我にふと嘆く妹を残して
夜深く出で来ぬ

ま闇なす道にはあれどゆくまゝに湯の香かほりく深山なるらし

友とねる窓辺にかそけく虫の音もきこえ来るなり真夏といふに

開会式で

小野君が声朗々と開会を宣するきけば胸あふれくる

長崎県経済農協連 内田英賢

川久保君合宿への途中急逝

突然に御子をば失くせし御両親の心の程ぞ思ひやらるる

日商(株) 沢部寿孫

川久保君水死の報に接して

はるばると筑紫野越えて霧島の見ゆる町まで友来ませしに

ふもとまで来ませし友の滝中に逝きしときけばかなし友どち

合宿の友にしあれと思はずも友は逝きしかまみゆることなく

島海利明

やうやくに頂きにつきて見わたせば霧にかくれて高千穂はみえず

皇宮警察本部 亀井孝之

霧島の池をめぐりて

遠くきて見る不動池はコバルトの色も見事に

眼下にひろがる

山の池の水辺に立ちてながめをれば吹きわたりにくる風のすずしさ

韓国岳にて

八代市助役 加藤敏治

大浪の池をし見んと韓国の山路つたひて息せき登るも

つかれたる身を草原に横伏してやすらひをれば鳥のなくなり

まなかひの山肌低くかすめつゝながるる雲足げざやかに見ゆ

大分県国見町教委社会教育主事

三重野 梯次郎

韓国岳に登る

仰ぎみる山路は遠く若き等の既に登れる白きシャツ見ゆ

高山の名しらぬ木々のうすぐらく枝うちかはす道を登りゆく

木々絶えて視界開くるくさ原に谷渡る風さやに吹きくる

佐賀県武雄市会議員 毛利潮

六観音池大杉の下烈々と老師の語る革命の惨

鹿兒島高校教諭 徳田浩士

友に会ふ

懐しき友と草原に腰おろしくさぐさのこと語

るは楽し

霞みたる錦江湾をながめつつ友と語らふ時ぞ楽しき

川崎重工業(株)

山本博資

韓国岳登山

師の君に疲れし身体を励まされ励まされつつ山路たどるも

神々の天降りせしてふ霧島の山は雄々しく美しきかな

八幡製鉄(株) 今林賢郁

憂ふべきことをも憂へずそのままに移ろひゆくか今のこの世は

ただならぬときは人の生くる道のふみにじらるるときにあらずや

鹿兒島県立鹿兒島工業高校教諭

押川公親

霧島合宿所への途中

ただならぬ世のありさまを見つめつゝあつき誠の師を求めゆく

岡山県立笠岡商業高校教諭 名越一荒之助

韓国のいたゞき白き霧のごと雲のよぎればさだかに見えず

日の本の国のいしず急定めたる高千穂仰ぎてつどひしをのこら

安田信託銀行 松 吉 基 順
班別討論にて

真摯なる語りひ聞けばわれもまた黙しえずしてひたに語りぬ

語りあひ終へし後なる若きらの笑みかふ見れば心なごむも

小松電子金属(株) 小 幡 道 男
何よりも姿勢正せとのたまへる師の御言葉は力強しも

熊本県嘉島中学校教諭 北 島 照 明

登山して

夕つかた大観音池の静けさにひぐらしの声しじにきこゆる

日産自動車(株) 古 川 修

先輩らと夜のふくるまで語りひてふとみあぐれば月の美し

山一証券 七 夕 照 正

高谷先生とえびの高原にて

赤松の美しき道を師と共に語りつゝゆくが案しかりけり

宝辺商店経営 宝 辺 正 久

かげもなきかや草のもと吹き出づる汗を拭へば涼しそよ風

いたゞきはそこといへども足なえの仲間といこふ草原涼し

韓国のふもとを遠くもやかすみ薩摩の海は見えわかぬかも

死を誓ひ相別れたる旅にして見し大浪の深き水の色(出征前同志十名による袂別旅行を偲ぶ)

八代市厚生会館事務局長 百 崎 素 明
一年の思ひをこめて待ちわびし師の御言葉は胸迫るなり

玉造・こんや旅館経営 青 砥 宏 一

霧島高原にて

日の本のはじめのときに神々のおりたち給ひしところぞこは

身につもるけがれはらひて高原に神の御声をきかむと思ふ

幼き日雲にそびゆる高千穂とうたひし峯のみえずくやしき

東京鋼鐵工業(株) 大 川 寿 雄

薄もやに見えかくれつつ山あひの池の青さが目にしみ入りぬ

古 川 慶 子

陰にひて黙々と働きし事務局の人の姿を尊しと思ふ

新技術開発事業団 野 間 口 行 正

しんしんと静まる夜に御祖先らの御霊まつるべき時ぞきにけり

くらき夜に四面におきたるかがり火に式台の饌せんのかすみて見ゆる

岡本県立操山高校教諭 三 宅 将 之
未知の友の合宿参加途上事故にあひ急逝されし報に接し

未知の友の合宿目指す途上にてみまかりぬといふその未知の友

天翔ける君がみ霊の霧島の集ひめざしてはせくる思ひす

(株)講談社 磯 貝 保 博

噴きいづる煙をみれば底こもる地鳴りの音の聞こゆる心地す

三井石油化学(株) 西 元 寺 紘 毅

班長と共に
ただひとり黙せる友を気づかひて心くだきぬわが班長は

苦しかる思ひ述べむと努めある友みる君の面輝きぬ

熊本県立御船高校教諭 片 岡 健
慰霊祭にて

朗々とうたひあげたるますらをのしらべすばらし心しまりて

み祖らのみたままつりのかがり火は真闇を照らし燃えさかりゆく

亞細亞大学学生部 千々和 純 一
桜島はるかに望む岡の上に日の丸の旗雄々しく立てり

兵庫県立武庫高校教諭 寺川 真知夫
皇神すめみかみの天降りますとふ高千穂の峯は望めず霧のつゝみて

近畿大学付属小学校教諭 堀切 勝之
今上天皇の御歌をよみて

大君の作り給ひし大御歌の深き御慈愛胸に迫り来

富山県立福光高校教諭 岸本 弘

小田村先生の御講義をお聞きして

至らざる我身なれども師の君の国思ふ心にながりゆかむ

韓国岳に登りて

大浪の池を背にして友達とカメラに向ふ一時の樂し

神奈川県立平沼高校教諭 福田 忠之

合宿を迎へて

今年こそ実のある合宿にせむものと誓ひし友と明日はまみえむ

九大大学院医学研究科 田村 潔

玉のごとき汗をふきつつ登り行く韓国岳の風はずし

(株)千代田コンサルタント 上村 和男
急拠飛行機で合宿地に赴く

仕事おきてやむにやまれず飛び立ちぬともらつどへる霧島の地へ

元自民党鹿児島県連 湯畑堂 義弘
みどりなす赤松の森つきぬけて真白き蒸気天に噴きあぐ

国民文化研究会事務所 山内 健生
立ちのぼる湯けむり見れば天地の初発はつぱつの時の古いにしへしのぼる

神奈川県立翠嵐高校教諭 国武 忠彦
第一回の霧島合宿を偲ぶ

霧島にふたたびきたり思ふかなこの地に集ひし友やいかにと

事務局

最高裁判所秘書課 西川 伍朔
八月三日初孫出産の報を得て

そうせよと言ひし名前をそのまゝに幹太生まると初孫の報らせ

幹のごとく太く生きよと声に出し稚わかき生命いのちへ遠く呼びかく

(写真班)鹿児島大学三年 川 辺 建生
こんには山友達の励ましの強き言葉に歯をくいしばる

降り際に小さき花を見つれたり息切り登りし岩場の横に

(事務局)筑紫女学園高校三年 小柳 怜子
朝一人で散歩して

朝露にぬれたみどりの草中をハミングしつゝ
我は歩きぬ
細道を行き交ふ我らにあいさつをかわす若人の楽しき姿

第二十二班 (追加)

熊本市立江南中学校 竹下 博美

日本の進むべき道をいかにせむとはげしく語る人の尊し

若人を熱と意気とに燃えさせし霧島山を永久に忘れじ

あとがき

国民文化研究会をいつまでも続けるために、相統体制の一環として、この「感想文集」の編集は、昨年に続いて、国民文化研究会の若いグループ層に任せられた。編集者は、そのほとんどが、合宿教室において「運営委員」か「班付の助言者」であった人々で、三十五歳以下の国民文化研究会会員である。

九月にはいると、編集グループは、だれいりとなき、編集打合せのため、連日昼の勤めを終えると、銀座の国民文化研究会の事務所に集まり、夜遅くまで打合せをするようになった。そして約四週間の土・日曜を返上して、合宿したり、徹夜したりしながら、まとめあげたのがこの小冊子です。

今年の合宿参加者は、三百五十名を越えたので、一人の感想文を四百字以内に抑えた。意味が通じないものは別として、なるべく原文のままにしたことは従来通りで、ただ誤字脱字は訂正した。

私たちは、合宿教室の実態を、できるだけありのままに伝えたかったし、また合宿参加者たちに一日でも早く送ってあげたい一心で

この編集に取り組んだ。一人の感想文を何人もでかわるがわる丹念に読み、執筆者の気持ちを汲み取り誤まらぬように努めた。それでも中には、なかなか執筆者の言おうとしているところがかみかず、二日も三日も同じ人の感想文に取りくんだものもあった。他人の文章の一部を抜き出すことは、大変むずかしいことである。

合宿参加者は、四泊五日の緊張した生活体験を、素直な気持ちのままに書き綴っておられる。そのことに編集者たちは、深く心をうたれた。中には、合宿から受けた感銘を、一枚の用紙の裏まで書き綴っておられた方もいた。読みながらうれしい思いがこみあげてきた。和歌の選択は、

いまだ私達に及びかねるので、昨年同様、九州の山田・小柳両先生に、お願いした。ご多忙中、間に合わせて下さって有難かった。また岡山から三宅君、浜松から七夕君が、最終編集の合宿（葉山アサヒビル寮）にかけつけてくれたこと、また、編集と校正その他に

協力された在京の坂東・亀井・柴田・浮田・岩越・山内の諸君及び石井・梅田・河原さんにも心からお礼を申しあげます。

：なお、大学紛争も全国的に拡大・深刻化の様相を示してきており、小、中、高校の教育の現場にも、その影響は少なからず及んでいると思います。一部の不心得な活動家にこうまで日本全体が翻弄されているなどのことは、まことに憂慮にたえません。

合宿に参加された皆さん、どうかお一人お一人が力強く正しい道押し拡げて進んでください。それを切に祈りながらこのこの小冊子をお手許にお送りします。（上村）

（資料）

第十三回合宿教室（霧島）感想文集

非売品

昭和四十三年十月十日発行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七一一〇一八柳瀬ビル

電話（五七二）一五二六、七番

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

編集委員

上村和男・国武忠彦・沢部寿孫

福田忠之・小幡道男・山本博資

野間口行正・磯貝保博・古川修

